八雲町

シラリカ2遺跡

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成11年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

お詫び（北建調報１４２）

本書の中で「日本道路公団札幌支社」とあるのは、
「日本道路公団北海道支社」の誤りです。ご訂正の
上ご利用下さるようお願いいたします。

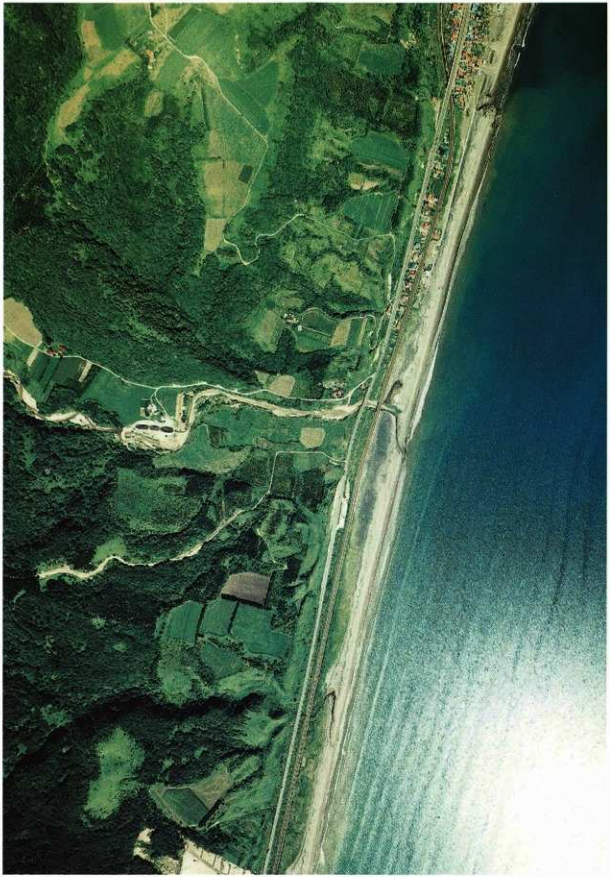
八雲町

シラリカ２遺跡

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成11年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター



シラリカ2遺跡周辺の空中写真（1976年8月29日撮影）
（この写真は国土地理院発行のものを複製したものである）

1　H—2

2　H—2出土土器

1　遺跡遠影（右後方は駒ヶ岳）

2　ヒスイ製玉（原寸）

例　言

1．本書は日本道路公団札幌支社が行う北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)建設工事の伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成11年度に実施した八雲町(やくもちょう)シラリカ2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査は第1調査部第4調査課が担当した。
3．本書の執筆はⅦ章をのぞいて遠藤香澄、藤原秀樹、立田　理が分担し、全体の編集は主に遠藤香澄が行った。文責は各項の文末に記してある。
4．遺物の整理は土器を藤原秀樹、石器等を立田　理が担当した。
5．現地調査の写真撮影は藤原秀樹と立田　理が、室内での遺物の撮影は立田　理が担当した。なおH－2の石器接合資料の写真撮影は小川忠博氏による。
6．ヒスイ製玉の原産地分析は京都大学原子炉実験所の藁科哲男氏に依頼した。
7．動物遺存体の鑑定は千歳さけのふるさと館の高橋　理氏に依頼した。
8．火山灰分析は第1調査部第1調査課花岡正光による。
9．石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡正光の指導のもと立田　理が行った。
10．土器、石器等の実測・トレースは主に小林晴美が、一部を木下はるみが行った。
11．整理、報告書作成が終了後、出土資料および記録類は八雲町教育委員会が保管する。
12．調査にあたっては下記の諸機関、諸氏にご協力、ご指導をいただいた。

北海道教育庁文化課、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町教育委員会、北海道文化財保護協会、八雲町立山崎小学校、株式会社森川組、八雲町郷土資料館　三浦孝一・柴田信一、長万部町教育委員会　佐藤　稔・山田明美・水野一夫・大根田雅美、森町教育委員会　藤田　登、北海道文化財保護協会　竹田輝雄・大山武士・大島秀俊・谷岡康孝・長谷川徹、南茅部町教育委員会　阿部千春・福田祐二、南茅部町埋蔵文化財調査団　小林　貢・佐々木日登美、七飯町教育委員会　石本省三・横山英介・菊池　博・山田　央、函館市教育委員会　佐藤智雄・野村祐一、虻田町教育委員会　角田隆志、伊達市教育委員会　大島直行・青野友哉・小島朋夏、木古内町教育委員会　鈴木正語・菅野文二・三上英則・大矢内愛史・木元　豊・駒田　透、今金町教育委員会　寺崎康史、釧路市埋蔵文化財調査センター　石川　朗、北海道開拓記念館　平川善祥・右代啓視、札幌国際大学　吉崎昌一、青森県森田村教育委員会　佐野忠史

凡　例

1．本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。
　H：住居跡　P：土壙　F：焼土　S：集石　HP：住居跡内の柱穴
2．挿図中の遺物のシンボルマークについては個々に凡例をつけた。
3．掲載した実測図等の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構	1：40	遺物出土状況	1：20
復元土器	1：3	土器拓本	1：2
剥片石器	1：2	礫石器	1：3
土・石製品	1：2	石斧および関連する石器	1：2

4．遺構の規模については以下の要領で示した。一部破壊されているものは現存の長さを（ ）で示してある。
　住居跡・土壙
　確認面での長軸の長さ×短軸の長さ／床面での長軸の長さ×短軸の長さ／最大の深さ（単位cm）
　焼土・集石
　確認面での長軸の長さ×短軸の長さ／最大の厚さ（単位cm）
5．土層の標記は基本土層はローマ数字、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。
　土層注記のうち駒ヶ岳ｄ火山灰は略号；Ｋｏ－ｄを用いている。
6．土層説明には『新版標準土色帖1997年版』を使用した。
7．遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位m）を表している。
8．石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。
　剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。破損しているものについては、その数値を（ ）で括ってある。なお、遺物実測図中でたたき痕はV－V、すり痕は⊢　⊣で範囲を表した。

目　次

口絵カラー
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1　調査要項 …… 1
　2　調査体制 …… 1
　3　調査に至る経緯 …… 2
　4　調査の概要 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 5
　1　位置と環境 …… 9
　2　八雲町内の遺跡 …… 15
Ⅲ　調査の方法 …… 15
　1　発掘区の設定 …… 16
　2　調査の方法 …… 16
　　(1)　発掘調査の方法 …… 16
　　(2)　整理の方法 …… 16
　3　基本層序 …… 17
　4　遺物の分類 …… 22
　　(1)　土器 …… 22
　　(2)　石器等 …… 23
Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物 …… 25
　1　住居跡 …… 26
　2　土壙 …… 43
　3　焼土 …… 45
　4　集石 …… 49
Ⅴ　包含層出土の遺物 …… 51
　1　土器 …… 51
　　(1)　縄文時代早期の土器 …… 51
　　(2)　縄文時代前期の土器 …… 53
　　(3)　縄文時代中期・続縄文時代の土器 …… 74
　2　石器等 …… 81

Ⅵ　Ⅰ層の遺構 …… 95
1　家畜埋葬土壙群 …… 95
Ⅶ　自然科学的分析 …… 97
1　シラリカ２遺跡のテフラについて …… 97
2　八雲町シラリカ２遺跡出土のヒスイ製玉の産地分析　京都大学原子炉実験所　蟇科哲夫 … 99
Ⅷ　成果と課題 …… 107
1　シラリカ２遺跡出土の円筒土器下層式について …… 107
2　森町森川Ａ遺跡から出土した円筒下層式土器について
－北海道開拓記念館収蔵の熊野喜蔵氏収集資料－ …… 117
遺構一覧表・遺物一覧表 …… 125
写真図版 …… 133
引用参考文献 …… 173
報告書抄録
奥付け

挿図目次

Ⅰ　調査の概要
図Ⅰ－1　遺跡周辺の地形と調査区 …… 3
Ⅱ　遺跡の位置と環境
図Ⅱ－1　黒岩之図 …… 5
図Ⅱ－2　遺跡の位置 …… 6
図Ⅱ－3　遺跡周辺の旧地形(1) …… 7
図Ⅱ－4　遺跡周辺の旧地形(2) …… 8
図Ⅱ－5　八雲町内の遺跡(1) …… 11
図Ⅱ－6　八雲町内の遺跡(2) …… 12
Ⅲ　調査の方法
図Ⅲ－1　発掘区設定図 …… 15
図Ⅲ－2　基本土層模式図 …… 17
図Ⅲ－3　土層断面図(1) …… 18
図Ⅲ－4　土層断面図(2) …… 19
図Ⅲ－5　土層断面図(3) …… 20
図Ⅲ－6　土層断面図(4) …… 21
Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物
図Ⅳ－1　最終面の地形と遺構位置図 …… 25
図Ⅳ－2　Ｈ－1 …… 27
図Ⅳ－3　Ｈ－1出土の遺物と遺物出土状況 … 28
図Ⅳ－4　Ｈ－2 …… 30
図Ⅳ－5　Ｈ－2出土の遺物(1) …… 31
図Ⅳ－6　Ｈ－2出土の遺物(2) …… 32
図Ⅳ－7　Ｈ－2出土の遺物(3) …… 33
図Ⅳ－8　Ｈ－2遺物出土状況　土器(1) …… 35
図Ⅳ－9　Ｈ－2遺物出土状況　土器(2) …… 36
図Ⅳ－10　Ｈ－2遺物出土状況　石器 …… 38
図Ⅳ－11　Ｈ－2フレイク集中域の石器(1) … 39
図Ⅳ－12　Ｈ－2フレイク集中域石器接合資料(1) …… 40
図Ⅳ－13　石器接合資料(1)剥片剥離過程資料(1) …… 41
図Ⅳ－14　Ｈ－2フレイク集中域石器接合資料(2) …… 42
図Ⅳ－15　土壙（Ｐ－1・Ｐ－2）と土壙出土の遺物 …… 44
図Ⅳ－16　焼土（Ｆ－1～4）と焼土出土の遺物 …… 46
図Ⅳ－17　焼土（Ｆ－5～9） …… 48
図Ⅳ－18　焼土（Ｆ－10～13）、集石（Ｓ－1） …… 50
Ⅴ　包含層出土の遺物

図Ⅴ－１－１　包含層出土の土器　Ⅰ群 …… 52
図Ⅴ－１－２　包含層出土の土器　Ⅱ群(1) … 57
図Ⅴ－１－３　包含層出土の土器　Ⅱ群(2) … 58
図Ⅴ－１－４　包含層出土の土器　Ⅱ群(3) … 59
図Ⅴ－１－５　包含層出土の土器　Ⅱ群(4) … 60
図Ⅴ－１－６　包含層出土の土器　Ⅱ群(5) … 61
図Ⅴ－１－７　包含層出土の土器　Ⅱ群(6) … 62
図Ⅴ－１－８　包含層出土の土器　Ⅱ群(7) … 63
図Ⅴ－１－９　包含層出土の土器　Ⅱ群(8) … 64
図Ⅴ－１－10　包含層出土の土器　Ⅱ群(9) … 65
図Ⅴ－１－11　包含層出土の土器　Ⅱ群(10) … 66
図Ⅴ－１－12　包含層出土の土器　Ⅱ群(11) … 67
図Ⅴ－１－13　包含層出土の土器　Ⅱ群(12) … 69
図Ⅴ－１－14　包含層出土の土器　Ⅱ群(13) … 70
図Ⅴ－１－15　包含層出土の土器　Ⅱ群(14) … 72
図Ⅴ－１－16　包含層出土の土器　Ⅱ群(15) … 73
図Ⅴ－１－17　包含層出土の土器　Ⅱ群(16) … 74
図Ⅴ－１－18　包含層出土の土器　Ⅲ群・Ⅵ群 …… 74
図Ⅴ－１－19　包含層出土土器の分布(1) …… 75
図Ⅴ－１－20　包含層出土土器の分布(2) …… 76
図Ⅴ－１－21　包含層出土土器の分布(3) …… 77
図Ⅴ－１－22　包含層出土土器（m～rライン）の出土状況(1) …… 78
図Ⅴ－１－23　包含層出土土器（m～rライン）の出土状況(2) …… 79
図Ⅴ－１－24　包含層出土土器（m～rライン）の出土状況(3) …… 80
図Ⅴ－２－１　包含層出土石器等の分布(1) … 83
図Ⅴ－２－２　包含層出土石器等の分布(2) … 84
図Ⅴ－２－３　包含層出土石器等の分布(3) … 85
図Ⅴ－２－４　包含層出土の石器(1) …… 86
図Ⅴ－２－５　包含層出土の石器(2) …… 87
図Ⅴ－２－６　包含層出土の石器(3) …… 88
図Ⅴ－２－７　包含層出土の石器(4) …… 89
図Ⅴ－２－８　包含層出土の石器(5) …… 90
図Ⅴ－２－９　包含層出土の石器(6) …… 91
図Ⅴ－２－10　包含層出土の石器(7) …… 92
図Ⅴ－２－11　包含層出土の石器(8) …… 93
図Ⅴ－２－12　包含層出土の石器(9)・土製品・石製品 …… 94
Ⅵ　Ⅰ層の遺構
図Ⅵ－１　家畜埋葬土壙群位置図 …… 96
Ⅶ　自然科学的分析
図Ⅶ－１　火山灰の採取地点 …… 97
図Ⅶ－２　ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の原材使用分布圏 ……101
図Ⅶ－３　ヒスイ原石の元素比値Ｚｒ／Ｓｒ対Ｓｒ／Ｆｅの分布および分布図 …103
図Ⅶ－４　ヒスイ原石の元素比値Ｃａ／Ｓｉ対Ｓｒ／Ｆｅの分布および分布図 …103
図Ⅶ－５　ヒスイ原石の元素比値Ｎａ／Ｓｉ対Ｍｇ／Ｓｉの分布および分布図 …103
図Ⅶ－６　シラリカ２遺跡出土玉のＺｒ／Ｓｒ対Ｓｒ／Ｆｅの分布 ……104
図Ⅶ－７　シラリカ２遺跡出土玉のＣａ／Ｓｉ対Ｓｒ／Ｆｅの分布 ……104
図Ⅶ－８　シラリカ２遺跡出土玉のＮａ／Ｓｉ対Ｍｇ／Ｓｉの分布 ……104
図Ⅶ－９　シラリカ２遺跡出土玉（64260）の蛍光Ｘ線スペクトル ……105
Ⅷ　成果と課題
図Ⅷ－１　復元土器拓影図(1) ……111
図Ⅷ－２　復元土器拓影図(2) ……112
図Ⅷ－３　復元土器拓影図(3) ……113
図Ⅷ－４　分布域毎の土器のまとまり ……114
図Ⅷ－５　南茅部町ハマナス野遺跡ＨＰ－123出土土器 ……115
図Ⅷ－６　森川式・円筒土器下層ｃ式の分布 ……116
図Ⅷ－７　森川Ａ遺跡出土の土器(1) ……118
図Ⅷ－８　森川Ａ遺跡出土の土器(2) ……119
図Ⅷ－９　森川Ａ遺跡出土の土器(3) ……120
図Ⅷ－10　森川Ａ遺跡出土の土器(4) ……121
図Ⅷ－11　森川Ａ遺跡出土の土器(5) ……122

表目次

表Ⅰ－1　出土遺物一覧表 …… 2
表Ⅱ－1　八雲町内の遺跡 …… 13
表Ⅶ－1　火山灰の鉱物組成 …… 98
表Ⅶ－2　ヒスイ製遺物の原石産地の判定規準(1) …… 102
表Ⅶ－3　ヒスイ製遺物の原石産地の判定規準(2) …… 102
表Ⅶ－4　シラリカ２遺跡出土のヒスイ製玉の元素分析値と比量の結果 …… 105
表Ⅶ－5　シラリカ２遺跡出土のヒスイ製玉の原材産地分析結果 …… 105
表Ⅷ－1　森川式・円筒土器下層ｃ式出土遺跡一覧 …… 110
表－1　遺構規模一覧(1)　住居跡・土壙 …… 125
表－2　遺構規模一覧(2)　焼土・集石 …… 125
表－3　遺構出土遺物一覧 …… 125
表－4　遺構出土復元土器一覧 …… 125
表－5　遺構出土拓本掲載土器一覧 …… 126
表－6　遺構出土掲載石器一覧 …… 127
表－7　出土土器一覧 …… 127
表－8　出土石器一覧 …… 127
表－9　包含層出土復元土器一覧(1)Ⅰ群 …… 128
表－10　包含層出土拓本掲載土器一覧(1)Ⅰ群 …… 128
表－11　包含層出土復元土器一覧(2)Ⅱ群 …… 128
表－12　包含層出土拓本掲載土器一覧(2)Ⅱ群 …… 129
表－13　包含層出土拓本掲載土器一覧(3)Ⅲ・Ⅵ群 …… 131
表－14　包含層出土掲載石器一覧 …… 131

図版目次

写真1　火山灰の顕微鏡写真
（採取地点②、下方ポーラのみ）…… 98
図版1　1　遺跡遠景（南から）……133
2　遺跡近景（手前シラリカ川）
図版2　1　調査状況（駒ヶ岳を望む）……134
2　調査状況（北から）
図版3　1　取り付け道路部分調査終了（北西から）……135
2　本線部分調査終了（北西から）
図版4　1　H－1（西から）……136
2　H－1土層断面（北西から）
3　H－1周辺遺物出土状況（東から）
4　H－2検出状況（北西から）
図版5　1　H－2（南東から）……137
2　H－2覆土土器（図Ⅳ－5－2）出土状況
3　H－2覆土土器（図Ⅳ－5－2）出土状況
図版6　1　H－2床面土器（図Ⅳ－5－1）出土状況 ……138

2 H－2床面土器（図Ⅳ－5－1）出土状況
3 H－2のフレイク集中域1（東から）
4 H－2のフレイク集中域2（北東から）
5 H－2柱穴配置状況（北西から）
6 H－2・HP－1土層断面（南東から）

図版7 1 P－1（北西から）……139
2 P－2（南東から）
3 F－1検出状況（南西から）
4 F－2検出状況（南西から）
5 F－3検出状況（東から）
6 F－4検出状況（南西から）

図版8 1 F－5検出状況（南東から）…140
2 F－6検出状況（北西から）
3 F－7検出状況（南西から）
4 F－8検出状況（北西から）
5 F－9検出状況（南から）
6 F－10検出状況（南西から）

図版9 1 F－11検出状況（南西から）…141
2 F－12検出状況（北東から）
3 F－13検出状況（南から）
4 F－13土層断面（南西から）
5 家畜埋葬土壙6（北から）
6 家畜埋葬土壙1・骨出土状況（北東から）

図版10 1 家畜埋葬土壙群（東から）……142
2 ヒスイ製玉出土状況（k－13区）
3 同左接写
4 土製玉出土状況（M－30区）
5 Ⅳ層土器（Ⅰ群）出土状況（O－18区）

図版11 1 Ⅲ層遺物出土状況（n－16区）…143
2 Ⅲ層遺物出土状況（j－12区）
3 Ⅲ層遺物出土状況（m－14区）
4 Ⅲ層遺物出土状況（m－14区）
5 Ⅲ層遺物出土状況（m－14区）
6 Ⅲ層遺物出土状況（m－16区）

図版12 1 H－1出土の土器（図Ⅳ－3－1）……144
2 H－1出土の遺物
3 H－2出土のⅡ群土器

図版13 1 H－2出土の土器（図Ⅳ－5－1）……145
2 H－2出土の土器（図Ⅳ－5－2）
3 H－2出土の土器（図Ⅳ－5－3）
4 H－2出土の土器（図Ⅳ－5－4）

図版14 1 H－2出土の土器 ……146

図版15 1 H－2出土の石器 ……147

図版16 1 H－2の接合資料1・2 ……148

図版17 1 土壙、焼土、集石出土の遺物 …149

図版18 1 包含層出土のⅠ群土器 ……150
（図Ⅴ－1－1－1）
2 包含層出土のⅠ群土器
（図Ⅴ－1－1－2）
3 包含層出土のⅠ群土器

図版19 1 包含層（j－13区）出土のⅡ群土器……151

図版20 1 包含層出土のⅡ群土器 ……152
（図Ⅴ－1－2－1）
2 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－2－2）
3 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－3－3）
4 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－3－4 口縁部）
5 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－3－4 底部）
6 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－3－5 口縁部）

図版21 1 包含層出土のⅡ群土器 ……153
（図Ⅴ－1－3－5 底部）
2 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－4－6 口縁部）
3 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－4－6 底部）
4 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－5－7）

5 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－5－8）
6 包含層出土のⅡ群土器
（図Ⅴ－1－5－9）
図版22 1 包含層出土のⅡ群土器(1) ……154
図版23 1 包含層出土のⅡ群土器(2) ……155
図版24 1 包含層出土のⅡ群土器(3) ……156
図版25 1 包含層出土のⅡ群土器(4) ……157
図版26 1 包含層出土のⅡ群土器(5) ……158
図版27 1 包含層出土のⅡ群土器(6) ……159
図版28 1 包含層出土のⅡ群土器(7) ……160
図版29 1 包含層出土のⅡ群土器(8) ……161
図版30 1 包含層出土のⅡ群土器(9) ……162
図版31 1 包含層出土のⅡ群土器(10) ……163
図版32 1 包含層出土のⅡ群土器(11)・Ⅲ群・Ⅵ群土器 ……164
図版33 1 包含層出土の石器（石鏃・つまみ付きナイフ） ……165
図版34 1 包含層出土の石器（両面調整石器・スクレイパー） ……166
図版35 1 包含層出土の石器（スクレイパー） ……167
図版36 1 包含層出土の石器（スクレイパー・剥片石器片・石斧） ……168
図版37 1 包含層出土の石器（たたき石・北海道式石冠） ……169
図版38 1 包含層出土の石器（北海道式石冠・偏平打製石器） ……170
図版39 1 包含層出土の石器（偏平打製石器・石錐・石錘・砥石） ……171
図版40 1 包含層出土の石製品（青竜刀形石器・土製品・有孔自然石・ヒスイ製玉） ……172

I 調査の概要

1 調査要項

事 業 名 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査
委 託 者 日本道路公団札幌支社
受 託 者 (財)北海道埋蔵文化財センター
受託期間 平成11年4月1日～平成12年3月31日
現地調査期間 平成11年5月6日～平成11年8月31日
遺 跡 名 シラリカ2遺跡（道教委登載番号 B－16－64）
所 在 地 北海道山越郡八雲町黒岩289・290・586番地
調査面積 4,980㎡（当初予定面積4,350㎡）

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター
理 事 長 大澤 満
専務理事 佐藤哲人（平成11年5月31日まで）
　　宮崎 勝（平成11年6月1日から）
常務理事 木村尚俊
第1調査部長 畑 宏明（平成11年8月15日まで）
　〃　　木村尚俊（平成11年8月16日から 兼務）
第4調査課長 遠藤香澄（発掘担当者）
主 任 鎌田 望
　〃　　藤原秀樹（発掘担当者）
文化財保護主事 立田 理

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄間）は函館市を起点として室蘭・苫小牧・札幌市を経由し名寄市にいたる総延長488kmの路線で、このうち長万部～旭川鷹栖間は既に供用されている。七飯～長万部間の路線については平成5年11月から事業が進められている。この事業に関する埋蔵文化財調査については平成2年4月、日本道路公団札幌支社から事前協議がなされ、協議を受けた北海道教育委員会では平成2年4月および平成7年11月に所在確認調査を、平成7年10月以降順次範囲確認調査を実施している。シラリカ2遺跡については平成2年4月に所在確認調査、平成10年10月と12月に範囲確認調査が実施されている。これまでの調査によると工事計画の変更が不可能なことから発掘調査を必要とする遺跡は八雲町内に5か所、隣接する長万部町内は8か所ある。ただし、これは日本道路公団長万部工事事務所管内（八雲町字立岩～長万部町字富野間の33.3km）にかかる遺跡数である。

八雲町内には北から黒岩3遺跡、シラリカ2遺跡、ポンシラリカ1遺跡、山崎5遺跡、山崎4遺跡の5か所があり、平成10年度から(財)北海道埋蔵文化財センターが委託を受け調査を実施することとなった。初年度は9月と10月に山崎4遺跡の一部3,000㎡（カルバート建設予定地）について調査を行

っている。今年度は黒岩３遺跡を除く４か所の遺跡と函館工事事務所管内の１か所（山越２遺跡）の調査にも一部着手した。シラリカ２遺跡を除く４か所は次年度以降も継続調査される。また、平成11年９月28日から同30日にかけて函館工事事務所管内の山越・野田生・落部地区の遺跡の試掘調査が引き続き北海道教育委員会により行われた。

なお長万部町内の遺跡については平成10年度から㈱北海道埋蔵文化財センターと北海道文化財保護協会および長万部町教育委員会が調査を担当している。センターでは富野３遺跡の調査を終了し報告書を刊行、今年度は豊野６遺跡、花岡２遺跡、花岡３遺跡の調査を行った。

4　調査の概要

遺跡は八雲町の市街地から北西に10kmほど、シラリカ川を南側に見下ろす標高38m～40mの海岸段丘上に立地する。調査範囲は大きく幅60mでほぼ南北に80mほどの「本線部分」とそこから東側に「く」の字状に延びる「取り付け道路部分」からなる。昭和49年に先の土地所有者が移転するまで、主に前者は住宅、馬小屋、牛舎、サイロとして、後者はイモ畑として利用されていた。縄文時代の包含層は畑であった部分では比較的良好に残っていたが、それ以外は大半が撹乱、削平された状態であった。また、本線部分ではその中央付近が沢によって開析されており、調査区南西側縁辺部は急斜面となっている。調査面積については現地での実測および急斜面のため調査不能の範囲が生じたこと等から改めて求積した結果、最終的には630m²増加し4,980m²となった。

検出された遺構は住居跡２軒、土壙２基、焼土跡13か所、集石１か所である。２か所の焼土を除いて、取り付け道路部分から検出されたもので、遺物の濃密に分布する域と重なる。遺物はそのほとんどが縄文前期後葉の円筒下層式期（ｃ式新～ｄ式）に属するもので、遺構は一部を除き同時期のものである。

住居跡（Ｈ－１）は調査区東端から検出された。全体の半分ほどが調査区外に及んでいるため明瞭ではないが平面形は長軸長が３ｍほどの隅丸方形と見られる。伴出する遺物はないが覆土に混入する

表Ⅰ－１　出土遺物一覧表

土器

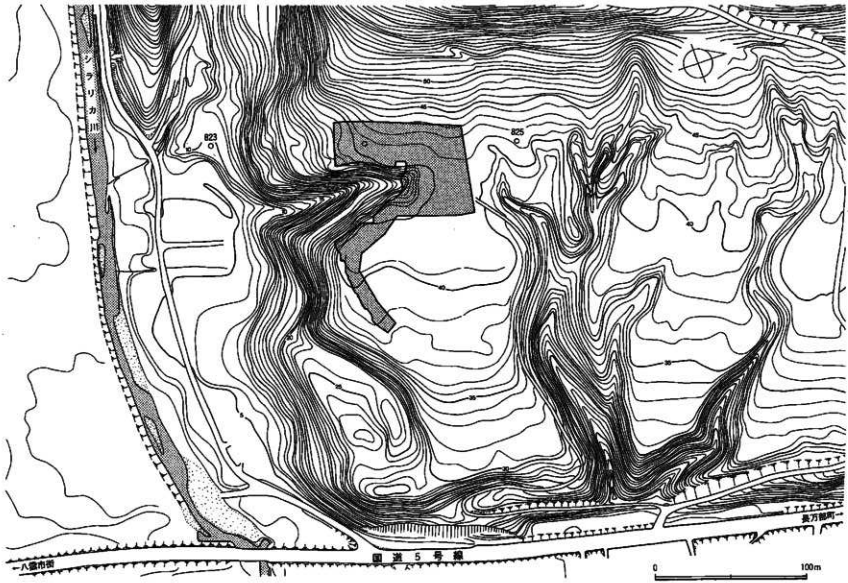
分　類	Ⅰ群ａ類	Ⅰ群ｂ類	Ⅱ群ｂ類	Ⅲ群ａ類	Ⅵ群	不明	計
包含層	13	393	10585	13	1	1	11006
遺　構			574				574
計	13	393	11159	13	1	1	11580

石器

器　種	石鏃	ナイフ	石錐	つまみ付きナイフ	両面調整石器	スクレイパー	剥片石器片	Ｒフレイク	Ｕフレイク	石核	フレイク	石斧	擦切残片	たたき石
包含層	14	2	1	33	14	104	3	86	73	146	25942	11	2	81
遺　構				1		4		1	3	6	1216			6
計	14	2	1	34	14	108	3	87	76	152	27158	11	2	87

器　種	すり石	北海道式石冠	偏平打製石器	石錘	石皿・台石	砥石	石錘	加工痕のある礫	原石	礫・礫片	軽石	土製品	石製品	計
包含層	8	7	22	4	4	5	1	9	153	21125	47	1	5	47903
遺　構	1		2			1			3	627				1871
計	9	7	24	4	4	6	1	9	156	21752	47	1	5	49774

出土遺物合計 61354 点



図Ⅰ－1　遺跡周辺の地形と調査区

褐色火山灰が、5000～6000年前に降下した駒ヶ岳ｇ火山灰（Ｋｏ－ｇ）層（町田・新井1992）の可能性があること、周辺の包含層（Ⅳ層）から東釧路Ⅲ式土器（Ⅰ群ｂ－１類）が出土していることなどから早期後葉に属する可能性がある。またＨ－２は表土を除去した段階でＫｏ－ｄ（駒ヶ岳ｄ火山灰）層の落ち込みとして確認されたものである。規模は直径約3.7m、深さ0.5mの円形で、床面からほぼ等間隔に配された４個の柱穴が検出された。覆土中から頁岩の石核とそれに接合する多量のフレイクが出土している。石器製作に関連する遺構の可能性がある。また、床面からは円筒下層ｃ式相当の土器が、そのやや上位の覆土下層からは下層ｄ式相当の土器が出土している。

土壙ではＰ－1が長径1.3mほどの楕円形でＨ－１と同じ火山灰が流れ込んでいることから早期後葉に属する可能性がある。Ｐ－２は小型で浅い円形で前期後葉のものである。焼土はⅣ層からⅤ層中において検出され、本線部分の北西端から検出された２基（Ｆ－１、Ｆ－２）については時期は不明である。焼土には周辺部から土器片、頁岩のフレイクが多量に検出されるものがある。なおＨ－２の北側から近接して検出されたＰ－２とＦ－13については竪穴に伴う可能性がある。

遺物は包含層、遺構あわせて土器11,580点、石器等49,774点の合計61,354点出土した。このうち包含層からは土器11,006点、石器等47,903点、遺構からは土器574点、石器等1,871点が出土した。前述のように遺物は取り付け道路部分に多く、とくにｈライン以東に土器が集中する区域、フレイクが集中する区域がある。また、調査区中央付近の西側の沢に面した地区では細かく割れた土器片やフレイクが多量に出土していることから、斜面部分が廃棄場所であった可能性が考えられる。

土器はその95％以上が縄文前期後葉の円筒下層式（Ⅱ群ｂ類）に相当するものである。これらにはＨ－２床面から出土している森町森川Ａ遺跡出土資料（熊野・八木1974）に類似する円筒下層ｃ式とみなされる資料（ｂ－１類）と円筒下層ｄ式（ｂ－２類）のものがある。口縁部の把握から個体数が把握され、時期毎にいくつかの分布域が認められるといった結果も得られている。また量的には少ないが早期の東釧路Ⅲ式土器が２個体復元された。ほかに早期の条痕文平底土器（アルトリ式）、東釧路Ⅳ式、中期のサイベツⅦ式相当のものがごく僅かある。また、続縄文時代のものが１点ある。

石器等は定型的なものは非常に少なく頁岩のフレイクと礫・礫片がその大部分を占める。石器はその形態的特徴から縄文時代早期～前期の土器の時期に対応されるものである。剥片石器ではスクレイパーが最も多く、次いでつまみ付きナイフ、石鏃、粗い加工の両面調整石器、ナイフ、石錐がある。また頁岩の石核、原石が多いのが特徴的である。材質は頁岩のものが９割以上を占めるほか、石鏃１点、つまみ付きナイフ５点に黒曜石のものがある。原材産地については肉眼観察では赤井川産、豊浦豊泉産の特徴を持つものが認められる。礫石器ではたたき石が最も多く、ほかに偏平打製石器・北海道式石冠を含めたすり石、石錘、砥石、台石・石皿類、石斧と擦切り残片があり、長軸の両端を打ち欠いた石錘が１点ある。特徴的遺物にはヒスイ製の垂飾、凝灰岩製の青竜刀形石器がある。前者は原産地分析の結果糸魚川青海産硬玉を使用した可能性が高いことが判明した（Ⅵ章－２参照）。後者はⅣ層出土のものであるが、遺物の集中域とは出土地点を異にするため所属時期は不明である。また、加工痕、使用痕は観察されないが遺跡に意図的に持ち込んだと見られる軽石、有孔自然石がある。このほか近代の牛、馬、羊を埋葬した土壙７基が確認されている。　　（遠藤香澄）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　位置と環境

八雲町は渡島半島の北東部、内浦湾（噴火湾）に面し渡島管内で最も広い面積736.47㎢を有する町である。北側はルコツ川を挟み長万部町と南側は茂無部川を境に森町と隣接しこの間の海岸線は34kmに及んでいる。西側は半島を日本海側と太平洋側とに二分する渡島山地を挟んで、桧山支庁の５町（今金町、熊石町、厚沢部町、乙部町、北桧山町）と接している。町域の82％はスギ、トドマツが主体の山林が占める。市街地は「サケ」が遡上することで有名な清流遊楽部川の河口、支流である砂蘭部川によって形成された扇状地の末端部に発達している。落部川、野田追川、奥津内川をはじめ内浦湾に注ぐ大小河川の流域や緩やかに発達した丘陵地帯には酪農を中心とした農家が点在する。北海道の酪農の先進地であり、養殖ホタテの生産基地でもある。“自然美術館の町”のキャッチフレーズ通り、噴火湾を背にすると砂蘭部岳、雄鉾岳、渡島半島の最高峰遊楽部岳（1,276m）、太櫓岳の山並みが、また、南部に広がる丘陵地帯に立つと北東に羊蹄山、南東には駒ヶ岳の優美な姿が一望できる。

町名八雲の旧名は遊楽部、アイヌ語で「ユー・ラップ」（温泉下る川）、あるいは「イ・ウ・ラァ・ペッ」（共に流れる川－支流がたくさん集まって流下るー）と呼んでいたものを、明治14年（1881年）ここに農場を作った旧尾張藩主徳川慶勝候が『古事記』の古歌「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　其の八重垣を」に因んで改名したものである。

遺跡は八雲町の市街地から北へ約10kmにある黒岩地区に所在する。内浦湾に注ぐシラリカ川左岸の標高38m～40mの海岸段丘上に立地する。同じ段丘面の北側に隣接して縄文時代中期の遺跡である黒岩１遺跡、黒岩２遺跡が、北に1.5kmほど離れたＪＲ線黒岩駅裏手の標高45mほどの段丘上には縄文前期・後期の遺跡である黒岩３遺跡がある。市街地から黒岩までの間の海岸平野は低湿で、山崎付近では海岸線と段丘間の幅は比較的広いが遺跡周辺では150m内外と非常に狭くなっている。ヤマセ（南東の風）が吹き荒れる日は現場まで怒涛が聞こえるほどである。最初の入植時期は明らかではないが、大日本帝国陸地測量部の大正６年測図、大正７年発行の五万分の一地形図「訓縫」（図Ⅱ－３）には既に遺跡のある周辺には人家と敷地の範囲が記されている。昭和18年には最後の土地所有者であった鈴木吉治氏が入植し、昭和49年頃に他所に移るまで調査範囲の北西側（高速道路の本線部分）は主に住宅、牛舎と放牧地に、東南側の「く」の字に伸びる範囲（取り付け道路部分）は畑として利用されていた（図Ⅲ－２参照）。当時は、耕作中に馬の蹄に貝岩の破片が突き刺さることがしばしばあったという。

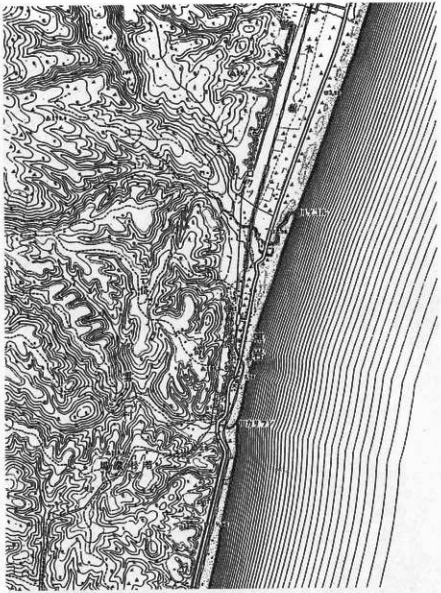
図Ⅱ－１　黒岩之図

黒岩は江戸期から見える地名でアイヌ語地名の「クンネ・シュマ（黒い・岩）」の和訳名である。シラリカ川河口付近から長万部町方面に向かって800mほど、ＪＲ跨線橋の右手の海岸に東屋と祠、鳥居が祀られたゴツゴツとした岩礁が見える。これが地名の由来の「黒岩の奇岩」で、岩にまつわる記録は古くからみえる。寛政３年（1791年）６月、この地を旅した菅江真澄はその日記『えぞのてぶり』にアイヌの人々の言い伝えを書き留め、この岩が「石神・シュマカムイ」として敬われイノヲを削ってさしてあると記

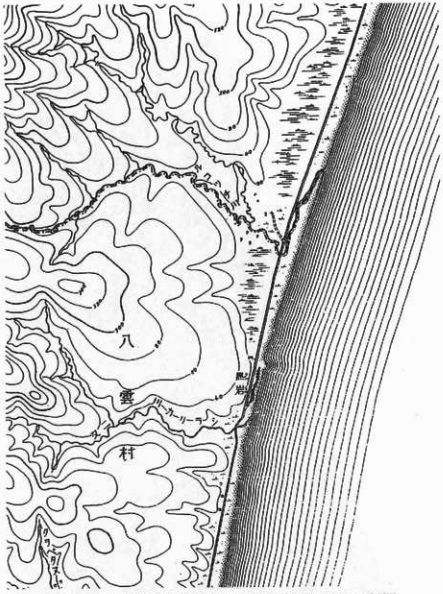
している（宮本・内田編訳1966）。また、弘化２年（1845年）に訪れた探検家松浦武四郎は『初航蝦夷日誌』に絵図を残している。遺跡を海側真正面から見た位置にあたりシラリカ川の河口も描かれている。そして岩を割ると中から丸く白い石が出てくること、雀の卵大の小さいものは玲瓏とし磨くと光るといった記載がみえる（吉田校注1980）。メノウのことであろう。岩礁は地質的には遺跡周辺の露頭で観察される硬質頁岩層と同じ新第三系の「八雲層」に属するもので、黒岩地域のごく狭い範囲に分布する火山角礫岩部層に相当する。この層中にはメノウが含有されている（石田1983）。ちなみに遺跡から出土する大小様々な礫の中には灰白色や半透明のメノウの原石がいくつも認められる。川の名前ともなっているシラリカについては意味に諸説がある。山田秀三氏は「シラル・イカ」（満潮時に潮が岩を越す）と訳している（山田1983）。砂浜ばかりの海岸に突出した黒岩との関連でその様子は充分想像できる。

（遠藤香澄）

図Ⅱ－２　遺跡の位置



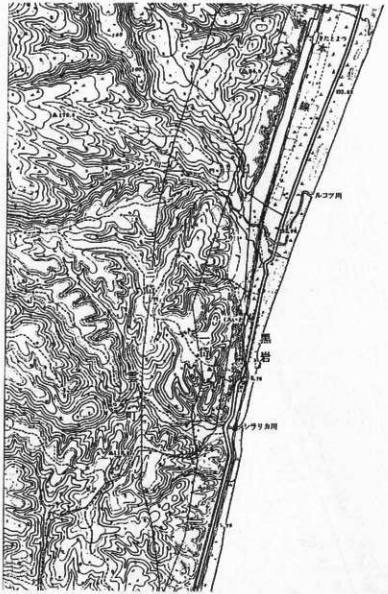
（この図は大日本帝国陸地測量部、大正６年測図、大正７年発行、五万分の一地形図「調磧」の一部を複製したものである。）



（この図は大日本帝国陸地測量部、明治29年製版の仮製五万分の一地形図「黒岩」を複製したものである。）

図Ⅱ－３　遺跡周辺の旧地形（１）

（この写真は昭和22年９月撮影の空中写真を複製したものである。）



（この図は大正６年測量、昭和28年修正測量、昭和31年地理調査所発行の仮製版五万分の一地形図「国縫」を複製したものである。）

図Ⅱ－４　遺跡周辺の旧地形（２）

2．八雲町内の遺跡

平成11年11月現在、八雲町内では旧石器時代から縄文時代、続縄文時代、擦文時代にかけての59か所の遺跡が登載されている。縄文時代を主体とする時期の複合する遺跡が8割以上を占め、その多くが内浦湾に面した標高20m～40mほど、高いところでは標高60mの海岸段丘上に立地する。とくにハシノスベツ川から野田生地区にかけての約７kmの間には24か所もの遺跡が連綿と連なっており海岸線全域が遺跡といっても過言ではない。浜松地区あるコタン温泉遺跡はプユウヒ川左岸の標高25mほどの段丘上に立地する遺跡で、昭和62年(1987年)から５か年にわたり調査が行われ、縄文中期から後、晩期にかけての多数の住居跡、土壙、貝塚等の遺構と55万点にも上る遺物が検出されている（三浦・柴田1992)。野田追川以南では落部、栄浜地区にかけての海岸沿いに７か所の遺跡が点在する。町の最も南側、森町との境を流れる茂無川左岸の段丘上には縄文前期後半から続縄文時代にかけての大規模な集落跡である栄浜１遺跡がある。昭和56年（1981年）以降４度の調査が行われ48万点にものぼる多量の遺物および多数の遺構が検出されたもので、最終的面積は100,000㎡前後にも広がると予想されている（三浦・柴田1998)。

町の北部に目を転ずると、山崎川と長万部町との境界であるルコツ川にかけて発達する標高30m～40mの海岸段丘上に今年度調査したシラリカ２遺跡、山崎４遺跡をはじめ８か所の遺跡がある。ほかにシラリカ川右岸の標高10mの河岸段丘上に１か所、山崎川左岸の河岸段丘上にも２か所確認されている。内陸部では遊楽部川上流の上八雲地区に発達した標高60m～70mの河岸段丘上に旧石器時代の遺跡群のあることが古くから知られている。中流域の春日地区の河岸段丘上にも１か所確認されている。また町の南東部を流れる野田追川流域の河岸段丘上には４か所の遺跡がある。

このほか市街地の西側を北流する（遊楽部川の支流である）砂蘭部川によって形成された標高10m～14mの平坦な扇状地上には４か所の遺跡がある。これまで調査された遺跡の成果を中心として町内の遺跡を概観することとする。

旧石器時代の遺跡

八雲町の市街地から11kmほど離れた遊楽部川上流の上八雲、富咲地区の標高60m～70mの低位段丘上にある大関校庭遺跡、上八雲１遺跡、富咲遺跡、上八雲２遺跡、ナンマッカ遺跡、上八雲４遺跡、上八雲５遺跡、上八雲６遺跡の８か所が確認されている。遺跡は遊楽部川を挟み互いに直線距離にして2.5kmほどの狭い範囲に点在している。昭和34年大関小・中学校の校庭からの黒曜石製と頁岩製の石器が採集され、これが契機となり上八雲地区の旧石器の遺跡群が次々と見つかり調査されることとなった。大関校庭遺跡（当時は大関遺跡と呼称）は昭和35年（1960年）に当時函館博物館の吉崎昌一氏らにより調査がなされている。平成５年（1992年）の調査では焼土跡とオショロッコ型細石刃核、石鏃形の尖頭器、細石刃、両面調整石器等の細石器文化の良好な資料が出土している（三浦・柴田1993)。道南を代表する旧石器の遺跡として知られているトワルベツ遺跡（旧称）は上八雲１遺跡が該当するものと見られる。

縄文時代早期の遺跡

早期の遺跡は少ないが貝殻文・条痕文・沈線文土器が山崎１遺跡・八雲３遺跡・浜松２遺跡・大新遺跡・栄浜１遺跡・コタン温泉遺跡から得られている。八雲３遺跡は砂蘭部川の扇状地に立地する町内で最も低い地点に位置する遺跡（標高10m～11m）で、比較的まとまった資料がある。口縁部に貫通孔があるもの、押引文のあるもの等有珠川下層の資料（有珠川２式）に対比される土器と早期に伴うとみられる石錘、擦切り残片、断面三角形のすり石などが出土している（三浦1990)。山崎１遺跡

からはキャリパー状の器形をもつ物見台式が出土している（三浦1980・1984）。浜松２遺跡にはアルトリ式に相当する沈線文、帖付文のある土器があり、ほかに絡条体圧痕文の施文された道東部の浦幌式と同様の文様構成を持つ土器が出土している（三浦・柴田1991）。また今年度当埋文センターで調査した山崎４遺跡からはアルトリ式期の住居跡が２軒検出されている（北海道埋蔵文化財センター2000ｂ）。

東釧路式系土器は東釧路Ⅲ式が八雲３遺跡（三浦1990）とシラリカ２遺跡から、中茶路式が山崎１遺跡・八雲３遺跡から、東釧路Ⅳ式は山崎４遺跡からそれぞれごく少量出土している。

縄文時代前期の遺跡

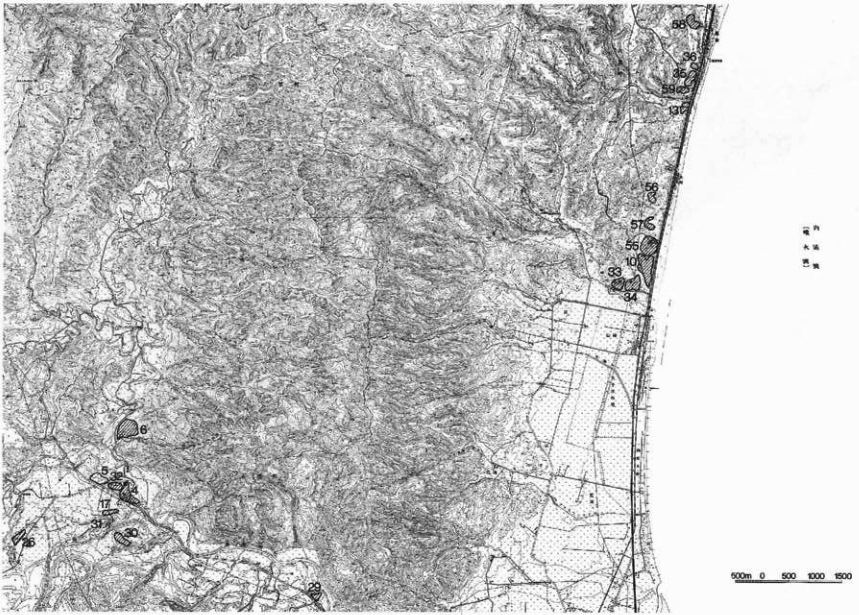
前半期の縄文尖底土器の遺跡はほとんど見つかっていない。八雲３遺跡に結束羽状縄文の施された尖底とみられる土器がある。続く円筒下層式の前半期も同様であるがコタン温泉遺跡からは円筒下層ｂ式、ｃ式相当の土器が出土している。円筒下層式ｄ式期以降増加する傾向にある。栄浜１遺跡では下層式ｄ式期の住居跡が５軒検出されている（三浦・柴田1987・1998）。このうち１軒は（200号）はベンチ状の構造を持つものである。コタン温泉遺跡の第３貝塚は前期から後期に形成された貝塚であるが、円筒下層ｄ式の埋設土器、甕棺墓、人骨、鹿角製の銛頭等豊富な資料が得られている。元山牧場遺跡は田川賢蔵氏によって昭和32年に調査された元山遺跡が該当するとみられる。詳細は不明ではあるが前期の住居が６軒調査されている（田川1958）。浜松５遺跡では住居跡１軒が検出されている（三浦・柴田1995）。このほか山崎１遺跡と山越６遺跡（三浦・柴田1988）からは断片的な資料が得られている。今年度調査したシラリカ２遺跡では多数の遺物とともに円筒下層ｃ式末からｄ式期と見られる４本柱の円形の住居跡が検出されている。

縄文時代中期の遺跡

中期になると遺跡は急増する。北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードによると町内の９割以上の遺跡から円筒土器上層式が検出されている。栄浜１遺跡は前期後半から引き続き中期末葉の煉瓦台式に至るまでの大集落が形成されている。住居跡は200軒にものぼり、墓を含む土壙は500基を上回り、配石遺構も検出されている。一部後期初頭に属するものもあるがその大半が中期後半の所産と考えられている。平成９年度の調査では軽石を加工した『家形石製品』が出土し縄文時代の住居の形態を伝える遺物として注目を集めた（三浦・柴田1998）。コタン温泉遺跡からは中期の可能性のある住居跡が４軒検出されている。また浜中１遺跡は浜中遺跡あるいは稲尾崎遺跡と呼ばれていた遺跡で、昭和34年、同37年に早稲田大学の桜井清彦氏らによって調査された落部遺跡が該当する。円筒上層式を伴う住居跡が検出されている（桜井1961・1964）。このほか大新遺跡の調査では円筒上層ｂ式期の住居跡が２軒と土壙７基（柴田1997）が、旭丘１遺跡からは見晴町式期の住居跡が１軒検出されている（三浦・柴田1998ｂ）。

縄文時代後期の遺跡

後期前葉から中葉にかけての住居跡、墓壙等を伴う良好な遺跡群が浜松地区にある。コタン温泉遺跡では後期前半のトリサキ式、大津式、白坂３式期に属する住居跡が10数軒と墓を含む多数の土壙、貝塚が検出されている。住居跡は石組炉を伴うものが多い。第３貝塚のうち後期に形成された貝層からは骨角牙製品が多数出土しており、平成９年には骨角製品、貝製品、土器等346点が国指定の重要文化財となっている。プユウヒ川を挟みコタン温泉遺跡の東側にある浜松5遺跡の調査ではトリサキ式～大津式期の住居跡12軒と配石遺構（墓）42基、埋甕土器２、土壙65基が検出されている。配石墓は住居跡の集中する地区から離れて検出されたもので墓域を形成しており、全体の構造は近年注目を集めた函館市石倉貝塚と同様の大型配石遺構の特徴を示している。同じく沢を挟んで隣接する浜松２



図Ⅱ－5　八雲町内の遺跡（1）

（この図は国土地理院発行２万５千分の１地形図「ルコツ岳」「黒岩」「上八雲」「八雲」を複製縮小したものである。）

図Ⅱ－6　八雲町内の遺跡（2）

（この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「八雲」「山越」「落部」を複製縮小したものである。）

遺跡からは後期中葉の鍔澗式期の入口構造を持つ住居跡２軒と配石遺構11基が検出されている。後者には道指定史跡の小樽市地鎮山ストーン・サークル・函館市日吉遺跡・南茅部町臼尻遺跡（臼尻小学校遺跡）の資料に関連する、木柱がめぐり、床面に石敷のある隅丸長方形の土壙を伴うものが１基（４号）ある。墓壙からは糸魚川産のヒスイ製の玉が出土している（三浦・柴田1991）。白坂３式は台の上遺跡、手稲式土器は山越５遺跡（三浦・柴田1988）でややまとまっている。このほか豊林式期の資料はコタン温泉遺跡から少量得られている。

縄文時代晩期の遺跡

晩期を主体とする遺跡は少ない。栄浜１遺跡・台の上遺跡・山越５遺跡で大洞C_2式、A式があり、山越５遺跡ではこの時期の土壙が３基検出され、このうち１基ではタンネトウＬ式土器が共伴している（三浦・柴田1988）。タンネトウＬ式は山越２遺跡・八雲１遺跡・八雲２遺跡・桜野２遺跡・桜野３遺跡からも確認されている。コタン温泉遺跡では高野Ｖ群（大洞Ｂ式）から尾白内Ｉ群（大洞Ａ´式）までの資料が出土している。このほか浜松２遺跡からもごく僅か得られている。

続縄文時代の遺跡

続縄文時代の遺跡は比較的多く18か所を数える。発掘調査に加え八雲高校郷土史研究部の踏査により発見された資料がある。山崎１遺跡は、恵山式期の遺跡は既に消失している可能性が高いが、昭和20年代後半には完形土器が幾つも採集されるほどの良好な遺跡であったらしい（柴田1991ａ）。浜中１遺跡は昭和34年・同37年の調査で、恵山式土器を伴う墓壙３基、住居跡の一部、小貝塚１か所と多量の土器・石器、魚形石器等が報告されている（桜井1961・1964）。魚形石器については両遺跡から発掘資料とは別に採集資料がある（柴田1991ｂ）。

後北式土器は遺構に伴わず出土する傾向にあるが、栄浜１遺跡から後北Ａ式～C_2式の良好な資料が得られている（柴田1995）。このほか後北Ｂ、C_1式が山越６遺跡・山越２遺跡・台の上遺跡・栄浜１遺跡・大新遺跡・トコタン２遺跡から出土してる。台の上遺跡では後北式に混在して弥生系土器（天王山式）が出土している。

擦文時代の遺跡

熱田川左岸の海岸段丘の先端部にあるトコタン２遺跡、町の北部シラリカ川左岸の河岸段丘上にあるシラリカ遺跡が知られている。トコタン２遺跡は昭和42年（1967年）の調査で、床面に土師器の甕形土器２個を伴った住居跡が報告されている（武田・山田1968、三浦1984）。（遠藤香澄）

表Ⅱ－１　八雲町内の遺跡

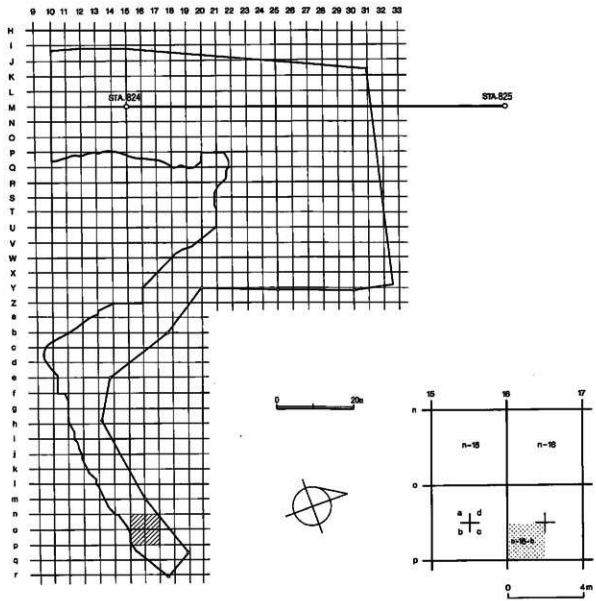
図番号	遺跡名	登録番号	所在地	立地（）内標高	時期	文献・備考
1	オクフナイ遺跡	B-16-1	浜松１、31、394ほか	鬼鹿内川右岸の海岸段丘(標高8～20m)	続縄文	採集資料あり。柴田（1991a）
2	トコタン１遺跡	B-16-2	熱田441ほか	ポン鬼鹿内川左岸の海岸段丘	中期・後期・続縄文	田川（1955）のトコタン遺跡C地点
3	浜松１遺跡	B-16-4	浜松259ほか	海岸段丘（20～28m）	中期	
4	大開校庭遺跡	B-16-5	上八雲2961ほか	遠楽部川河岸段丘（70～75m）	旧石器	昭和35年調査の大開遺跡。吉崎(1961)、三浦・柴田(1993)
5	上八雲１遺跡	B-16-7	上八雲2286ほか	遠楽部川の河岸段丘(70～80m)	旧石器	昭和35年・39年調査トリルベツ遺跡か。吉崎（1961）
6	富咲遺跡	B-16-8	富咲1641ほか	遠楽部川河岸段丘（60～65m）	旧石器	
7	コタン温泉遺跡	B-16-9	浜松281	ブユウヒ川左岸海岸段丘(31～34m)	早期～晩期・続縄文	三浦・柴田（1992）
8	大新遺跡	B-16-10	大新471ほか	砂間部川屈状地の扇央（32m）	早・中・晩期・続縄文	三浦・柴田（1997・1998a）
9	山越１遺跡	B-16-11	山越434～１ほか	海岸段丘（30m）	中期	
10	山崎１遺跡	B-16-12	山崎1541ほか	海岸段丘（20～40m）	早期～晩期・続縄文	三浦(1982・1984) 採集資料あり。柴田(1991a・1991b)
11	台の上遺跡	B-16-13	東野5054ほか	磨田道川の河岸段丘(15～20m)	中期～晩期・続縄文	三浦（1997）
12	八雲１遺跡	B-16-14	旧富町40・41・42	砂間部川の扇状地（10m）	中期・晩期	

図番号	遺跡名	登載番号	所在地	立地（ ）内標高	時期	文献・備考
13	シラリカ遺跡	B-16-15	黒岩100ほか	シラリカ川河岸段丘（5～10m）	続縄文・擦文	採集資料あり。柴田（1991b）
14	小金沢遺跡	B-16-16	東野625ほか	野田追川右岸の河岸段丘（40m）	中期	
15	浜中1遺跡	B-16-17	落部470ほか	海岸段丘（14～15m）	続縄文	昭和34年・37年調査の落部遺跡。桜井（1961・1964）
16	桜野1遺跡	B-16-18	桜野25－1ほか	野田追川の河岸段丘（60～65m）	中期	
17	上八雲2遺跡	B-16-19	上八雲334ほか	遊楽部川の河岸段丘（85m）	旧石器	
18	元山牧場遺跡	B-16-21	浜松105ほか	通脇川左岸海岸段丘（20～30m）	前期・中期	昭和32年調査の栄山遺跡。田川（1958）
19	八雲2遺跡	B-16-22	相生町116ほか	砂蘭部川の扇状地（20～28m）	晩期	
20	トコタン2遺跡	B-16-23	熱田17ほか	海岸段丘（17～38m）	中期・続縄文・擦文	昭和42年・55年調査の熱田遺跡。武内・山田（1968）
21	浜松2遺跡	B-16-25	浜松123ほか	ブユウヒ川右岸海岸段丘（20～30m）	早期～晩期	三浦（1989）三浦・柴田（1991）
22	浜松3遺跡	B-16-27	浜松224ほか	海岸段丘（25～32m）	中期	
23	熱田1遺跡	B-16-28	熱田223－1、－2	トコタン川右岸の砂丘	続縄文	
24	鉄山遺跡	B-16-29	浜松517ほか	海岸段丘（60m）	後期	
25	新牧場遺跡	B-16-30	東野757ほか	海岸段丘（30m）	後期	昭和49年町文化財調査員が所在確認調査。三浦（1984）
26	ナンマッカ遺跡	B-16-31	上八雲252ほか	遊楽部川の河岸段丘（105m）	旧石器	採集資料あり。三浦（1984）
27	トコタン3遺跡	B-16-32	熱田62ほか	海岸段丘（35m）	中期	
28	栄浜1遺跡	B-16-33	栄浜92ほか	茂無川左岸海岸段丘（32～36m）	前期～晩期・続縄文	三浦（1983・1998）、三浦・柴田（1986・1987）、柴田（1991b・1995）
29	春日1遺跡	B-16-34	春日24ほか	遊楽部川左岸河岸段丘（14m）	後期・晩期	
30	上八雲4遺跡	B-16-35	上八雲502－4・6	遊楽部川河岸段丘（100m）	旧石器	
31	上八雲5遺跡	B-16-36	上八雲502－431	遊楽部川河岸段丘（60m）	旧石器	
32	上八雲6遺跡	B-16-37	上八雲290－1ほか	独立丘（80m）	旧石器	採集資料あり。三浦（1984）
33	山崎2遺跡	B-16-38	山崎154ほか	山崎川の河岸段丘（17～25m）	前期・中期・続縄文	
34	山崎3遺跡	B-16-39	山崎364ほか	山崎川左岸河岸段丘（15～32m）	前期・中期	
35	黒岩1遺跡	B-16-40	黒岩275ほか	海岸段丘（38m）	中期	
36	黒岩2遺跡	B-16-41	黒岩261ほか	海岸段丘（40m）	中期	
37	八雲3遺跡	B-16-42	三杉町26	砂蘭部川の扇状地（14m）	早期・前期・晩期	三浦（1990）
38	浜松4遺跡	B-16-43	浜松254ほか	海岸段丘（20～24m）	晩期・擦文	
39	山越2遺跡	B-16-44	山越349ほか	境川右岸の海岸段丘（20～30m）	前期～晩期・続縄文	平成11年度調査。住居跡2　土壙1　焼土5ほか。調査継続
40	山越3遺跡	B-16-45	山越402－1ほか	境川左岸の海岸段丘（32～34m）	前期～晩期	
41	山越4遺跡	B-16-46	山越324ほか	海岸段丘（30～39m）	中期	
42	野田生1遺跡	B-16-47	野田生307ほか	海岸段丘（33～30m）	中期	
43	野田生2遺跡	B-16-48	野田生355ほか	海岸段丘（34～39m）	中期	
44	野田生3遺跡	B-16-49	野田生394ほか	海岸段丘（25～37m）	中期	
45	野田生4遺跡	B-16-50	野田生378ほか	海岸段丘（26～38m）	中期	
46	野田生5遺跡	B-16-51	野田生303ほか	海岸段丘（30～35m）	中期	
47	桜野2遺跡	B-16-52	桜野41－1ほか	野田追川の河岸段丘（70～75m）	中期・晩期	
48	桜野3遺跡	B-16-53	桜野22ほか	野田追川の河岸段丘（80～85m）	中期・晩期	
49	浜中2遺跡	B-16-54	落部459ほか	海岸段丘（15～18m）	続縄文	
50	栄浜2遺跡	B-16-55	栄浜214ほか	海岸段丘（31m）	中期	
51	山越5遺跡	B-16-56	山越475・476	海岸段丘（14m）	前期～晩期	三浦・柴田（1988）
52	山越6遺跡	B-16-57	山越214・474・475	海岸段丘（14m）	中期・続縄文	三浦・柴田（1988）
53	浜松5遺跡	B-16-58	浜松114－1ほか	海岸段丘（10～30m）	早・後・晩期・続縄文	三浦・柴田（1995）
54	旭丘1遺跡	B-16-59	旭丘3－8ほか	海岸段丘（42～55m）	前・中・晩期・続縄文	三浦・柴田（1998b）
55	山崎4遺跡	B-16-60	山崎213－1ほか	海岸段丘（25～45m）	早期～後期	平成10・11年度調査。住居跡10　土壙20ほか。調査継続
56	ポンシラリカ1遺跡	B-16-61	黒岩692－1ほか	海岸段丘（30m）	早期～後期	平成11年度調査。土壙1　焼土5ほか。調査継続
57	山崎5遺跡	B-16-62	山崎195－1～4	海岸段丘（35～40m）	前期・中期	平成11年度調査。土壙2　焼土1ほか。調査継続
58	黒岩3遺跡	B-16-63	黒岩245ほか	海岸段丘（45m）	前期・後期	
59	シラリカ2遺跡	B-16-64	黒岩289・290ほか	シラリカ川左岸海岸段丘（40m）	早期～中期・続縄文	平成11年度調査。本報告書

Ⅲ　調査の方法

1　発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車（七飯～長万部間）八雲北工事区測量図（縮尺1000分の1）を使用した。工事区予定中央線上の中心杭であるＳＴＡ.824とＳＴＡ.825とを結び延長し、これを基準のMラインとした。Mラインから４m毎に西側へむかってL、K…、東側も同様にN、O…としアルファベットの大文字が一巡した後は小文字ａ、ｂ、ｃ…とした。またＳＴＡ.824を通りこれに直交する線を15ラインとし４m毎に南側へむかって14、13…、同様に北側へ16、17…としそれぞれの交差する地点に杭を打設した。発掘区はこの４m方眼を基本とし、その西側（図左上）の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される（例えばｎ－15、ｎ－16など）。また、調査の必要



図Ⅲ－１　発掘区設定図

に応じて2m方眼（小発掘区）に分割し遺物の取り上げを行ったところもある。小発掘区は杭のある側（南西端）から時計と反対回りにａ、ｂ、ｃ、ｄを付し、“ｏ－16－ａ、ｏ－16－ｂ”のように呼称される。

なおMラインはN－19.5°－Eである。

この方眼の平面直角座標は第Ⅸ系で以下のとおりである。

ＳＴＡ.824　（調査区杭番号M－15）X＝－182710.359　Y＝－2962.597
ＳＴＡ.824＋40（調査区杭番号M－25）X＝－182672.739　Y＝－2975.622
ＳＴＡ.825　X＝－182615.810　Y＝－2995.159（調査範囲外）

2　調査の方法

(1)発掘調査の方法

発掘調査に先行し重機により耕作土、表土を除去し、建築物の基礎等の産業廃棄物を搬出した。調査区の設定および境界杭、４m方眼の基準杭打設は業者に委託した。表土除去の段階で「本線部分」にあたるＫライン～Ｙライン間では包含層の残っている部分がごく僅かで、大部分が住宅、牛舎の建設、道路の敷設等によりⅣ層中まで削平、攪乱されている状態であることがわかった。その反面、Ｙライン以東の「取り付け道路部分」では一部木根が残ってはいたが、Ⅲ層以下の包含層は概ね良好に残存していた。また、測量の結果、図面上の範囲と実際の地形とが合致せず、調査不能な急斜面部が調査範囲に組み込まれていることも判明した。

このようなことから本線部分についてはスコップ、ジョレン、移植ゴテを併用した遺構確認を主体とする調査範囲とした。また、斜面部分については可能な範囲で遺物収集を中心とした調査を行うこととした。取り付け道路部分については耕作土中（Ⅰ層）の遺物についても一部採集し、その後Ⅲ層、Ⅳ層、部分的にはⅢ層とⅢｂ層に分層し調査を進めた。遺物の取り上げは本来的包含層が残っている範囲では２m方眼の小発掘区で取り上げ、また、移植ゴテで一回に掘り下げる深さを３㎝～５㎝程度とし、その掘り下げ回数についても取り上げの際にビニール袋に明記した（たとえばⅢ層２回目）。さらに遺物が集中し層位的に捉えられることが予想されたｈライン以東の地区では小発掘区による取り上げに加え、遺物収集帳を用い出土位置、標高、層位を計測して取り上げを行った。遺構の遺物についてはほぼ全点計測してある。

(2)整理の方法

現地では遺物取り上げ後、水洗し大まかな分類を行い遺物台帳、遺物カードを作成した。遺物のうち小発掘区で取り上げたものについては、掘り下げ回数と共に台帳、カードの備考欄に書き入れた。台帳整理が終ったものから順次注記作業を行った。土器片、定型的石器、遺構出土のものおよびⅢ層、Ⅲｂ層、Ⅳ層出土の頁岩のフレイクのうち位置を計測したものを対象に、遺跡名の略号、遺物番号、出土層位を記した。現地での整理と併行して一部札幌の事務所において土器の接合、石器の実測を進めた。

冬期の室内整理作業では遺物収集帳の点検、台帳の補正、土器の接合・復元作業、頁岩の剥片類の接合作業、遺物の実測および作図、集計、記録類の整理を行った。

土器については分類の見直しを行い接合作業を進めた。接合・復元作業にあったっては同一個体の破片を把握することに努めた。また、発掘区ごとの口縁部破片を抽出し個体数を把握した。実測図では、断面は最も器形の特徴を表している部分を表現するために90度回転させた位置で実測したもの、現存部分を実測し復元したものもある。破片資料は文様構成・器形の分かる口縁部および底部破片を

中心に拓影図を作成した。整理作業終了後の収納は報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載のものは図版に対応するように1点ずつ収納し、それ以外のものについては分類ごとに遺構別、包含層のものについては「a～dライン」のように大きな範囲でまとめ層位別に収納した。なお、包含層の資料については口縁部、胴部、底部に分け収納したほか同一個体と見られるものはひとつにまとめた。

石器については分類の見直しを行い、これと並行して完形品を中心に器種や形態に偏りのないように選びだして実測し、これらの報告書掲載石器に限り、最大長、最大幅、重さについて計測した。ヒスイ製の玉については原材産地同定の分析を依頼した（Ⅶ章－2）。また、遺構出土の頁岩のフレイクについては同一母岩の識別に努め接合作業を行った。整理終了後の収納は報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載のものは図版に対応するように1点ずつ収納し、それ以外のものについては細分類した器種ごとに遺構別に、包含層のものについては発掘区別あるいは土器同様に大きな範囲でまとめ層位別に収納した。ただしⅢ層よりも下位のものについては一括したものもある。

（遠藤香澄）

3　基本層序

土層は八雲町教育委員会によるこれまでの調査に準じて6層に分層した。調査区全域に耕作による撹乱があるため、土層区分が整然と残っている範囲は少ない。なお、調査区東側では比較的良好に土層がとらえられ、Ⅲ層がさらに分層できた区域がある。

Ⅰ　層：黒褐色土（7.5YR2/2）　耕作土、表土。Ｋｏ－ｄが混じる。傾斜部分は耕作が及ばず、表土が残る。

Ⅱ　層：駒ヶ岳火山灰　Ｋｏ－ｄ

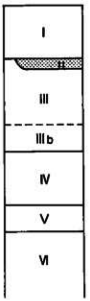
Ⅲ　層：黒色土（7.5YR1.7/1～2/1）　シルト質。粘性、しまり弱。乾燥するとクラックが入る。

Ⅲｂ層：黒褐色土（7.5YR2/2）　シルト質。粘性弱、しまりやや強い。Ⅲ層とⅣ層の漸移層。

Ⅳ　層：黒褐～暗褐色（7.5YR1/3～3/3）　シルト質粘土。粘性は下方ほど強く、しまり強。所々に褐色火山灰が混じる。（褐色火山灰についてはⅧ－1章参照）

Ⅴ　層：暗褐色土（7.5YR3/4）　漸移層。粘性、しまり強。

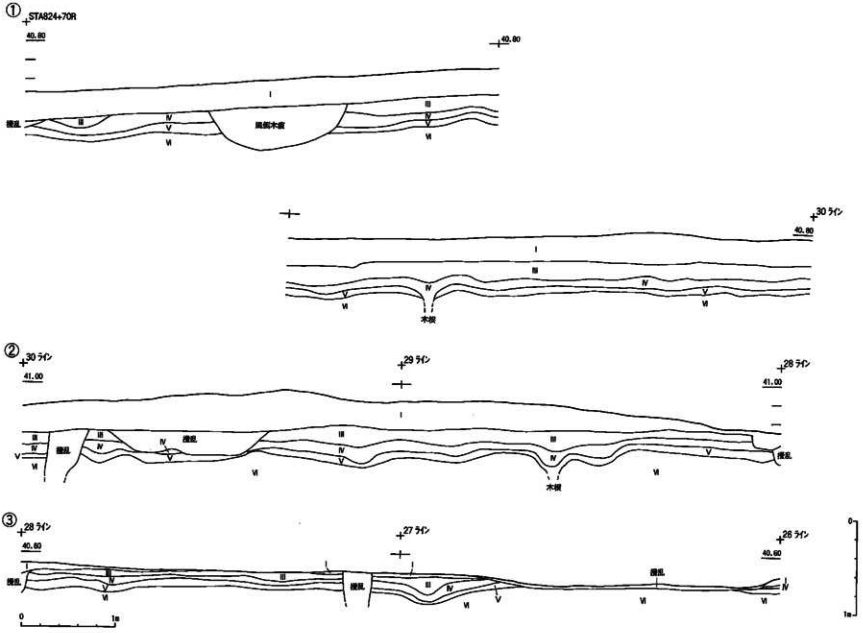
Ⅵ　層：褐色土（7.5YR4/4～4/6）　褐色ローム。より下位では頁岩を含む。



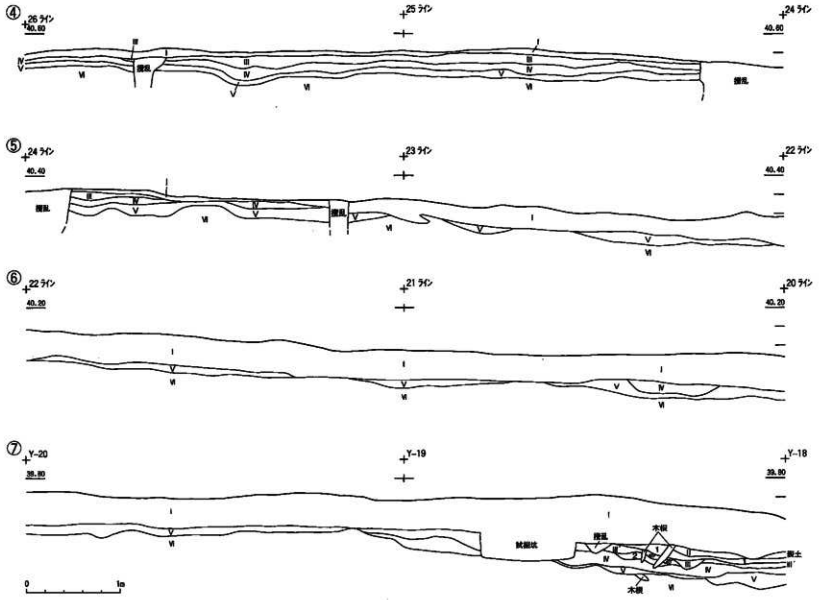
図Ⅱ－2　基本土層模式図

遺物の本来的包含層はⅢ層（縄文時代中期以降）、Ⅲ層～Ⅳ層上面（縄文時代前期）、Ⅳ層～Ⅴ層（縄文時代早期）である。傾斜部分では黒色土が流出しており、遺物も移動しているため、本来的包含層から出土しないものもあった。

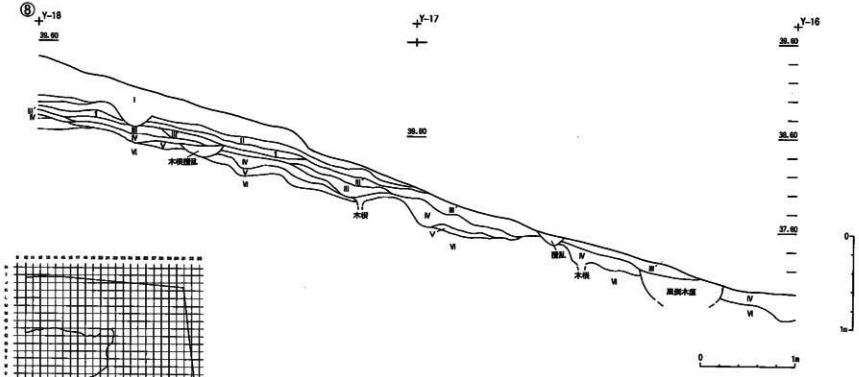
（藤原秀樹）

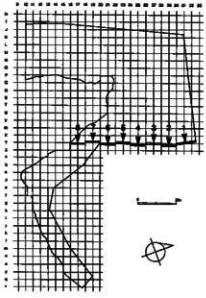

①
STA824+70R
40.80
40.80
I
III
IV
V
VI
撹乱
風倒木痕
30 ライン
40.80
I
III
IV
V
VI
木根
②
30 ライン
41.00
29 ライン
28 ライン
41.00
I
III
IV
V
VI
撹乱
木根
③
28 ライン
40.60
27 ライン
26 ライン
40.60
撹乱
0
1m

図Ⅲ－3　土層断面図（1）


④
26ライン
25ライン
24ライン
40.60
盛土
⑤
24ライン
23ライン
22ライン
40.40
盛土
⑥
22ライン
21ライン
20ライン
40.20
⑦
Y-20
Y-19
Y-18
39.80
試掘坑
木根
盛土
0
1m

図Ⅱ－4　土層断面図（2）



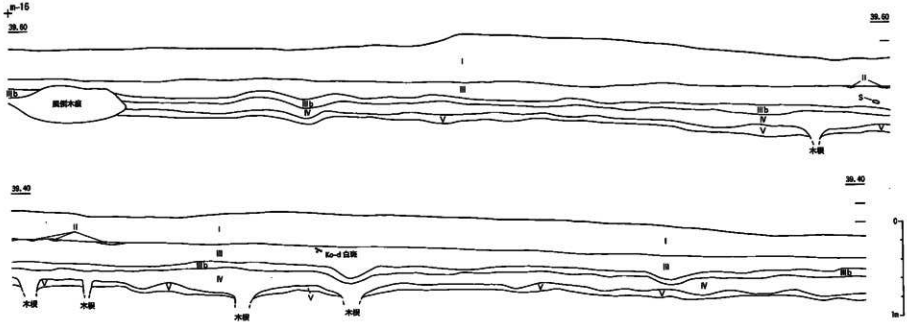


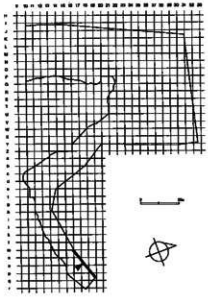
（メインセクション土層）

Ⅰ 層：黒褐色土(7.5YR2/2)　耕作土、Ⅱ層が混じる。
Ⅱ 層：にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4)　駒ケ岳火山灰（Ko-d）
Ⅲ 層：黒色土(7.5YR2/1)　ポソポソでボール状となる部分がある。粘性強。
Ⅲ'層：暗褐色土(7.5YR2/3)　傾斜地で腐植が厚いⅢ層。ポソポソでボール状となる。しまり、粘性弱。
Ⅳ 層：暗褐色～黒褐色土(7.5YR3/3～2/3)　しまり、粘性やや強い。
Ⅴ 層：褐～暗褐色土(7.5YR4/4～3/4)　漸移層。ブロック状にロームが混じる。しまり、粘性強。
Ⅵ 層：褐色土(7.5YR4/6)　しまり、粘性強。

1　：暗褐色～褐色土(7.5YR3/3～4/4)　粘性やや強く、しまり弱。(Ⅴ＋Ⅵ)
2　：褐色土(10YR3/4)　粘性強く、しまり弱。(Ⅴ＋Ⅵ)
いずれも、傾斜地に二次堆積したⅥ層と考えられる。

図Ⅱ－5　土層断面図（3）





調査区東角

（m～qライン土層）

Ⅰ 層	黒褐色土(7.5YR2/2)	耕作土、Ⅱ層が混じる。
Ⅱ 層	にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)	駒ケ岳火山灰（Ko-d）
Ⅲ 層	黒色土(7.5YR1.7/1)	乾燥するとクラックが入る。しまり、粘性強。
Ⅲb 層	黒褐色土(7.5YR2/2)	Ⅲ層とⅣ層の漸移層。しまりやや強く、粘性弱。
Ⅳ 層	黒褐色～極暗褐色土(7.5YR1/3～2/3)	しまりやや強。粘性は下方ほど強くなる。所々に褐色火山灰が混じる。
Ⅴ 層	暗褐色土(7.5YR3/4)	漸移層。しまり、粘性強。
Ⅵ 層	褐色土(7.5YR4/4)	しまり、粘性強。

図Ⅲ－6　土層断面図（4）

4　遺物の分類

(1)土器の分類

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。

また、a・b類に2分したものはa類が前半、b類が後半を意味する。同様にa・b・c類に分類したものはa類が前葉、b類が中葉、c類が後葉を意味する。

このうち、本遺跡ではⅣ群、Ⅴ群、Ⅶ群に相当する資料は出土していない。

［Ⅰ群］縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

a類：条痕文平底土器。アルトリ式に相当するもの。

b類：縄文、撚糸文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群

b－1類：東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの。

b－2類：コッタロ式に相当するもの。

b－3類：中茶路式に相当するもの。

b－4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

［Ⅱ群］縄文時代前期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

a類：縄文尖底土器群。

b類：円筒土器下層式に相当するもの。

b－1類：円筒土器下層c式もしくはそれ以前に相当するもの。サイベ沢Ⅰ式、森川式に相当するもの。

b－2類：円筒土器下層d式に相当するもの。サイベ沢Ⅱ式に相当するもの。

［Ⅲ群］縄文時代中期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

a類：円筒土器上層式に相当する土器群。

b類：中期後半の土器群。

［Ⅳ群］縄文時代後期に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

a類：余市式、タプコプ式、手稲砂山式、入江式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの。

b類：ウサクマイC式、船泊上層式、手稲式、鉈澗式に相当するもの。

c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの。

［Ⅴ群］縄文時代晩期に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

a類：大洞B式、大洞B－C式に相当するもの。

b類：大洞C1式、大洞C2式に相当するもの。
c類：大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

［Ⅵ群］続縄文時代に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。
a類：恵山式以前に相当するもの。
b類：恵山式に相当するもの。
c類：後北式に相当するもの。

［Ⅶ群］擦文時代に属する土器群

⑵石器等

シラリカ2遺跡で出土した石器を剥片石器群、磨製石器群、礫石器群、土製品・石製品群に大別し、その中で器種による分類を行った。以下に大別ごとに器種名を示す。

剥片石器群	石鏃	磨製石器群	磨製石斧
	石槍・ナイフ		研磨石材
	石錐		擦り切り残片
	両面調整石器		
	つまみ付きナイフ		
	箆状石器		
	スクレイパー		
	剥片石器片		
	Rフレイク		
	Uフレイク		
	石核		
	フレイク		
礫石器群	たたき石	土・石製品群	土玉
	すり石		青竜刀形石器
	・北海道式石冠		有孔自然石
	・偏平打製石器		玉
	石錘		
	石錘		
	砥石		
	石皿・台石		
	加工痕のある礫		
	原石		
	礫・礫片		

次に大別した分類に従って本遺跡出土の石器群を各群ごとに出土例を考慮し、分類上不明瞭な点があると思われるものについては根拠を記し、特徴のあるものについては具体的な出土例をあげた。

剥片石器群

剥片石器群とは、主に頁岩等の石材を用いて剥片を素材として製作される石器を剥片石器とし、それに素材である剥片そのもの、剥片を得た結果生じた石核を加え総称したものである。

石槍・ナイフは、両面細部調整によって刃部を作り出す石器であり、明瞭に先端があり、おおむね左右対称につくられるものは石槍とし、先端がはっきりせず、左右対称ではないものについてはナイフとした。破片では両者の区別は不可能であり、またどちらに属するか判断に迷う資料もあることから、同じ項目に含めた。

両面調整石器は、剥片の両面が調整されるものの、細部調整による刃部を持たず、比較的粗い調整によって製作されるもので、八木B遺跡（阿部1992）等で出土している粗工両面調整品と呼ばれるものを含んでいる。ナイフとの違いは細部調整による直線状の刃部の有無である。

スクレイパーは、剥片の片面を細部調整によって刃部を作り出すものを総称したもので、剥片の素材の形状を大きく変えないもの、刃部が直線状のもの、内湾、外反するもの等の種類がある。

剥片石器片は剥片石器のおおむね1／2以下の破片で器種を特定できないものである。

Rフレイクは、加工痕とみられる連続しない剥離のある剥片である。

Uフレイクは微細な剥離のある剥片である。

磨製石器群

磨製石器群とは研磨によって刃部を作る磨製石斧を中心として、その製作工程にかかわるとみられるものを総称したものである。

研磨石材は緑色泥岩等の石斧の素材とみられる礫で、研磨した痕跡があるものである。

礫石器群

礫石器群とは主に安山岩、流紋岩等の礫を用いて製作される石器を総称したものである。また他の石器群には含まれない礫・礫片は礫石器の素材となりうることを考慮して便宜上ここに含めた。さらに原石は本来、剥片石器群に含まれるものであるが、本遺跡で多く出土している基盤層中に含まれる自然礫と剥片石器の素材である頁岩原石との区別は困難であったため、あえて礫石器群の中に含めた。

すり石は点数が多いため、北海道式石冠、偏平打製石器、すり石に細分した。

加工痕のある礫は、器種を特定できない意図の不明瞭な加工のみられる石器である。

土・石製品群

遺跡から出土した土器以外の遺物の中で、上記の分類に含まれないものを総称した。

土製品は、土玉が1点出土している。有孔自然石とは虫喰い石等と呼ばれるものである。自然石であるが、装飾品としての用途を考慮して石製品に含めることとした。玉ではヒスイ製の垂飾が、青竜刀形石器は凝灰岩製のものがそれぞれ1例ずつ出土している。（立田　理）

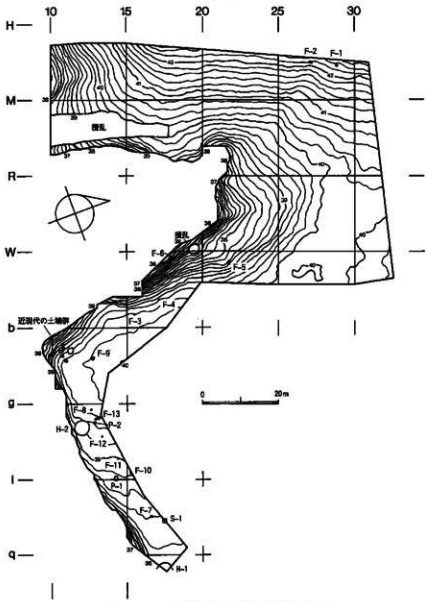
Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

遺構の概要

シラリカ２遺跡の調査区から遺構は、住居跡２軒（Ｈ－１・２）、土壙２基（Ｐ－１・２）、焼土13ヵ所（Ｆ－１～13）、集石１基（Ｓ－１）が検出された。Ｆ－１・２を除いてWラインよりも東側（図下方、取り付け道路部分）に分布し、遺物の濃淡と符合している。

Ｈ－１、Ｐ－１は検出層位、覆土中の火山灰から縄文時代早期後半の遺構と推定される。Ｆ－１・２は検出層位から縄文時代の遺構と推測されるが、周囲に遺物がなく詳しい時期は不明である。残るＨ－２、Ｐ－２、Ｆ－３～13、Ｓ－１はこの遺跡の主体となる縄文時代前期後半の遺構である。

Ｆ－３～６は調査区中央にある大きな沢に面した西側斜面に位置する。この場所は、斜面に沿って流れるように多くの土器片やフレイク・チップなどが散在していた。石器製作の作業場もしくは土器・石器の廃棄行為に関係した遺構の可能性がある。



図Ⅳ－１　最終面の地形と遺構位置図

Ｈ－１・２、Ｐ－１・２、Ｆ－７～13はｂラインよりも東側（下方）の段丘上平坦部に位置する。

Ｈ－２は段丘縁に位置し、床面から１個体、やや浮いて１個体のⅡ群ｂ類土器がつぶれた状態で出土した。住居内に炉は無く、隣接するＰ－２、Ｆ－13がＨ－２に関連するかと考えられる。

また、Ｆ－７・10では周辺から頁岩のフレイク・チップが大量に出土している。　（藤原秀樹）

１　住居跡

Ｈ－１　（図Ⅳ－２・３、表１・３～６、図版４・12）

位　置　ｑ－17－ｂ・ｃ、ｒ－17－ｄ

規　模　(302)×(174)／(272)×(159)／14

平面形　隅丸方形？

確認調査　Ⅴ層上面まで掘り下げた時点で、暗褐色土のまとまりを確認した。さらに掘り下げると、調査区壁に明瞭な立ち上がりが確認されたので、住居跡と認定した。なお、調査範囲の関係で全体の３分の２ほどは調査区外に広がっており、炉は確認できなかった。

壁・床　掘りこみはやや浅く、断面観察からⅣ層中と考えられる。壁はなだらかに立ちあがり、床面は平坦である。

覆　土　５層に分層した。１・２層は基本層序のⅢ層、Ⅲｂ層に対応する土層である。また、１層には褐色火山灰が混じっており、住居跡はこの火山灰降下以前に作られている。（火山灰については Ⅶ章－１参照）

柱　穴　柱穴と思われるものは５ヵ所確認された。調査範囲の関係もあり、明瞭な配列はとらえられなかった。なお、ＨＰ－２は木根攪乱である可能性が強い。

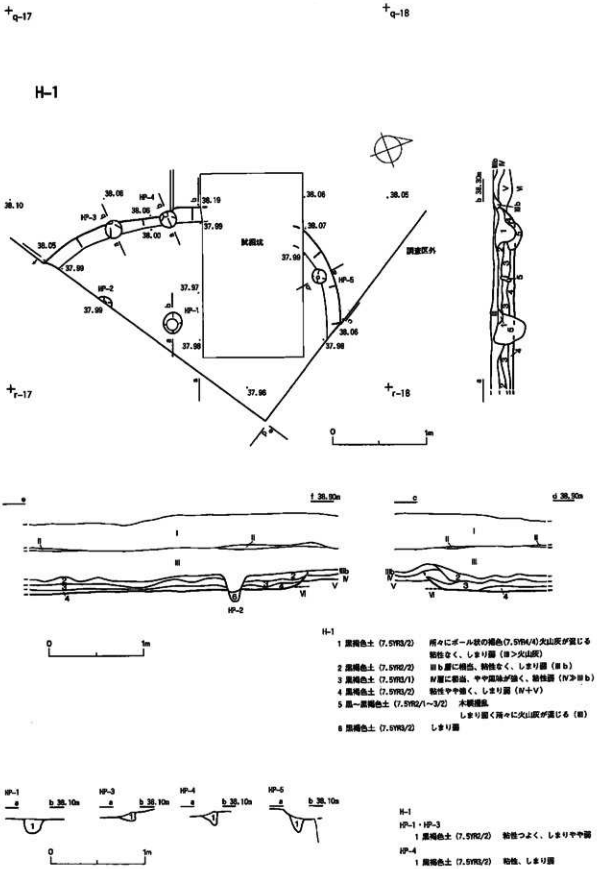
遺　物　覆土中からⅡ群ｂ類土器13点、スクレイパー１点、石核１点、Ｕフレイク２点、フレイク19点、原石１点、礫・礫片32点の合計69点が出土した。いずれも住居址廃絶後に堆積した黒色土（Ⅲ層、Ⅲｂ層＝覆土２層）中の出土である。

１はＨ－１トレンチ内と、住居に隣接した包含層中からまとまって出土した土器片が接合したものである。口縁部は欠失している。筒形で胴部がやや膨らむ器形である。胴部上半は少なくとも２段の結束第１種の羽状縄文が施され、下半は撚り戻しの斜行縄文となっている。底部はやや上げ底気味である。内面は磨かれているが、調整はやや雑で輪積みの痕跡が凸凹となって確認できる。

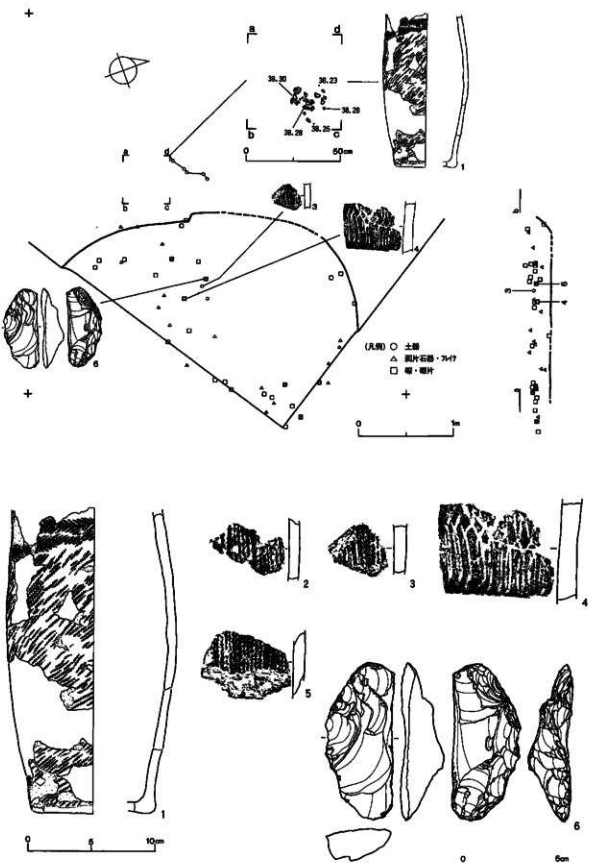
２は５の遺構外包含層中出土土器と同一個体である。２・３・５はいずれも薄手で撚糸文が施文されており、内面は平滑で炭化物が付着している。４は撚糸文と網目状撚糸文が施文されたもの。胎土に小石が入り、焼成は良好で内面は平滑である。

６はスクレイパーである。横長剥片を利用し、打点側を刃部としている。

時　期　住居内出土の土器はその層位から住居廃絶後の遺物と考えられる。住居の掘りこみが早期の包含層であるⅣ層であること、覆土に縄文時代早期に降下したと推測される火山灰が見られること、近接して復元できたⅠ群ｂ－１類の土器が出土している（図Ⅴ－１－３）ことから、早期後半の遺構と考えられる。　（藤原秀樹）


q-17
q-18
H-1
38.10
38.05
38.06
38.00
38.19
37.99
38.07
37.97
37.98
37.96
HP-1
HP-2
HP-3
HP-4
HP-5
試掘坑
調査区外
r-17
r-18
0
1m
e
f 38.50m
c
d 38.50m
I
II
III
IV
V
VI
HP-2
H-1
1 黒褐色土 (7.5YR3/2)　所々にボール状の褐色(7.5YR4/4)火山灰が混じる 粘性なく、しまり弱（III>火山灰）
2 黒褐色土 (7.5YR2/2)　III b層に相当、粘性なく、しまり弱（III b）
3 黒褐色土 (7.5YR3/1)　IV層に相当、やや黒味が強く、粘性弱（IV≫III b）
4 黒褐色土 (7.5YR3/2)　粘性やや強く、しまり弱（IV+V）
5 黒～黒褐色土 (7.5YR2/1～3/2)　木炭混乱 しまり弱く所々に火山灰が混じる（III）
6 黒褐色土 (7.5YR3/2)　しまり弱
HP-1
HP-3
HP-4
HP-5
a
b 38.10m
H-1
HP-1・HP-3
1 黒褐色土 (7.5YR2/2)　粘性つよく、しまりやや弱
HP-4
1 黒褐色土 (7.5YR3/2)　粘性、しまり弱
HP-5
1 暗褐色土 (7.5YR3/3)　しまり弱

図Ⅳ－2　H－1



図Ⅳ－３　Ｈ－１出土の遺物と遺物出土状況

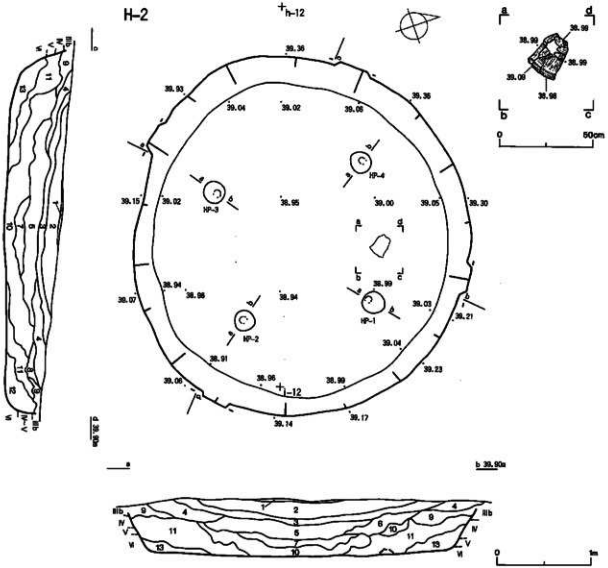
H－2 （図Ⅳ－4～14、表1～6、図版5・6・12～16）
位 置 h－11－c・d、h－12－a・b
規 模 378×364／326×320／50
平面形 円形
確認調査 調査区西側のシラリカ川に向かって張り出す段丘先端部分の平坦面に位置する。Ⅲ層上面を精査中、円形に広がる火山灰の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を通るようにトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果、平坦な床面とやや急激に立ち上がる壁を確認し、住居跡であることがわかった。またこの住居跡の北側に隣接するP－2とF－13は位置的にこの住居跡の付属施設である可能性がある。覆土中からフレイクの集中域を2ヶ所検出した。検出した層は11層上面と、5層下である。それぞれフレイク集中域1、2とした。これらに関しては後述する。
壁・床 壁は全周しやや急激に立ち上がる。床はほぼ平坦である。
覆 土 覆土は大きく2つに分けられる。上位に堆積する自然堆積の黒褐色土とその下位から床面までに堆積するいわゆる汚れた土である。上位の自然堆積は、1～9層が相当し、Ⅲ層～Ⅲb層相当の黒褐色土である。これらは住居の中心に最大の厚さがあるいわゆるレンズ状の堆積となっている。下位の汚れた土は10～13層に相当し、中心付近が皿状にくぼんで堆積している。壁際付近に40cm、住居跡の中心付近で約10cmをはかる。土層の状態は、黄褐色土を基調に黒色土、灰褐色土をブロック状に含んでいる。この下位の堆積土は堆積状況から屋根を覆っていたか、あるいは壁付近に盛られていた可能性がある。
柱 穴 床面を5cm程掘り下げた時点で、柱穴を4個検出した。最も西に位置するものから、HP－1～4の番号を付けて調査した。深さはHP－1から順に、66、62、66、56（cm）である。HP－1と3には木痕跡が確認できた。これらは住居の外側に向かってやや傾斜している。柱穴はいずれも抜取跡は確認できなかった。
遺 物 遺物はⅡ群b類土器552点、スクレイパー3点、たたき石5点、すり石1点、偏平打製石器1点、砥石1点、石核5点、Rフレイク1点、Uフレイク1点、フレイク1,178点、頁岩原石2点、礫・礫片581点、焼成粘土塊7点の合計2,338点が出土した。この内、床面出土のものは土器92点（1個体）、石核1点、フレイク31点、礫・礫片18点の合計142点である。

遺物の取り上げにあたっては、4・5・6・8・9層から出土した遺物を覆土1層、7層のものを覆土2層、10～12層のものを覆土3層、13層のものを覆土4層として区別して取り上げた。

1は床面、2～23、25～27は覆土中出土の土器である。土器は4個体が復元できた。

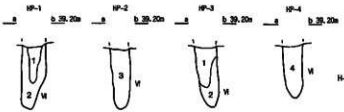
1は床面につぶれた状態で出土したⅡ群b－1類土器。小型で底部から広がりながら直線的に開き、口縁部付近でわずかに外反する。口唇部は指頭により調整され、小波状的口縁となっている。内面は磨かれているが、輪積の凹凸が認められ、器面も凹凸が著しい。文様は胴部全体に撚糸文を施した後、口縁部には更に2段の結束1種羽状縄文が施されている。羽状縄文の原体は所々で上下逆にされ、X字状もしくは菱形を呈するが、上段・下段での原体逆転は対応せず、規則性は認められない。

2は床面から浮いてつぶれた状態で出土したⅡ群b－2類土器。筒形で胴上半がわずかに膨らみ、口縁部は直線的に立ちあがる。薄手で内面は丁寧に磨かれているが、わずかに凹凸が確認できる。口唇断面は尖り気味で、4ヵ所がわずかに高い波状口縁を呈する。口縁部文様帯は狭く、細いLの原体による2条の縄線文があり、口唇部直下の縄線文上には部分的に斜行縄文が施されている。胴部は自縄自巻的縄文と6段の結束1種羽状縄文によりすだれ状縄文を構成している。なお、胴部文様施文後、所々に縦方向の綾絡文が施されている。



H-2

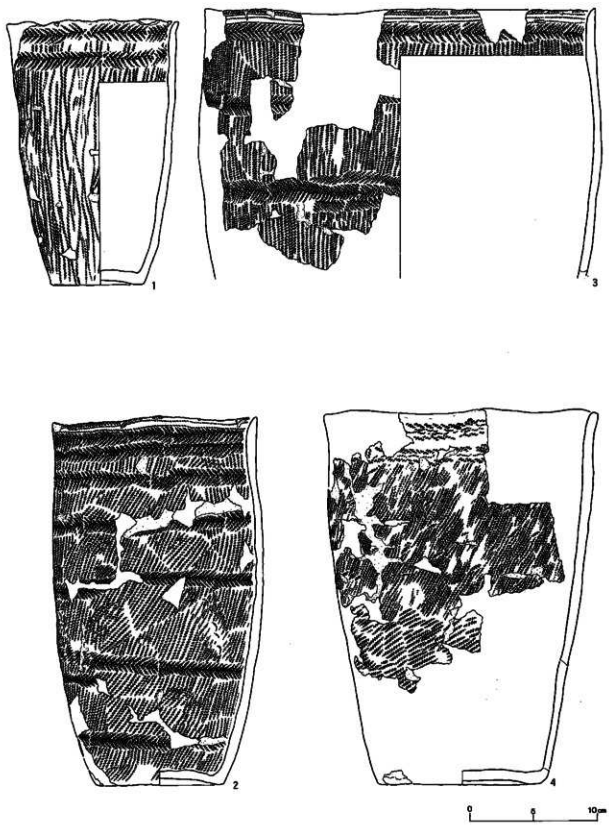
1 灰白色砂質土（10YR7/1）　Ko-d
2 黒色土（7.5YR2/1）　Ⅲ層に根出、ややしまりあり（Ⅲ）
3 暗赤褐色土（5YR3/2）　粘性あり、しまりややあり
4 黒褐色土（7.5YR3/1）　Ⅲ層に根出、しまりなし（Ⅲ）
5 黒褐色土（5YR2/1）　粘性あり、しまりややあり
6 黒褐色土（7.5YR2/2）　黄褐色土粒を少量含む、粘性あり、しまりなし
7 黒色土（7.5YR2/1）　上下の層が斑状に混入する、粘性、しまりあり
8 褐灰色土（7.5YR4/1）　黄褐色土粒を含む、しまりなし
9 暗褐色土（7.5YR3/3）　黄褐色土粒を含む、しまりなし
10 明黄褐色土（10YR6/6）　黒色土ブロック・黄褐色土粒を多く含む、しまりなし
11 明黄褐色土（10YR6/8）　黒色土ブロックを少量、黄褐色土粒を多く含む
12 明黄褐色土（10YR6/8）　黄褐色土粒を含む、しまりなし
13 褐灰色土（10YR4/1）　黄褐色土粒を含む、粘性あり、しまりなし



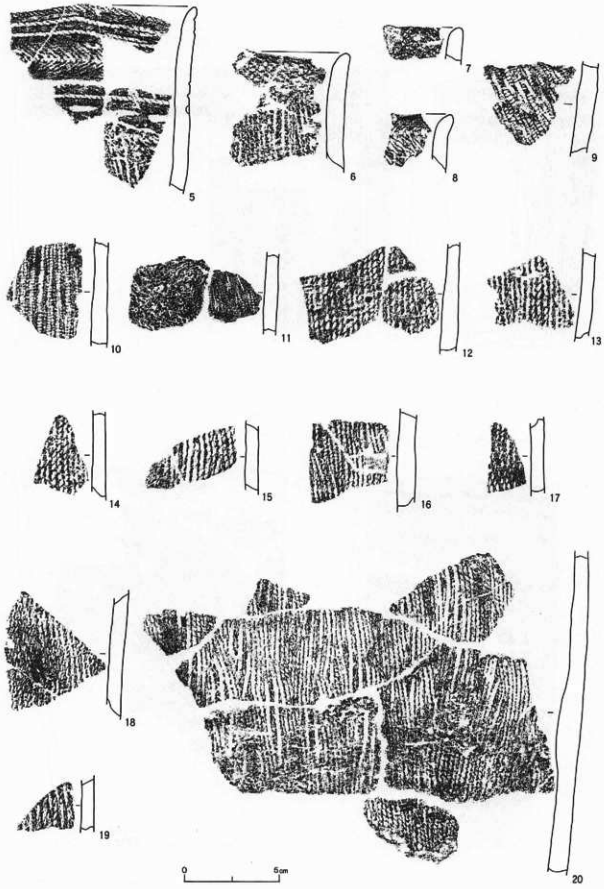
H-2　HP-1～4

1 黒褐色土（10YR3/1）　しまりなし、にぶい黄褐色土ブロックを多く含む
2 明黄褐色土（10YR6/6）　粘性やや強い、しまりなし
3 明黄褐色土（10YR6/6）　粘性やや強い、しまりなし
　黒褐色土ブロックを少量含む
4 明黄褐色土（10YR6/6）　粘性やや強い、しまりなし
　褐灰色土ブロックを多く含む

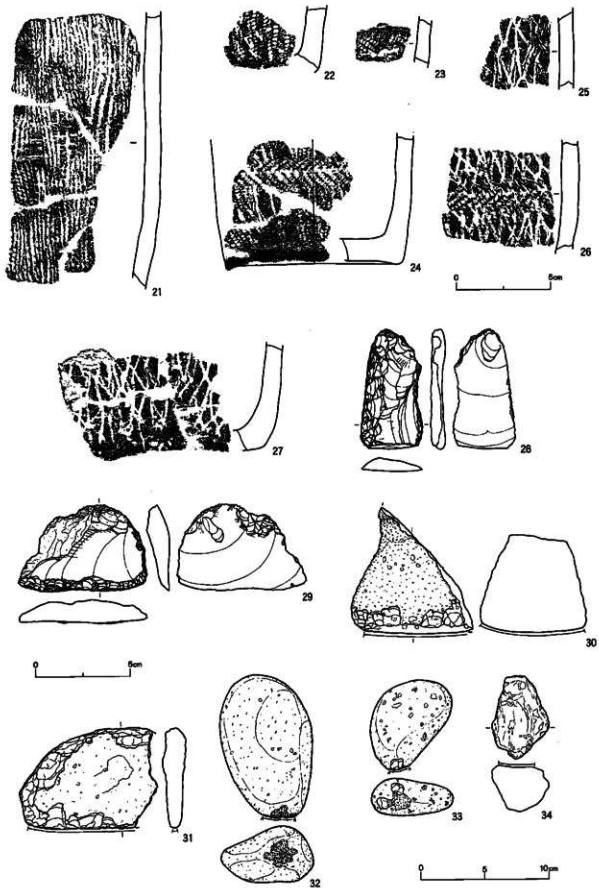
図Ⅳ－4　H－2



図Ⅳ－5　H－2出土の遺物（1）



図Ⅳ－6　H－2出土の遺物（2）



図Ⅳ－7　H－2出土の遺物（3）

3は覆土3層中を中心に、覆土中に破片が散在して出土した大型のⅡ群b－2類土器。胴部下半は欠失している。2と同様に筒形で胴上半がわずかに膨らみ、口縁部は直線的に立ちあがる。薄手で内面は磨かれている。口唇断面は尖り気味で、口縁部には細いLの原体による3条の縄線文があり、口唇部直下で縄線文上には更に縄文が施されている。また、羽状縄文の下端の一部に縄線文が施されている部分がある。胴部は縦行する自縄自巻的縄文と少なくとも3段の結束1種羽状縄文によりすだれ状縄文を構成している。この内、下段の羽状縄文は部分的に原体を上下逆転させ2段1組としたり、菱形を呈する部分もあるが規則性はない。

4はH－2出土の胴部破片6点と25m離れたm－16区の土器集中域のものが接合したⅡ群b－1類土器。6m程はなれたj－12区からも同一個体の口縁部に近い破片が出土した。底部付近の破片は接合せず、底径から推定復元した。底部からバケツ状に広がる器形で、口縁部はわずかに外反している。口唇部は指頭により調整され波打っている。内面は磨かれており、凹凸はあまり無い。口縁部には無文地にLRの縄線文が4条施され、1・2条目、3・4条目の間には綾絡文もある。胴部上半はLとRの撚りの異なる縄を巻きつけた撚糸文が斜めに、下半には縄線文と同一原体と考えられる斜行縄文が施文されている。

5～27は24を除いて覆土中から出土したⅡ群b類土器。

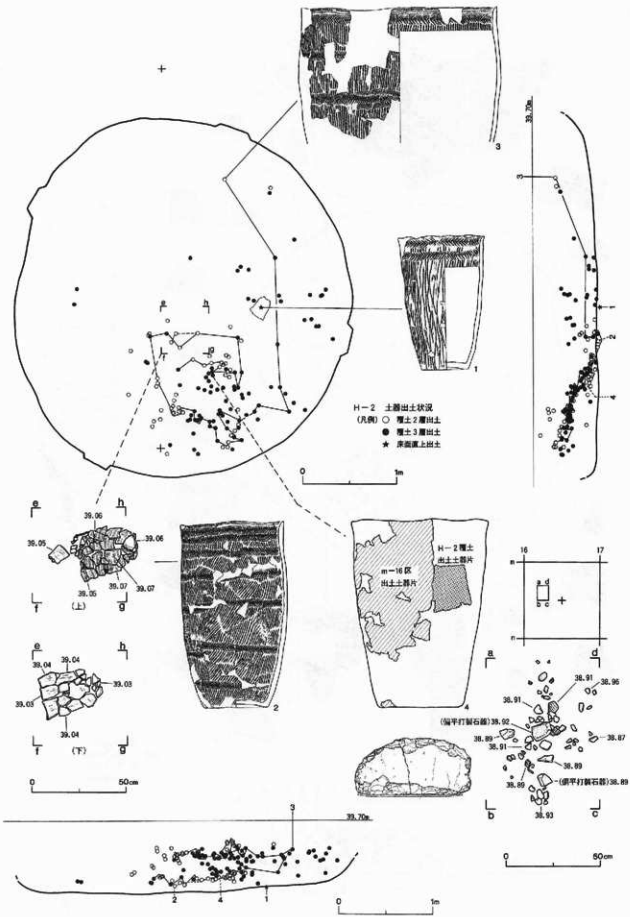
5～8は口縁部破片。5は縄線文と羽状縄文で口縁部文様を構成し、斜め方向からの刺突文が文様帯を区画している。口唇部直下には斜行縄文が施され、断面形は尖り気味となっている。体部文様は摩滅により判然としないが、自縄自巻的縄文と推測される。内面は丁寧に磨かれている。6～8は口縁部に斜行縄文が施されている。6・7はやや厚手で口唇断面が丸みを帯び、内面調整は雑である。8は1段の撚り戻しの縄文である。

9～21・23・25・26は胴部破片で、この内23、26は底部の24・27と同一個体である。9は撚り戻しの斜行縄文、10・11は自縄自巻的縄文が施されている。13～21は撚糸文が施されたもの。この内、12～15、20・21はそれぞれ同一個体である。内面は箆状工具で丁寧に磨かれているが、20・21は凹凸が特に著しい。25は単軸絡条体第5類による網目状撚糸文が施されたもの。

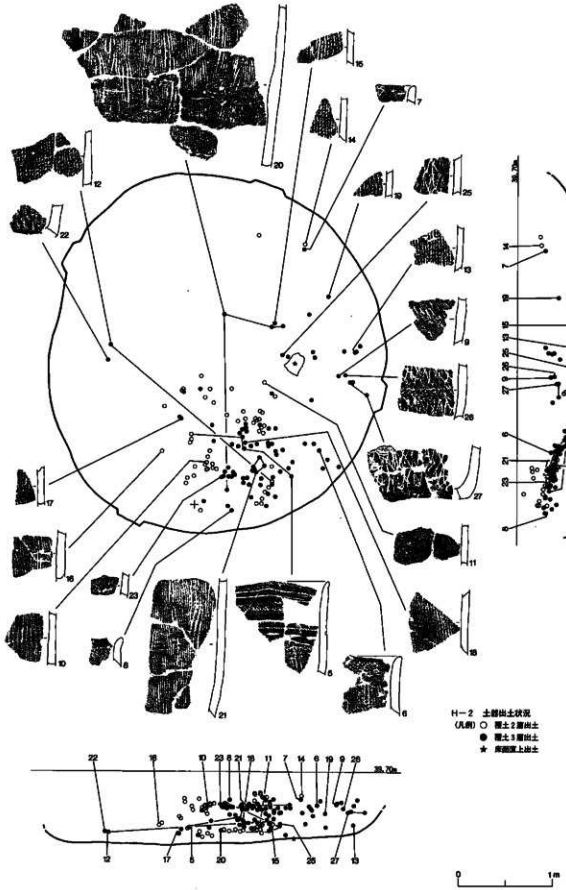
22・24・27は底部破片。22は撚り戻しの縦行気味の縄文が施されている。24は遺構外出土で、H－2出土の23と同一個体の底部である。上げ底で底部から直線的に立ち上がる。撚糸文と羽状縄文が施され、内面には炭化物が付着している。26・27は同一個体で単軸絡条体第5類による網目状撚糸文と羽状縄文が施文されている。23～26の内面は他の胴部破片ほど磨かれていない。

28、29はスクレイパーである。28は縦長剥片の両側縁に刃部がつくられるもの、29は打点側に原石面が残るものである。30は北海道式石冠である。全体の約2／3が欠損するが、残存部分の作業面は滑らかである。31は偏平打製石器である。全体の約1／2程の破片であるが、偏平な礫の全周を打ち欠いて作られている。作業面はやや幅が狭いがすられている。32、33はたたき石である。両者ともやや偏平な礫の一端を使用している。34は砥石である。軽石製で一面に平らな使用痕がある。

（立田　理）



図Ⅳ－8　H－2遺物出土状況　土器（1）



図Ⅳ－9　H－2遺物出土状況　土器（2）

フレイク集中域

H－2の覆土中からフレイクが集中する区域が2ヶ所検出され、それぞれ2つの接合資料が得られた。以下に検出の状況、剥片剥離過程について述べる。なお図Ⅳ―13・14では網かけ部分が一枚の剥離を、数字は接合した剥片の剥離の順番を、矢印は打撃の向きを表す。

フレイク集中域2

H－2の覆土5層を調査中に住居跡の中央からやや南東側の位置で検出したものである。ここから出土した遺物は、石核1点、フレイク82点、たたき石1点、礫4点である。そのうち石核1点とフレイク59点が接合した（石器接合資料1）。

剥片剥離過程（図Ⅳ―13）

石器接合資料1はほぼ全ての剥片剥離過程を復元することができた。原石は頁岩で細長のソフトボール大の礫を用いている。

初めに急角度の稜線を利用して、礫の表皮（1～3）を剥いでいる（作業面1）。その後打面と作業面を変えて2回の剥離（4、5）を行い（作業面2）、再び作業面1に戻って1回剥離（6）している。作業面2において、図の左方から2枚の剥片を剥離し、作業面1に戻って2枚の剥片を剥離している。この剥片は出土していないが縦長剥片と剥片の末端がカーブする鏃番状の剥片である。次の工程ではこの石核上に残った凸部分を調整して作業面を平坦にしている（7、8）。

続いて作業面2において、1回の打面調整（16）を挟んで連続して剥片を剥離（9～17）している。しかし、得られる剥片が小さくなったためこの作業面での剥片剥離をやめている。

そのため正面の矢印のある面（作業面3）において表皮（18～21）を剥いでいる。その後打面調整（22）を行い、再び剥片（23～28）を剥離している。しかし、26～28の剥離の段階で鏃番状の剥片となってしまい、この面での剥片剥離をやめている。

その後作業面2に於いて、打面再生とみられる剥片（29）を剥離し、作業面1において数枚の剥片を剥離している。次にこの剥離によってできた面を打面として剥片（30～37）を剥離している。

続いて作業面1に戻って、5枚の剥片（38、39）を剥離している。うち3枚は出土していない。引き続き剥片を剥離しようとしたが、打面を潰した結果に終わっているようである。そのため図の下方に90°展開した面を作業面とし、右方から剥片（40～42）を剥離している。再度作業面1側に於いて1枚の剥片（43）を剥離した後、剥離作業を終えている。

フレイク集中域1

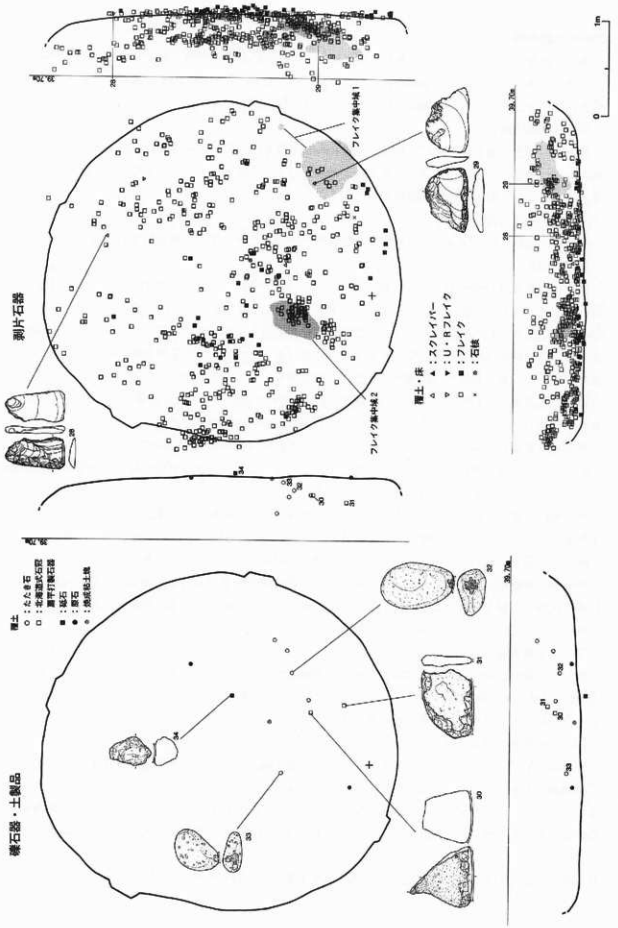
H－2の覆土11層を調査中、住居跡の東側の壁付近で検出した。ここから出土した遺物はフレイク236点、石核2点、礫32点、スクレイパー1点である。うち石核1点、フレイク27点、包含層から出土したフレイク3点が接合した（接合資料2）。

剥片剥離過程（図Ⅳ―14）

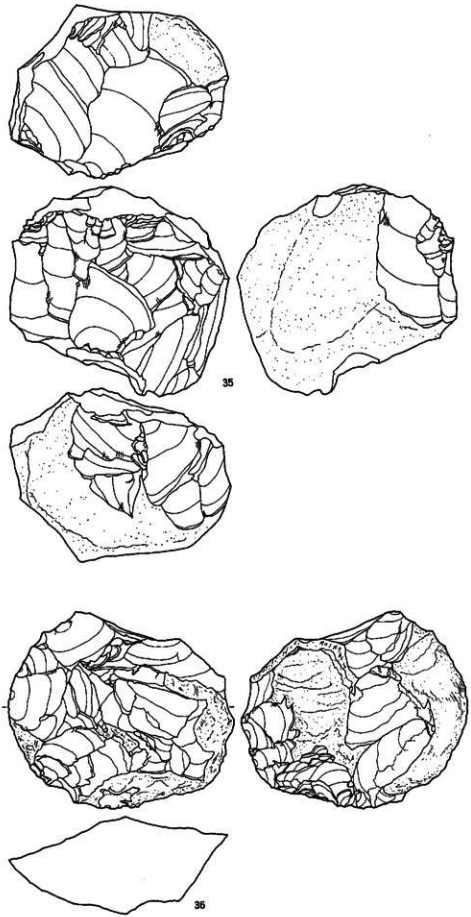
原石は頁岩で、握り飯状の3つの角のある偏平な礫を用いている。剥片の接合数が少ないため、全ての剥離工程を明らかにできないが、まず1角に於いて、打面を180°入れ替えながら剥離し（1～3）、その後もう一つの角に移って4を剥離した後、次の剥離の際に原石の約5分の1程が節理面で折れている。その後ほぼ一周するように時折打面を入れ替えながら剥片を剥離し、残核の状態に至っている。

時　期　床面出土の土器から、縄文時代前期後半Ⅱ群b－1類の時期のものとみられる。

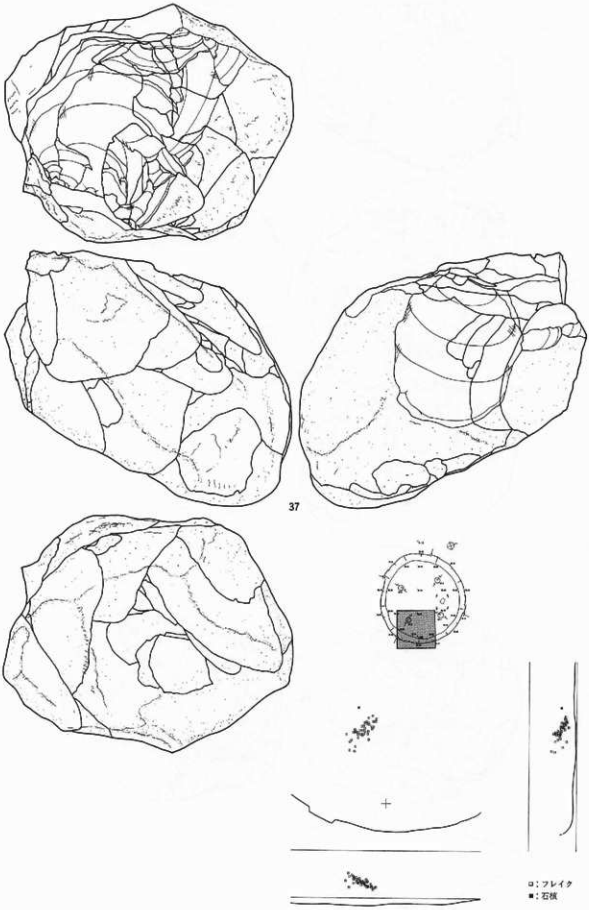
（立田　理）



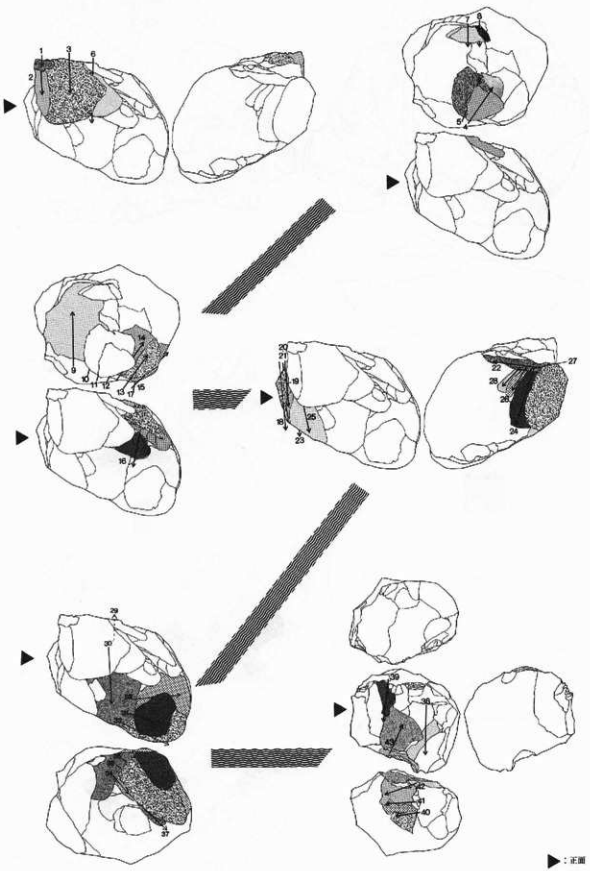
図Ⅳ－10　H－2遺物出土状況　石器



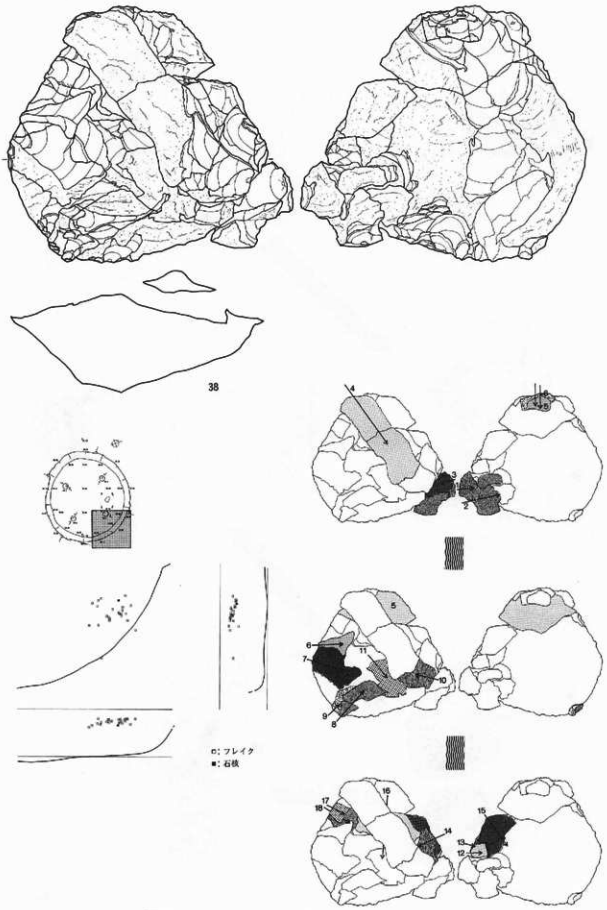
図Ⅳ−11 H−2フレイク集中域の石器（1）



図Ⅳ－12　H－2フレイク集中域石器接合資料（1）



図Ⅳ－13　H－2石器接合資料（1）剥片剥離過程



図Ⅳ－14　H－2フレイク集中域石器接合資料（2）

2 土壙

P－1 （図Ⅳ－15、表1・3、図版7・17）

位 置 k－14－b、l－14－a

規 模 137×102／112×83／44

平面形 楕円形

確認調査 下半の1－14区をⅥ層まで掘り下げた時点で、ロームブロックの混じった黒褐色土のまとまりを確認した。一部撹乱を受けているものの、壁面のセクションで立ち上がりが確認できたことから遺構とした。Ⅲb層中の掘り込みと考えられる。また、風倒木痕による撹乱のため、底面には段差がある。

覆 土 6層に分層した。この内、覆土1層にはやや赤みを帯びているが、H－1で確認されたものと同じと考えられる褐色火山灰が混じっていた。一部に風倒撹乱の影響が見られ判然としないが、自然堆積と考えられる。

遺 物 覆土上位からフレイク5点が出土した。いずれも流れ込んだ遺物と考えられる。

時 期 出土遺物がなく、不明であるが、H－1と同じ火山灰が流れ込んでいることから、H－1と同様に早期後半の遺構と推定できる。（藤原秀樹）

P－2 （図Ⅳ－15、表1・3・6、図版7・17）

位 置 h－12－d

規 模 50×46／38×34／16

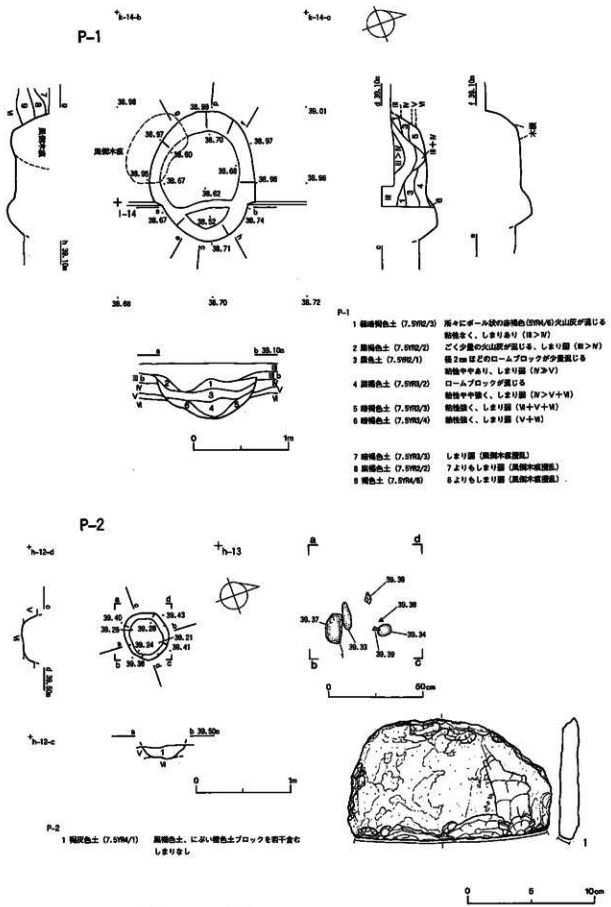
平面形 円形

確認調査 段丘先端部の平坦面、H－2の北側約1.3mの位置にあり、Ⅵ層上面を精査中に暗褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの東端隅には偏平打製石器もともなっており、遺構である可能性があった。半截して壁、壙底を確認して、土壙であることがわかった。検出面はⅥ層上面であるが、掘り込み面は出土した遺物からおそらくⅢ～Ⅳ層であったとみられるため、正確な規模は不明である。

覆 土 覆土は黄褐色土をブロック状に含む灰褐色土で、埋め戻し土かもしれない。

遺 物 覆土から偏平打製石器1点、礫2点、フレイク3点が出土している。1は偏平打製石器。流紋岩の偏平な礫を利用し、周縁を打ち欠いて作られている。

時 期 覆土中から偏平打製石器が出土していること、H－2との関連が考えられることから縄文時代前期後半の時期のものとみられる。（立田 理）



P-1

1 暗褐黄色土（7.5YR2/2）　灰々にボール状の赤褐色（5YR4/6）火山灰が混じる　粘性なく、しまりあり（Ⅲ＞Ⅳ）

2 黒褐色土（7.5YR2/2）　ごく少量の火山灰が混じる、しまり弱（Ⅲ＞Ⅳ）

3 黒色土（7.5YR2/1）　径2㎝ほどのロームブロックが少量混じる　粘性ややあり、しまり弱（Ⅳ＞Ⅴ）

4 黒褐色土（7.5YR3/2）　ロームブロックが混じる　粘性やや強く、しまり弱（Ⅳ＞Ⅴ＋Ⅵ）

5 暗褐色土（7.5YR3/3）　粘性強く、しまり弱（Ⅵ＋Ⅴ＋Ⅳ）

6 暗褐色土（7.5YR3/4）　粘性強く、しまり弱（Ⅴ＋Ⅵ）

7 暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり弱（黒褐木炭混乱）

8 黒褐色土（7.5YR2/2）　7よりもしまり弱（黒褐木炭混乱）

9 褐色土（7.5YR4/6）　8よりもしまり弱（黒褐木炭混乱）

P-2

1 褐灰色土（7.5YR4/1）　黒褐色土、にぶい褐色土ブロックを若干含む　しまりなし

図Ⅳ－15　土壙（Ｐ－１・Ｐ－２）と土壙出土の遺物

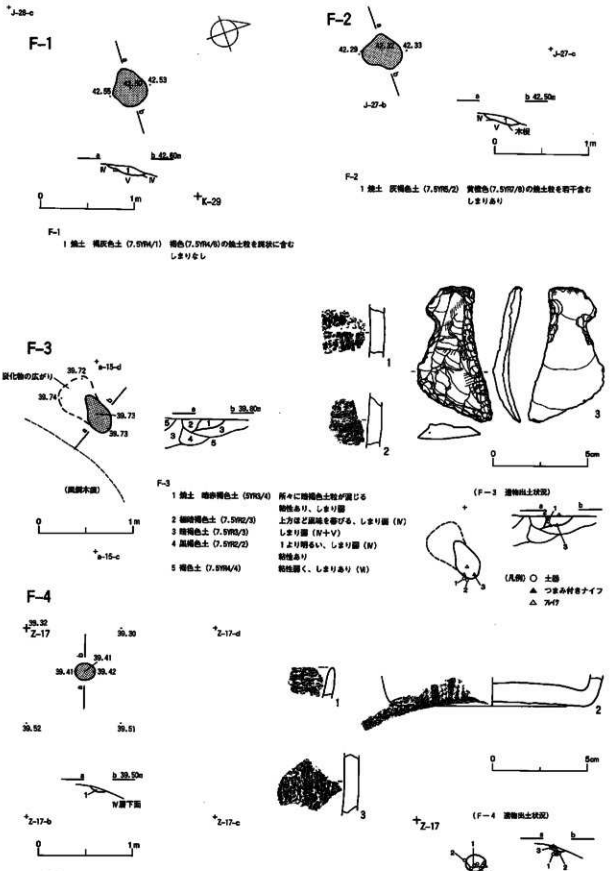
3 焼土 （F－1・2・5・6・9・13は立田が、F－3・4・7・8・10～12は藤原が担当した）

F－1 （図Ⅳ－16、表2、図版7）
位 置 J－28－c
規 模 40×36／8　　**平面形** 不整円形
確認調査 調査区北部の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面を精査中に検出した。
遺 物 出土していない。
時 期 検出面から縄文時代に形成されたものであるが、詳細な時期は不明である。

F－2 （図Ⅳ－16、表2、図版7）
位 置 J－27－a・b
規 模 42×（32）／8　　**平面形** 不整楕円形
確認調査 調査区北部の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面を精査中に検出した。
遺 物 出土していない。
時 期 検出面から縄文時代に形成された可能性は高いが、詳細な時期は不明である。

F－3 （図Ⅳ－16、表2・3・5・6、図版7・17）
位 置 a－15－a・d
規 模 44×24／10　　**平面形** 楕円形
確認調査 Ⅳ層調査中に風倒木痕の落ち込みで確認した。風倒木による攪乱を受けているため、焼土上面は平坦ではなく、炭化物が周囲に散在していた。
遺 物 Ⅱ群b類土器2点、つまみ付きナイフ1点、フレイク2点、礫・礫片2点の合計7点が焼土中から出土した。
1・2は同一個体で、いずれもⅡ群b類に相当する。1は撚糸文が施されている。内面は平滑で、胎土に繊維が含まれている。2は表面が摩滅している。3はつまみ付きナイフで、縦長剥片の両側縁に刃部がつくものである。
時 期 検出した層位および焼土中・周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。

F－4 （図Ⅳ－16、表2・3・5、図版7・17）
位 置 Z－17－a
規 模 21×18／4　　**平面形** 円形
確認調査 Ⅳ層下位からⅤ層上面を精査中に確認した。小さく薄い焼土で炭化物が混じっている。
遺 物 Ⅱ群b類土器7点、フレイク2点、礫・礫片3点の合計12点が焼土中から出土した。
1～3は同一個体で、いずれもⅡ群b類に相当する。1は摩滅しており、文様は判然としない。口唇断面はやや尖り気味である。2は同一調査区のⅣ層出土の土器片と接合したもので、やや上げ底気味の底部である。底径は約11cmで、底面近くまで撚糸文が施文されている。3は胴部破片で、同一原体による撚糸文が施文されている。いずれも薄手で焼成は良く、底面は平滑に磨かれている。胎土に繊維は少ない。
時 期 検出した層位および焼土中・周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。



図Ⅳ－16　焼土（F－1～4）と焼土出土の遺物

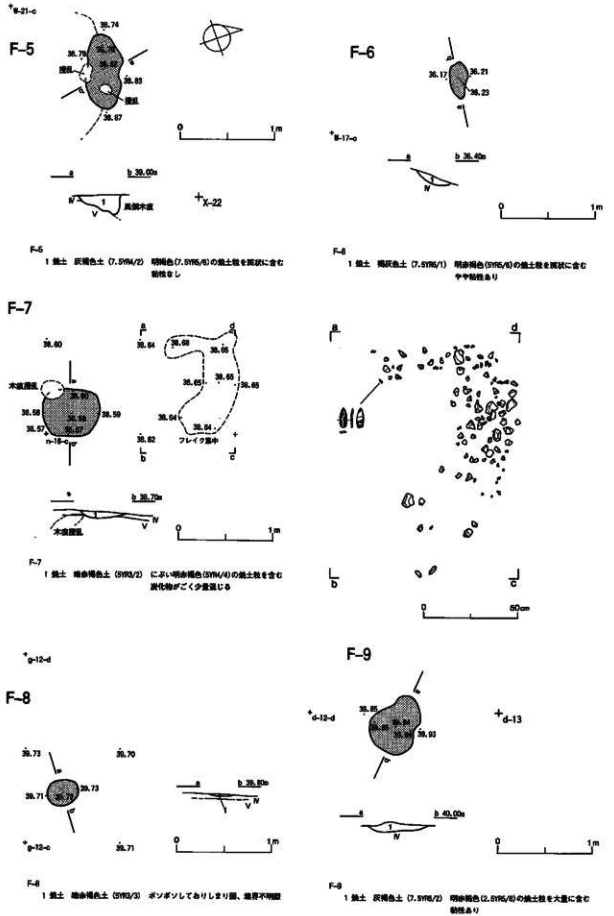
F－5 （図Ⅳ－17、表2、図版8）
位 置 W－21－c
規 模 78×（38）／20 平面形 不整楕円形
確認調査 調査区中央部の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面を精査中に検出した。
遺 物 出土していない。
時 期 付近から出土している遺物から縄文時代前期後半の時期のものである可能性が高い。

F－6 （図Ⅳ－17、表2、図版8）
位 置 W－17－d
規 模 38×18／4 平面形 不整楕円形
確認調査 調査区中央部の沢、落ち込み斜面上に位置する。Ⅳ層上面を精査中に検出した。
遺 物 出土していない。
時 期 付近から出土している遺物から縄文時代前期後半の時期のものである可能性が高い。

F－7 （図Ⅳ－17、表2・3、図版8・17）
位 置 n－16－d
規 模 62×49／7 平面形 楕円形
確認調査 Ⅳ層下位を精査中に確認した。近くにはフレイク集中域があり、焼土と関連すると思われる。このフレイク集中域から黒曜石製の石鏃（図Ⅴ－2－4－5）が出土している。
遺 物 焼土中から遺物は出土しなかった。
時 期 検出した層位および周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。

F－8 （図Ⅳ－17、表2・3、図版8）
位 置 g－12－d
規 模 34×28／2 平面形 楕円形
確認調査 Ⅳ層下位を精査中に確認した。非常に薄く、不明瞭な焼土である。
遺 物 焼土中から遺物は出土しなかった。
時 期 検出した層位および周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。

F－9 （図Ⅳ－17、表2、図版8）
位 置 c－12－c・d－12－d
規 模 64×50／8 平面形 不整円形
確認調査 Ⅳ層上面を精査中に検出した。調査区東部の平坦面に位置する。明瞭な焼土である。
遺 物 焼土上面からフレイク1点、礫1点が出土している。
時 期 付近から出土している遺物から、縄文時代前期後半のものである可能性が高い。



F-5
1 焼土　灰褐色土（7.5YR4/2）　明褐色（7.5YR5/6）の焼土粒を斑状に含む軟性なし

F-6
1 焼土　褐灰色土（7.5YR5/1）　明赤褐色（5YR5/6）の焼土粒を斑状に含むやや粘性あり

F-7
1 焼土　暗赤褐色土（5YR3/2）　にぶい明赤褐色（5YR4/4）の焼土粒を含む炭化物がごく少量混じる

F-8
1 焼土　暗赤褐色土（5YR3/3）　ボソボソしてありしまり弱、境界不明瞭

F-9
1 焼土　灰褐色土（7.5YR5/2）　明赤褐色（2.5YR5/6）の焼土粒を大量に含む軟性あり

図Ⅳ－17　焼土（F－5～9）

F－10 （図Ⅳ－18、表2・3、図版8）
位 置 k－15－b
規 模 (64)×(38)／8 **平面形** 円形？
確認調査 Ⅳ層中に焼土粒がまばらに散在しており、さらにⅤ層まで掘り下げた時点で赤褐色土のまとまりを確認した。風倒木による撹乱を受けており、境界は不明瞭である。
遺 物 焼土中から遺物は出土しなかった。なお、近接した風倒木の落ち込みから頁岩のフレイクが434点出土した。
時 期 周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。

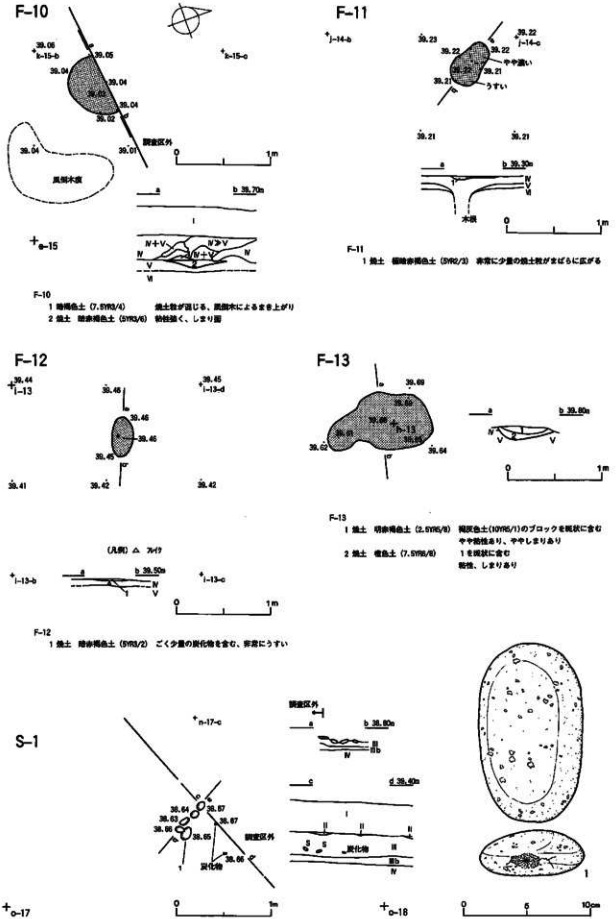
F－11 （図Ⅳ－18、表2・3、図版8）
位 置 j－14－b
規 模 50×32／4 **平面形** 楕円形
確認調査 Ⅳ層上面を精査中に確認した。木根の撹乱が一部にあり、輪郭が不明瞭で薄い焼土である。
遺 物 焼土中から遺物は出土しなかった。
時 期 検出した層位および周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。

F－12 （図Ⅳ－18、表2・3、図版8）
位 置 i－13－a
規 模 42×22／2 **平面形** 楕円形
確認調査 Ⅳ層中位を精査中に確認した。非常に薄く不明瞭な焼土である。
遺 物 焼土中からフレイク1点が出土した。
時 期 検出した層位および周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。

F－13 （図Ⅳ－18、表2、図版9）
位 置 g－12－c、g－13－b、h－12－d、h－13－a
規 模 110×62／14 **平面形** 不整楕円形
確認調査 調査区西部の段丘平坦面に位置する。Ⅳ～Ⅴ層を精査中に検出した。住居跡H－2から北へ約150cmの位置にある。
遺 物 上面からフレイク4点、礫・礫片3点が出土している。
時 期 検出面、遺物の出土状況から縄文時代前期後半の時期のものとみられる。

4 集石

S－1 （図Ⅳ－18、表2・3・6、図版17）
位 置 n－17－b・c **規 模** 42×18／1
確認調査 Ⅲ層下位で偏平な礫が一列に並んでおり、一部は調査区外へつながっていた。礫は周囲にも散在していたが、まとまりとなるものはなかった。また、炭化物がほぼ同じレベルで検出された。性格等は不明である。
遺 物 集石を構成する礫は5点でいずれも円礫である。このうち、1はたたき石で、偏平な礫の一端を使用するものである。被熱して赤変する部分がある
時 期 検出した層位および周辺で出土した遺物から、前期後半の遺構と考えられる。（藤原秀樹）



F-10
1 暗褐色土（7.5YR3/4）　焼土粒が混じる、黒褐木によるさき上がり
2 焼土　暗赤褐色土（5YR3/6）　粘性強く、しまり固

F-11
1 焼土　暗暗赤褐色土（5YR2/3）　非常に少量の焼土粒がまばらに広がる

F-12
1 焼土　暗赤褐色土（5YR3/2）　ごく少量の炭化物を含む、非常にうすい

F-13
1 焼土　明赤褐色土（2.5YR5/8）　褐灰色土(10YR5/1)のブロックを斑状に含む
やや粘性あり、ややしまりあり
2 焼土　橙色土（7.5YR6/8）　1を斑状に含む
粘性、しまりあり

図Ⅳ－18　焼土（F－10～13）、集石（S－1）

V　包含層出土の遺物

1　土器

シラリカ2遺跡の包含層から土器片は合計11,006点が出土した。内訳は縄文時代早期のⅠ群が406点、以下前期Ⅱ群が10,585点、中期Ⅲ群が13点、続縄文時代Ⅵ群が1点、時期不明1点である。

分類別の分布は図Ⅴ－1－19～21に示した。

以下、Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ・Ⅵ群の時期別に分けて記述する。

(1)縄文時代早期の土器　Ⅰ群（図Ⅴ－1－1、表9・10、図版18）

Ⅰ群は主にⅣ～Ⅴ層から多く出土している。

Ⅰ群a類土器（図Ⅴ－1－1－1）

アルトリ式に相当する条痕文の施された土器。調査区中央と調査区外北側にある2つの沢にはさまれた尾根上のW－30区Ⅴ層中から同一個体の小破片13点が出土した。1はその内3点が接合した底部に近い破片である。その断面形から平底と考えられ、横方向に条痕が施文されている。胎土には小石が入っており、焼成は良好である。内面も横方向に丁寧に調整されている。

Ⅰ群b－1類土器（図Ⅴ－1－1－2～7）

東釧路Ⅲ式に相当するもの。

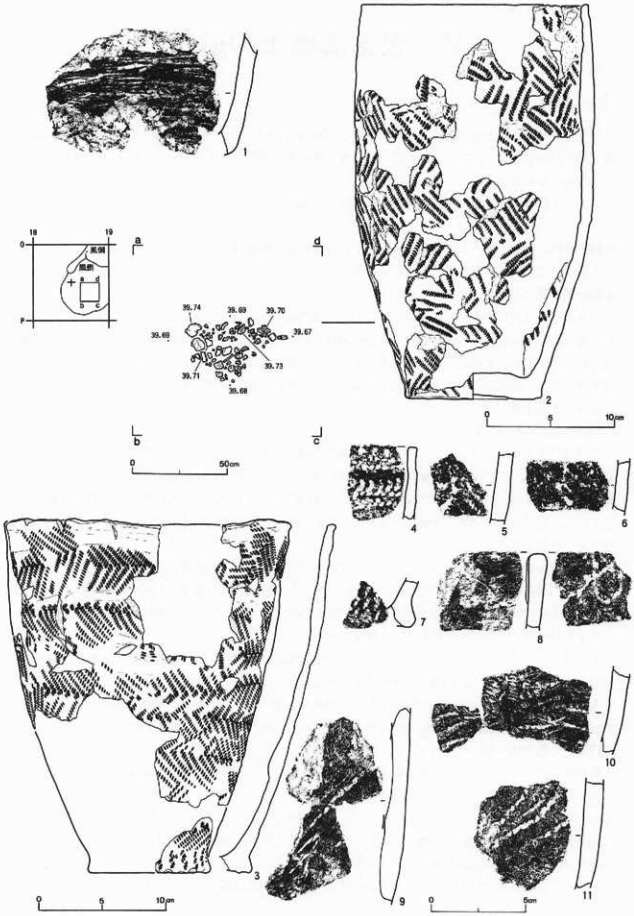
2は調査区中央の大きな沢に面したO－18区で小破片となり、まとまって出土したもの。底部からしだいに膨らみ、口縁部が垂直気味に立ちあがる器形である。胎土に小石が多く、もろい。また、海綿骨針も入っている。器壁の厚さは一定せず、内面は凹凸が著しい。口縁部は無文地に縄端が押捺されている。胴部には0段多条と思われるRL・LRの撚りの異なる2種類の原体により横走または縦行する羽状縄文が施されている。

3は調査区東端のo－17・18、p－17・18区に散在して出土した破片が接合したもの。2と同様の器形で、口唇部は指頭により調整されわずかに波打っている。内面・器面とも凹凸が著しい。胴部には結束第1種羽状縄文が施されている。底面近くが外側に張り出し、そこに縄端が押捺されている。この土器は隣接して検出されたH－1と関連するものと推測される。

4は薄手で篦状工具により平坦に器面調整した後、短縄文を押捺した口縁部破片。短縄文の上下には組紐圧痕文が横走する。口唇部は指頭により調整され、平坦となっている。また、胎土には砂が多く入っている。5・6は斜行縄文が施された胴部破片。2に類似しており、胎土に砂が多く、焼成は良好で硬い。7は底部破片。底部付近が外側へ張り出し、RLの縄端が押捺されている。

Ⅰ群b－4類土器（図Ⅴ－1－1－8～11）

東釧路Ⅳ式に相当するかと推測されるもの。X・Y－16区の傾斜部分に同一個体の45点がまとまって出土した。このうち、やや大きな破片4点を図示した。なお、出土層位は早期の主な包含層であるⅣ～Ⅴ層よりも上位のⅢ層であることから、新しい時期の土器である可能性もある。8は口縁部破片。口縁部断面形は角形で、内面に幅1.2cmほどの偏平な粘土帯がある。口縁部は無文で、胴部には斜行縄文が見える。9～11は胴部破片。いずれも斜行する撚糸文が施文されている。9では同一原体を回転させずに器面に沿わせて押し引いた痕跡が確認できる。胎土には砂・小石が入っており、焼成は良好で硬い。　（藤原秀樹）



図V－1－1　包含層出土の土器　I群

(2)縄文時代前期の土器 Ⅱ群（図Ⅴ－1－2～17、表11・12、図版19～32）

本群はさらにⅡ群ｂ－1類、ｂ－2類に細分される。

Ⅱ群土器の分布はX・Y・Zラインの調査区中央の沢より部分と、hラインよりも東側（図下方）に大きく分布が分かれる（図Ⅴ－1－19・20）。その中で、j－13区Ⅲ層中からはⅡ群ｂ－1類土器（1～4）が、m－14区Ⅲ層中からはｂ－2類土器（6・96・208・209）がまとまって出土した。時期毎にさらに細かく分布域が分かれ、セット関係がとらえられそうである（第Ⅴ章参照）。

①Ⅱ群ｂ－1類土器（図Ⅴ－1－2－1～Ⅴ－1－3－5、Ⅴ－1－6－10～Ⅴ－1－11－90）

Ⅱ群ｂ－1類は円筒土器下層ｃ式、サイベ沢Ⅰ式、森川式（熊野・八木1974）に相当するもの。当遺跡H－2床面出土土器、長万部町花岡2遺跡P－3、H－9出土土器（北埋調報139）、南茅部町ハマナス野遺跡HP－123覆土のX2－4・5層出土土器（南茅部町教委1989）、木古内町新道4遺跡Ⅱ群B1類2群（北埋調報52）などに類似するもの。前述したように当遺跡H－2では出土状況から層位的にｂ－2類と区別される。

概して、器壁は薄手で復元できたものでは器高30cm程度の土器が多い。器形は底部から直線的に広がりバケツ状となるものが多く、胴部がわずかに膨らむものもある。口縁部はわずかに外反し、口唇部は指頭により調整され小波状を呈するものが多い。口唇部の調整により、粘土が器面側にまくれているものも見受けられる。内面は箆状工具などで丁寧に調整されているが、内外面とも凹凸がある。胎土に繊維は少なく、海綿骨針が入っているものもある。口縁部文様帯はｂ－2類よりも広く3～5cm程度である。文様帯の区画は主に器面を一周する縄線文、刺突文、綾絡文などによってなされている。隆帯のあるものもごくわずかある。口縁部文様には縄線文、絡条体圧痕文、綾絡文、刺突文、条痕文などがあり、複数の文様が複合して施文される例も多い。胴部には撚り戻しの斜行縄文、縦行する自縄自巻の縄文・撚糸文が多く施されている。他に単節・複節の斜行縄文、羽状縄文、網目状撚糸文、多軸絡条体の回転文も少数ある。また、胴上半部と下半部で原体の異なる文様が複合して施文される例も多い。縦行する自縄自巻の縄文・撚糸文と横走する結束第1種羽状縄文で、いわゆるすだれ状縄文を構成するものもある。この内、多軸絡条体の回転文とすだれ状縄文はｂ－1類では少なく、ｂ－2類に多い傾向がある。

以上の特徴を有する土器を口縁部文様により細分した。

文様帯を区画する隆帯があるもの（10～13）

10～13は同一個体である。やや外反する口縁部にはLの縄線文と綾絡文が施され、隆帯上には刺突文がある。胴部上半には撚り戻しの斜行縄文、下半には撚糸文が施されている。

縄線文が施されたもの（14～24）

縄線文はいずれも無文の口縁部に施文されている。1～4本の縄線文で一組となり、中にはLとRの撚りの異なる原体を用い組紐圧痕文風となるものもある。

14～19は幾何学的に縄線文が施されたもの。14～16は同一個体で、外反する4ヵ所の波状口縁の頂部に沿わせてRの山形の縄線文がある。胴部には斜行縄文が施されている。17は1条、18はLとRの2条、19は3条一組の縄線文が施されている。

20～24は口縁部に平行する縄線文が施されたもの。20～22は2条、23は3条、24は4条一組である。20の胴部には撚糸文が施されている。17・20・24の胎土には海綿骨針が入っている。

縄線文と円形刺突文が施されたもの（25～28）

いずれも、幾何学的な文様構成の縄線文が交差する部分に円形刺突文が施されている。25は中空の

棒状工具を用い施文しており、胎土には海綿骨針が入っている。26～28は同一個体である。口縁部文様帯を区画する部分は器壁がわずかに厚くなっており縄線文が巡っている。胴部には撚糸文と結束第1種羽状縄文が施されている。

縄線文と押引文風の刺突文が施されたもの（29・30）

29・30は同一個体である。薄手で口縁部よりも胴部が膨らむ器形である。R、L、Rの撚りの異なる3本一組の縄線文が4段施され、さらにわずかに隆起する4ヵ所の波状口縁の直下には山形の縄線文が施されている。縄線文の下には横方向からの刺突文がめぐり、文様帯を区画している。

縄線文と綾絡文が施されたもの（1、3、31～40）

本遺跡の特徴的な文様構成で、森町森川A遺跡出土土器に類似している。

1・31～38は無文地に施文されたもの。31は1本、1・32・33・38は2本、34～37は3本一組の縄線文が施され、38にはさらに2条の組紐圧痕がある。

1は2と近接して、j－13区Ⅲ層中からまとまって出土したもの（図Ⅴ－1－2）。胴部下半は欠失している。底部から直線的に広がるバケツ状の器形で、口縁部はわずかに外反している。口唇部は指頭により調整され波打っている。内面は篦状工具で丁寧に調整されているが、内面、器面ともに凹凸がある。口縁部には2本のLの縄線文が巡り、その間に3条一単位の綾絡文が施されている。胴部には撚糸文が施されている。

32・37・38は特殊な原体を用いた、いわゆる不整綾絡文が施されたもの。33・34の胴部には網目状撚糸文が施されている。これらの内、33・34・36・38は薄手で焼成が良い。また、32の胎土には海綿骨針が、37には砂が多く入っている。

3・39・40は地文の撚糸文上に施文されたもの。3・39は同一個体でj－13区においてと4と隣接して出土したもの（図Ⅴ－1－3）。口唇直下に細いRの原体による縄線文が3条施されている。胴部全体に撚糸文施文後、少なくとも3条一単位の綾絡文が巡っている。61・62と類似しているが、胴部の撚糸文の撚りが異なる。40は2本一組のRLの縄線文間に綾絡文が施されたもの。

縄線文と綾絡文、押引文風刺突文が施されたもの（41～44）

41・42、43・44は同一個体である。いずれも、口縁部文様帯の区画として斜め方向からの刺突文が巡っている。42の胴部には自縄自巻的縄文が施されている。43・44の胎土には海綿骨針が入っている。

縄線文と羽状縄文が施されたもの（45～51）

いずれも縄線文の下に羽状縄文が施されている。45・46・48・51では羽状縄文の下にさらに縄線文が巡り、文様帯を区画している。45・46は同一個体で1・2本、47は2・3本、48は3・4本、49・50は4本一組の縄線文である。51はやや外反する口縁部に縄線文で区画された羽状縄文が2段巡り、胴部にも自縄自巻的縄文と羽状縄文が施されている。48～50の胎土には海綿骨針が入っている。

絡条体圧痕文が施されたもの（52～56）

52は文様帯を区画するやや器壁が厚い頸部に絡条体圧痕文がある。口縁部には横走気味の縄文、胴部には撚糸文が施されている。

53～55は無文地に絡条体圧痕文が施されたもので、いずれも文様帯の区画に刺突文が巡っている。53には綾絡文も施文されており、刺突は指頭によるものと思われる。54・55はk－13区でまとまって出土した同一個体で、胴部には撚り戻しの斜行縄文が施されている。

56はバケツ状の器形で、器面全体に自縄自巻的縄文を施した後、同一原体を口縁部に押捺したもの。

綾絡文が施されたもの（57～63）

57～59は無文地に綾絡文が施されたもの。58・59は胴部に撚糸文が施されている。

60～63は撚糸文施文後に重ねて綾絡文が施されたもの。61・62は同一個体で、3条一組の綾絡文が施されている。63は口唇部のまくれ返りが特に顕著で、文様帯を区画する位置に綾絡文が巡っている。

刺突文が施されたもの（64～66）

64～66は同一個体である。撚糸文施文後、口縁部に横方向からの刺突文が2段巡っている。胴部、底部破片の径から、バケツ状の器形であることが推測される。

条痕文が施されたもの（2、67～72）

いずれも器面全体に地文施文後、口縁部に横方向の条痕文が施されている。

2、67～69は条痕文のみのもの。

2は1とともにj－13区Ⅲ層中でまとまって出土したもの（図Ⅴ－1－2）。ゆがんだバケツ状の器形で口縁部はやや外反する。胴部全体に撚糸文施文後、口縁部に横方向の条痕文が施されている。口唇部は指頭により調整され、断面形は丸みを帯びている。内面・底面とも同じ条痕で調整した後、丁寧に磨かれているが、条痕は明瞭に残っている。また、胴部の一部にも条痕が確認できる。67は2に類似している。68は胎土に砂が多く入っている。69は斜行縄文施文後、条痕文が施されたもの。口縁部断面形が尖り気味となっており、胎土には海綿骨針が入っている。

70～72は同一個体で条痕文施文後、さらに重ねて綾絡文も施されたもの。胴部には斜行縄文が施され、内面は丁寧に磨かれている。

口縁部に撚糸文のみが施されたもの（73～75）

73は外反する口縁部に横方向の、胴部に縦方向の撚糸文が施されたもの。74は縦行する、75は斜行する撚糸文である。75はj－13区で4の破片に混じって出土したもの（図Ⅴ－1－3）。

口縁部に自縄自巻的縄文が施されたもの（76・77）

76・77は同一個体である。屈曲の無い器形で、口縁部、胴部ともに斜行する自縄自巻的縄文が施されている。

口縁部に横走・斜行縄文が施されたもの（4、78～81）

78は横走気味の縄文が施されたもの。口唇部は平坦に調整されている。

4は3と近接して、j－13区でまとまって出土したもの（図Ⅴ－1－3）。胴部がやや膨らみ、いったんすぼまって外反気味に開く器形である。薄手で口縁部の断面形はやや丸みを帯びている。内面は丁寧に磨かれている。口縁部には斜行縄文が施され、その下には羽状縄文が2段めぐっている。胴部下半には横走気味の撚り戻しの縄文が施されている。

79～81は口縁部に斜行縄文が施されたもの。79は口唇部の調整により粘土が器面側にまくれて肥厚している。80・81は胴部に撚糸文が施されている。

口縁部に結束第1種羽状縄文が施されたもの（5、82～90）

5は筒形で底面近くですぼまる器形で、口縁部と底部は図上で復元したもの。薄手で口縁部の断面形は丸みを帯びている。器面には羽状縄文と自縄自巻的縄文が施されており、内面は丁寧に磨かれている。82は口唇部にも縄文が施されている。83～87は口縁部断面形が尖り気味となるもの。83～85は口縁部がやや外反している。86・87は口縁部が外反せず直線的に立ちあがるものでb－2類の可能性もある。86の内面は特に丁寧に磨かれている。

88～90は同一個体である。口縁部は外反せず、口唇部は篦状工具により磨かれ平坦になっている。胴部には撚糸文と羽状縄文が施されている。底部から直線的に立ちあがる筒形の器形と推測され、口唇部の調整の丁寧さ、胴部文様の緻密さからb－2類に該当する可能性もある。

②Ⅱ群b－2類土器（図V－1－4－6～V－1－5－7、V－1－11－91～V－1－12－110）

Ⅱ群b－2類は円筒土器下層d1式、サイベ沢Ⅱ式に相当するもの。本遺跡H－2覆土出土土器、ハマナス野遺跡HP－123覆土のX2－3層出土土器、新道4遺跡Ⅱ群B1類3群などに類似するもの。

薄手で小型のものと、より大型化し厚手のものとがある。筒形で胴上半部がわずかに膨らむ場合が多く、口縁部は垂直に立ちあがるようになる。口縁部断面形は、口唇直下に縄文が施文される例もあるため、器壁が薄手の場合は尖り気味となるものが多く、厚手の場合は篦状工具などを用い丁寧に調整されるか丸みを帯びている。前者の方がより古手かと考えられる。内面・器面はb－1類よりも丹念に調整され、凹凸は無いか目立たなくなる。また、内面が丁寧に磨かれ光沢があり、赤褐色を呈するものもある。口縁部文様帯はより狭くなり、横走する縄線文が数条巡るか、羽状縄文が施されるものが多い。まれに、綾絡文が見られる。胴部には自縄自巻的縄文、撚糸文と羽状縄文によるすだれ状縄文、多軸絡条体の回転文が施されている。文様は概してb－1類よりも緻密である。

①と同様に口縁部文様により細分して記述する。

縄線文が施されたもの（6・7、91～99）

6は段丘縁の近くのm－14区Ⅲ層中で3ヵ所に土器片がまとまって出土した内の一つで、口縁部と胴部下半は接合できなかったが、図上で復元したもの。他の2ヵ所からは96・208・209の多軸絡条体回転文の施された土器と、すだれ状縄文の129の土器が出土している（図V－1－4）。筒形で口縁部が直線的に立ちあがる。口縁部にはLとRの撚りの異なる3本一組の細い原体を押捺している。内面は篦状工具で丁寧に調整され光沢がある。7も筒形の器形で、LRの縄線文が3条めぐり、口唇部直下には同一原体による縄の圧痕が斜めに施されている。6・7の胴部はいずれも自縄自巻的縄文と羽状縄文によりすだれ状縄文を構成している。

91～93は同一個体である。口縁部断面形はやや丸みを帯びている。胴部には撚糸文と羽状縄文が施されている。内面は赤褐色に磨かれ光沢がある。94・95は同一個体で、胴部に自縄自巻的縄文が施されたもの。口唇部直下で縄線文上には斜行縄文も施されている。96・97も同一個体で、羽状縄文の下に多軸絡条体の回転文が施されたもの。器壁は薄手で、内面にはわずかな凹凸が確認できる。98は波状口縁の頂部で縄線文が山形となるもの。99は胴部に自縄自巻的縄文が施されている。

縄線文と綾絡文が施されたもの（100）

100は細いLの原体による縄線文施文後、その間に綾絡文が施されたもの。口唇部直下には縄線文に重ねて斜行縄文が施されている。胴部の撚糸文も細い原体で緻密な印象を受ける。

綾絡文が施されたもの（101～103）

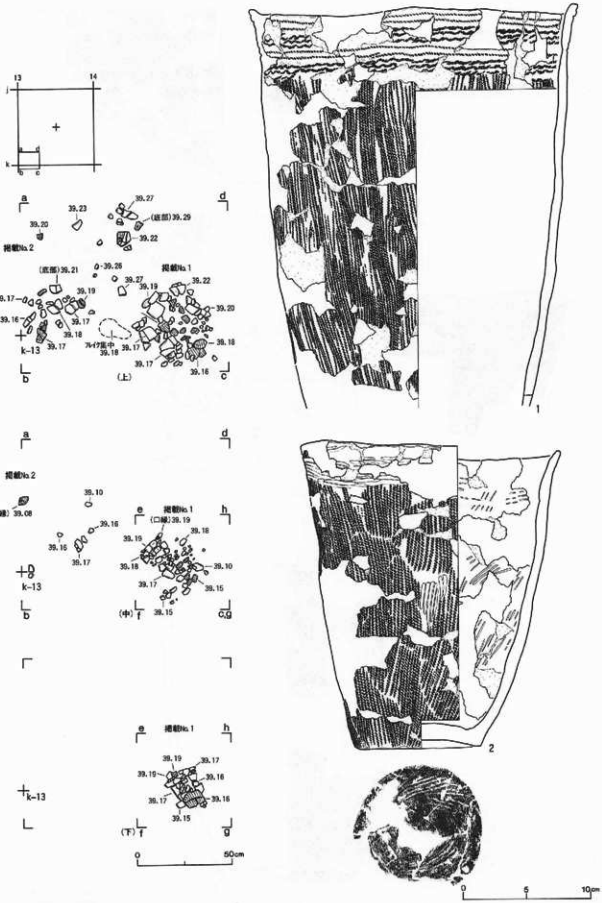
口縁部が直線的に立ち上がり、断面形が尖り気味のもの。いずれも無文地に綾絡文が施されている。胴部文様は101では撚糸文、102は羽状縄文と撚糸文、103は網目状撚糸文である。

口縁部に斜行縄文が施されたもの（104）

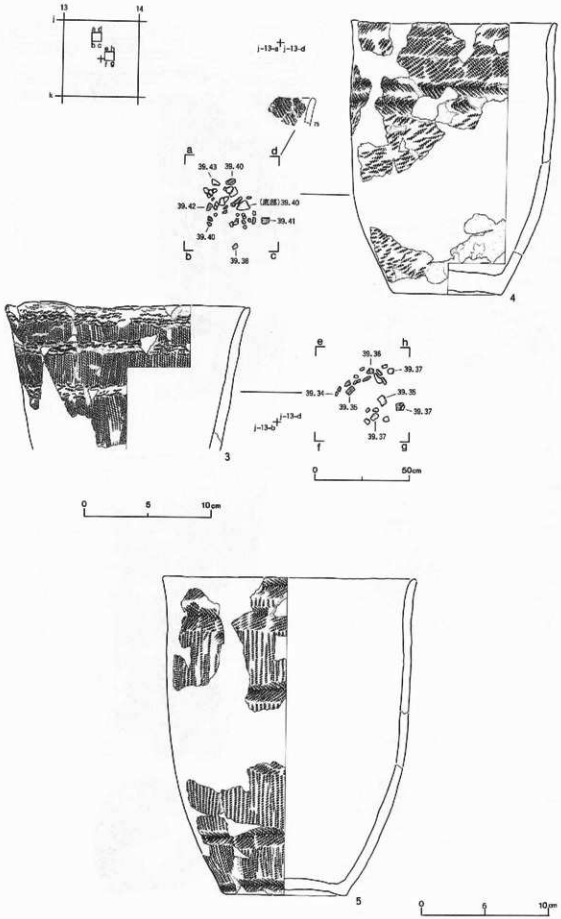
104はやや厚手で口縁部断面形が丸みを帯び、内面は赤褐色で丹念に磨かれており光沢がある。

口縁部に羽状縄文が施されたもの（105～110）

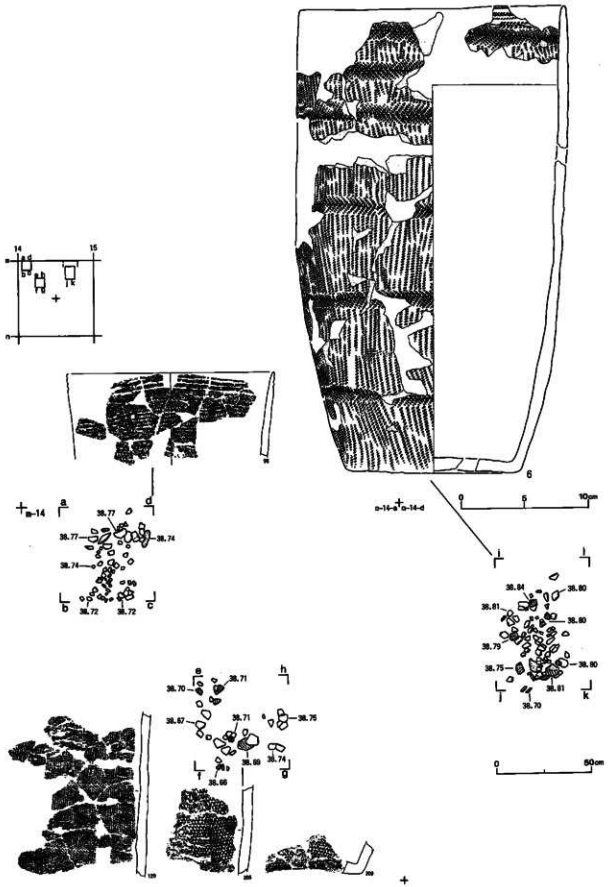
口縁部に羽状縄文が施され、胴部は撚糸文と羽状縄文ですだれ状縄文を構成するものが多い。内面は篦状工具で丁寧に磨かれており光沢がある。105～107は同一個体である。底径は約16cmで大型の土器と推測される。波状口縁でやや外反気味である。口縁部断面形は丸みを帯びている。108は羽状縄文が多用されるもの。内面には凹凸がある。109は特に薄手である。110は口唇部も丁寧に磨かれている。



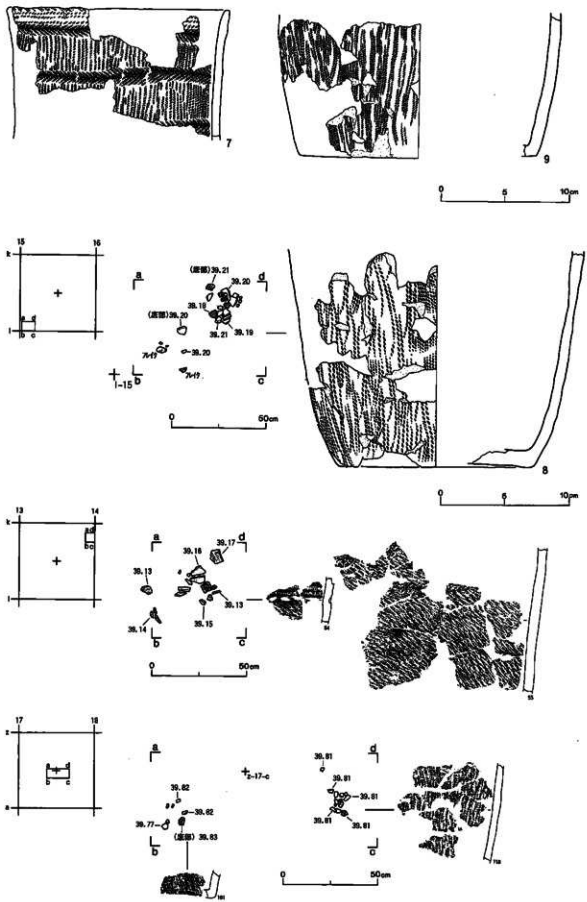
図Ⅴ－1－2　包含層出土の土器　Ⅱ群（1）



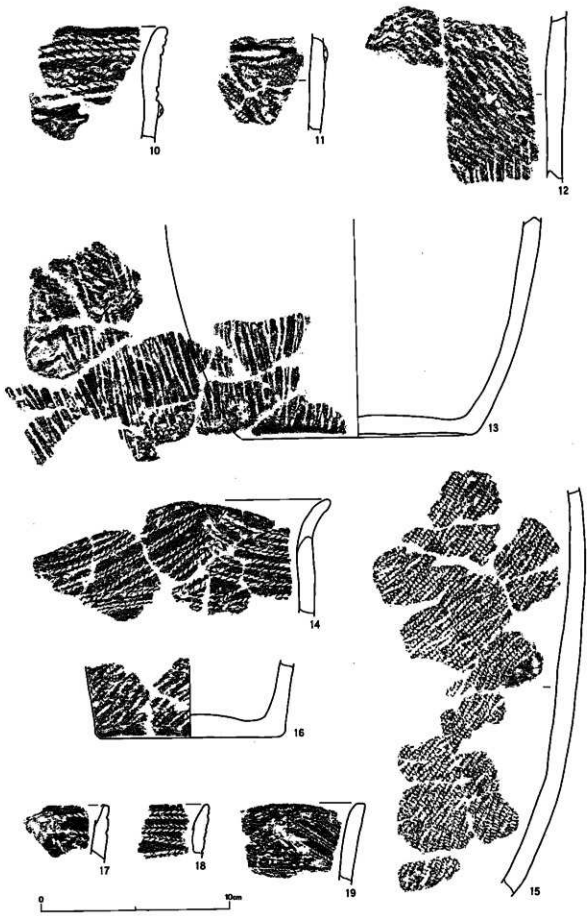
図Ⅴ－1－3　包含層出土の土器　Ⅱ群（2）



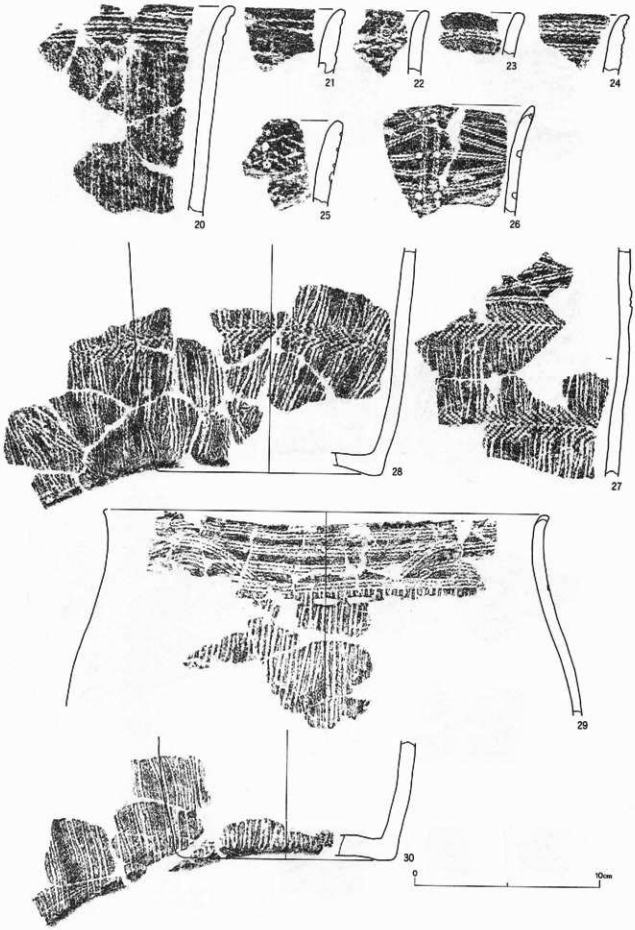
図Ⅴ－1－4　包含層出土の土器　Ⅱ群（3）



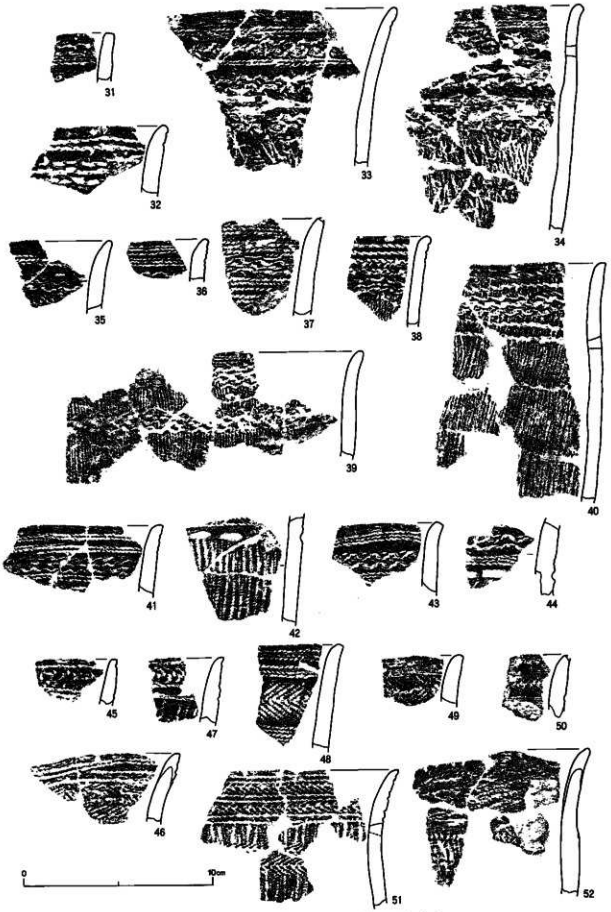
図Ⅴ－1－5　包含層出土の土器　Ⅱ群（4）



図V－1－6　包含層出土の土器　Ⅱ群（5）

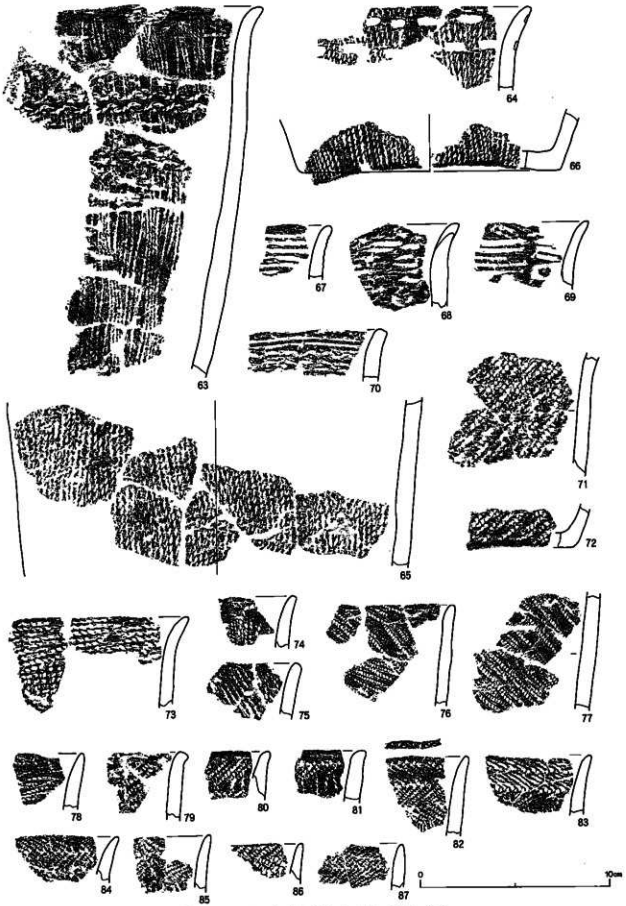


図V－1－7　包含層出土の土器　Ⅱ群（6）

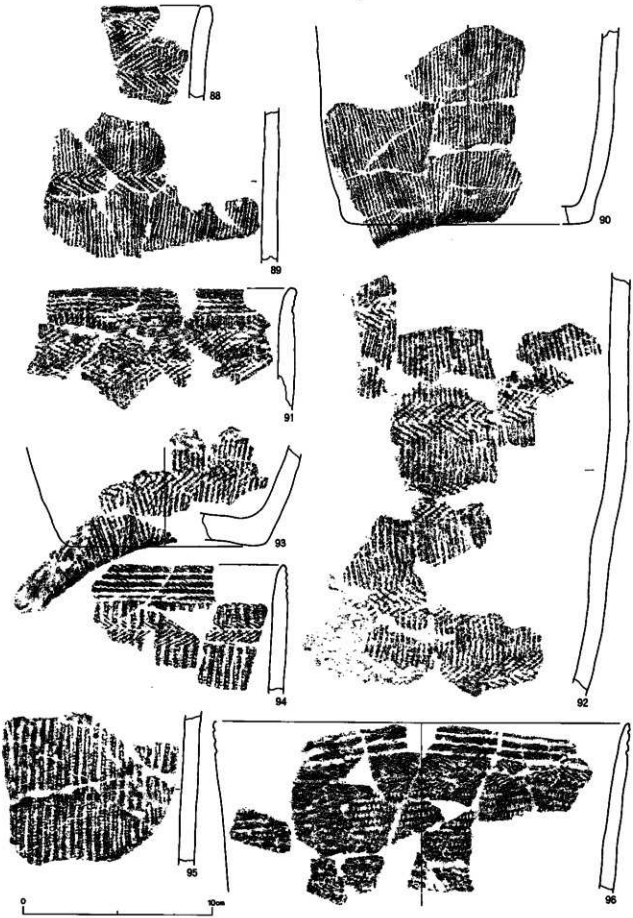


図V－1－8　包含層出土の土器　Ⅱ群（7）

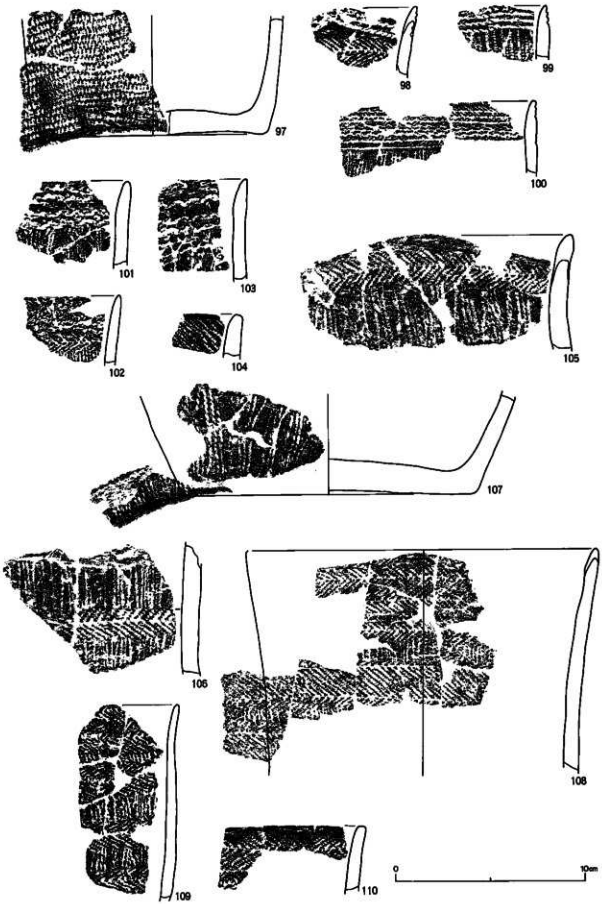
図V－1－9　包含層出土の土器　Ⅱ群（8）



図V－1－10 包含層出土の土器 Ⅱ群（9）



図V－1－11　包含層出土の土器　Ⅱ群（10）



図Ⅴ－1－12 包含層出土の土器 Ⅱ群 (11)

③胴部破片（図Ⅴ－1－13－111～図Ⅴ－1－14－151）

胴部破片のみでは細分できないため、文様の特徴により分類した。

隆帯のあるもの（111・112）

本遺跡で隆帯のある土器片は10～13と111・112の3個体のみが検出された。いずれも隆帯上には刺突がある。111は口縁部に近い破片で、幾何学的な文様の縄線文があり、胴部文様は斜行縄文である。112は隆帯上に指頭によると思われる刺突があるもの。

縄文が施されたもの（113～115）

113は横走気味の縄文の下に斜行縄文が施されたもの。115は斜行縄文と網目状撚糸文が施されたもの。撚りがやや戻っていることが確認できる。

撚り戻しの縄文が施されたもの（116・117）

いずれも内面にはわずかな凹凸がある。116は口縁部に近い破片である。口縁部文様帯には4本一組のLとRの原体を用いた縄線文と綾絡文が施されている。

自縄自巻的縄文が施されたもの（118～120）

118はZ－17区でややまとまって出土したもの（図Ⅴ－1－5）。119・120の内面は篦状工具で縦方向に丹念に磨かれている。119はやや雑な施文である。

撚糸文が施されたもの（121～128）

121～124は撚糸文のみのもの。122～124は太い原体で器面深く施文されている。125はRとLの撚りの異なる原体を用いて施文したもの。127・128は単軸絡条体の縄を、両端は密に、中央部は間隔を空けて巻き付けた原体によるもの。126も同様の方法かと思われ、撚糸文の条が入り組んでいる。127の胎土には海綿骨針が入っている。

撚糸文と羽状縄文が施されたもの（129～133）

撚糸文と羽状縄文によりすだれ状縄文を構成するもの。129はm－14区でまとまって出土したもので、内面調整はやや雑で、凹凸が著しい。131は特に丁寧に内面が磨かれており、赤褐色で光沢がある。132・133は薄手で、細い原体により緻密に施文されたもの。

撚糸文と斜行縄文が施されたもの（134）

134は羽状縄文施文後、その間に斜行縄文が施されたもので、内面は丁寧に磨かれている。

撚糸文と羽状縄文、綾絡文が施されたもの（135）

135は薄手で、撚糸文→羽状縄文→綾絡文の順に施文されている。

網目状撚糸文が施されたもの（136～145）

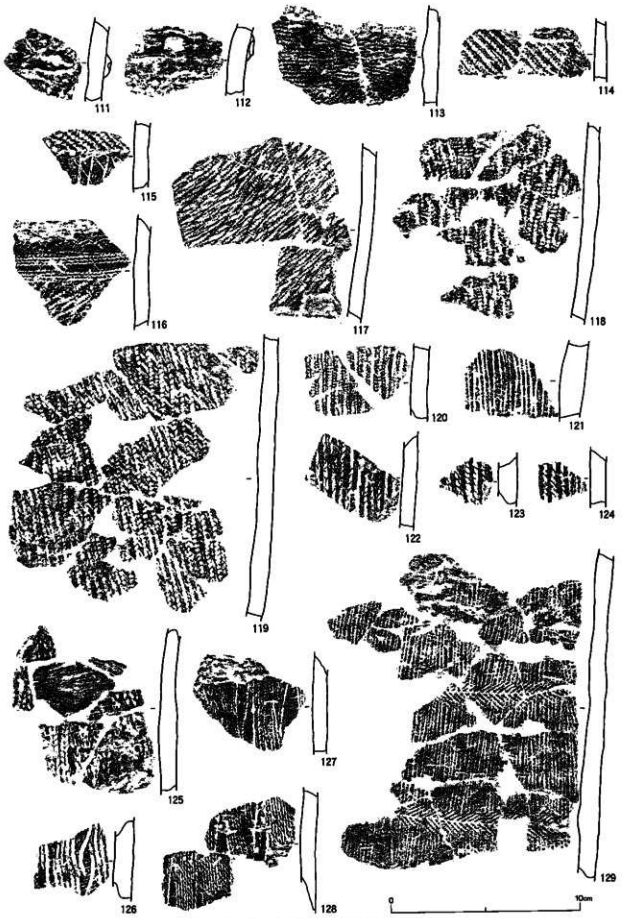
136・145は単軸絡条体第6類による網目状撚糸文が施されたもの。136は口縁部に近い破片で、LRの縄線文も施され、胎土には砂が多く入っている。137は軸に撚り紐を巻きつける際、交差させずに紐の間隔を粗・密と交互に調整して網目状撚糸文と同様の効果を出したもの。138・139は薄手で内面が丁寧に磨かれたもの。140～142は厚手で、140・141の胎土には砂が多く入っている。143・144は紐の巻き方が均一でないもの。胎土には砂、小石が入っている。145の内面は赤褐色で丁寧に磨かれ光沢がある。胎土には海綿骨針が入っている。

付加条の縄文を施したもの（146・147）

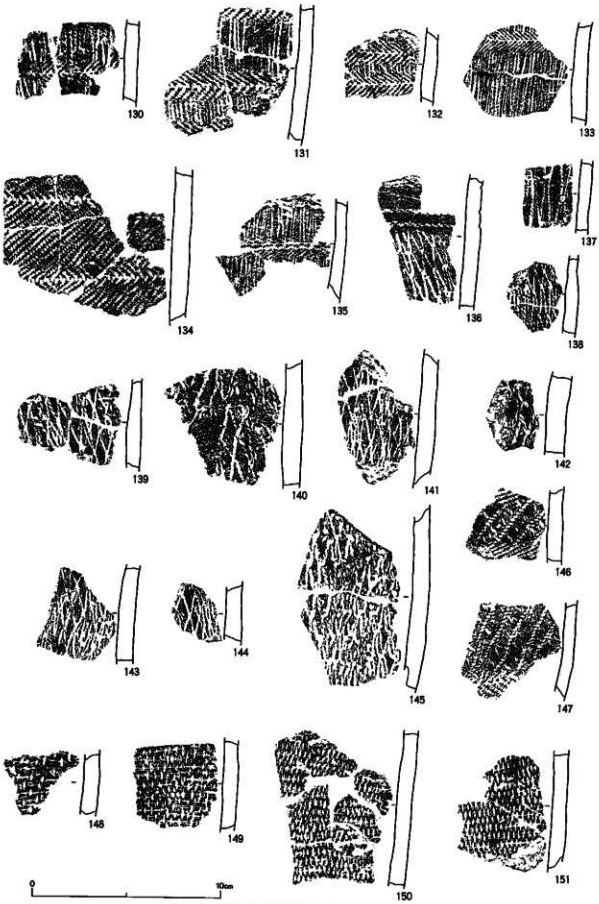
146・147は同一個体で、撚り紐に撚りの異なるLの撚り紐を巻き付けた原体を回転施文したもの。軸となった撚り紐が条の間に確認でき、羽状縄文も施されている。器壁は薄く、焼成は良好で硬い。

多軸絡条体の回転文が施されたもの（148～151）

148・149はやや厚手で軸部分も確認できるもの。150・151は薄手で整った文様である。



図Ⅴ－1－13 包含層出土の土器 Ⅱ群 (12)



図Ⅴ－1－14　包含層出土の土器　Ⅱ群（13）

④底部破片（図Ⅴ－1－5－8・9、Ⅴ－1－15－152～Ⅴ－1－17－210）

③と同様に細分できないため、文様により分類した。

底面に撚糸文が施されたもの（152）

底面に撚糸文が施されたものは1個体のみ出土した。やや上げ底気味の底部である。

縄文が施されたもの（153～159）

いずれも、底部から直線的に広がりながら立ち上がる。153～156は斜行縄文が施されたもの。153の内面調整はやや雑で、胎土には小石が入っている。157は斜行縄文施文後、同一原体を底面近くで縦回転させたもの。158・159は同一個体で複節斜行縄文が施されたもの。

撚り戻しの縄文が施されたもの（160・161）

160は縦行気味に施文されたもの。161はZ－17区から出土したもの（図Ⅴ－1－5）。

自縄自巻的縄文が施されたもの（162・163）

163は底部から垂直気味に立ちあがる。162・163はいずれも胎土に小石が多く入っている。

撚糸文が施されたもの（8・9、164～190）

8、164～172はやや厚手で、太い原体を用いた撚糸文が施されたもの。8はk－15区でまとまって出土し、筒形で、底部近くになりすぼまる器形である。内面は篦状工具で縦方向に丁寧に磨かれている。164は底面近くでわずかにすぼまる。168・169は特に深く施文されている。

173～180は薄手で、より細い原体を用いた撚糸文のもの。

9、181～183は2本一組の撚糸文が施されたもの。いずれも同じ撚りの紐を用いている。9の内面は篦状工具で縦方向に丁寧に磨かれている。

184～186は底面近くがやや外側へ張り出すもの。186は器壁が特に薄い。

187～189はLとRの撚りの異なる原体を用いて施文したもの。188・189は同一個体で、細い原体を用い、特に緻密に施文されている。

190は底面付近で同じ原体による横走する撚糸文が施されたもの。

自縄自巻的縄文と羽状縄文が施されたもの（191～194）

191・192、193・194はそれぞれ同一個体である。いずれも内面は丁寧に調整されている。193は縦方向にも羽状縄文が施されている。

撚糸文と羽状縄文が施されたもの（195～200）

胴部にすだれ状縄文が施されるものである。195・196はやや粗めの、197～199はより細い原体を用いた撚糸文が施されている。199は底面近くに羽状縄文がある。200は127・128と同様に中央部に間隔を空けて縄を巻き付けた単軸絡条体を回転施文し、木目状撚糸文風となっているもの。

撚糸文と綾絡文が施されたもの（201・202）

201・202は同一個体である。器壁は薄手で、内面は篦状工具により丁寧に調整している。

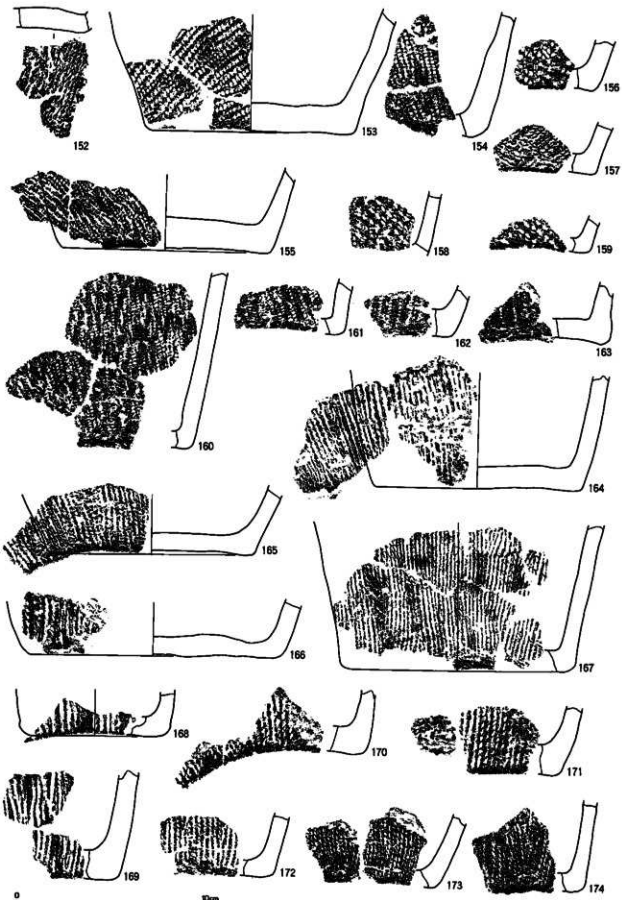
網目状撚糸文が施されたもの（203・204）

単軸絡条体第5類によるもの。203・204は同一個体で、底面近くは丁寧に磨かれ、無文である。

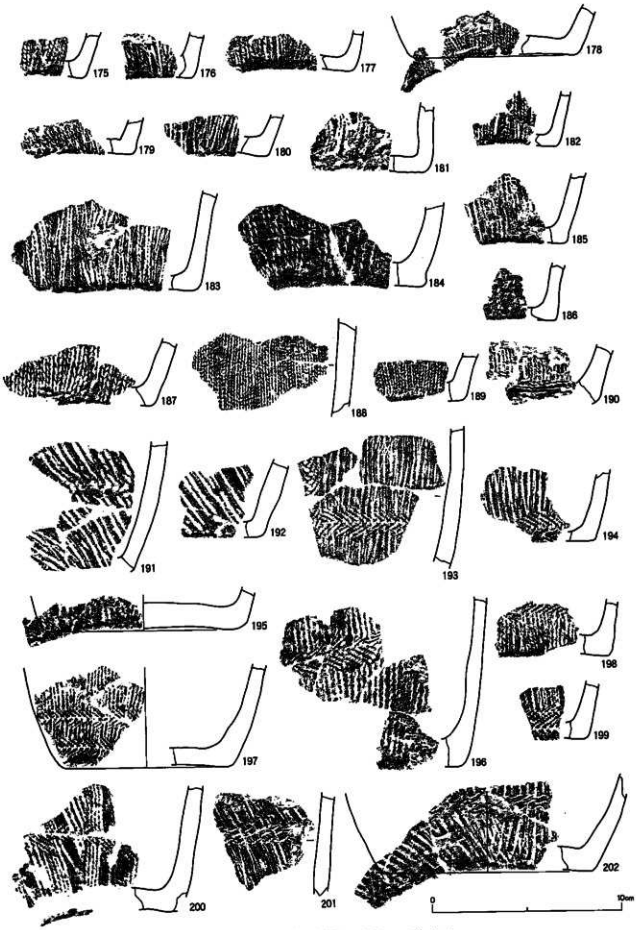
多軸絡条体の回転文が施されたもの（205～210）

205は薄手で、整った多軸絡条体の回転文が施されている。206・207は同一個体で軸も明瞭に確認できる。208～210はさらに羽状縄文も施されたもの。208・209は同一個体で、m－14区Ⅱ層中において6・96と近接して出土したもの（図Ⅴ－1－4）。210は薄手で、羽状縄文の原体を上下逆転させることで、菱形状の文様を呈するもの。

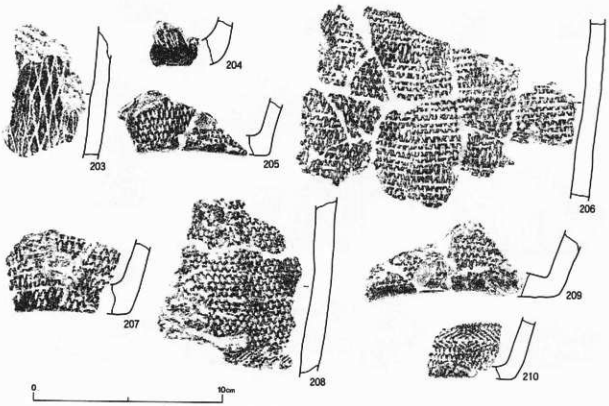
（藤原秀樹）



図Ⅴ－１－15　包含層出土の土器　Ⅱ群（14）



図V－1－16 包含層出土の土器 Ⅱ群 (15)



図V－1－17　包含層出土の土器　Ⅱ群（16）

(3)縄文時代中期・続縄文時代の土器　Ⅲ群・Ⅵ群（図V－1－18－1～4、表13、図版32）

縄文時代中期の土器（図V－1－18－1～3）

サイベ沢Ⅶ式もしくは見晴町式に相当するもの。調査区中央に入る大きな沢をはさんで東側と西側に分布し、合計13点が出土した。多くが小破片で摩滅しており、比較的残存状況の良好な3点を図示した。

1は口縁部の突起部分。胴部には斜行縄文が施文され、口唇部及び円形の突起部分の全周に刻みがある。2は斜行縄文の施された胴部破片。器壁は厚く、内面は磨かれている。胎土には少量の海綿骨針が入る。3は垂直気味に下がる底部で、無文である。胎土には砂が入り、焼成は良好である。

続縄文時代の土器（図V－1－18－4）

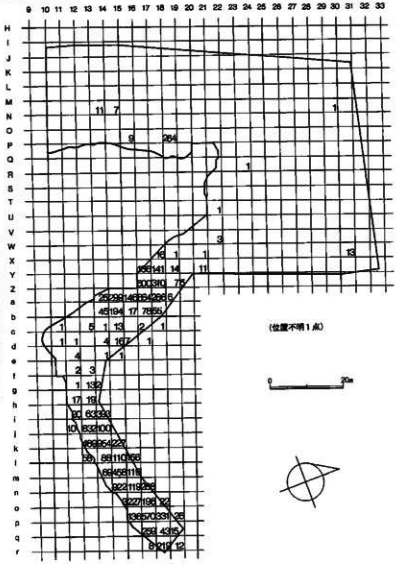
恵山式土器に相当するもの。1点のみが他の土器と離れたM－29区から出土した。

4は縦方向に縄文が施文された後、器面を調整している。薄手で焼成は良好である。

（藤原秀樹）

図V－1－18　包含層出土の土器　Ⅲ群・Ⅵ群

包含層出土土器の分布（破片数）　合計 11006 点（他に遺構 574 点）



II 群 b 類土器の分布（破片数）　合計 10585 点（他に遺構 574 点）

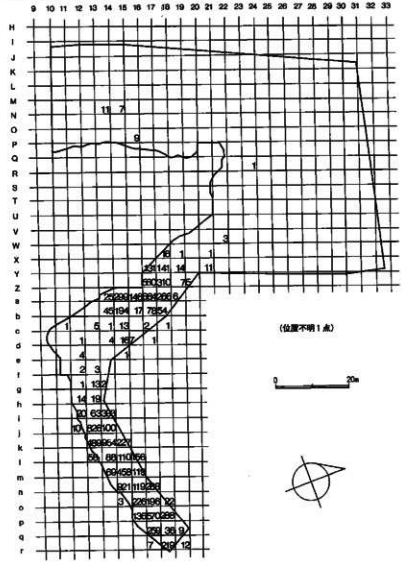
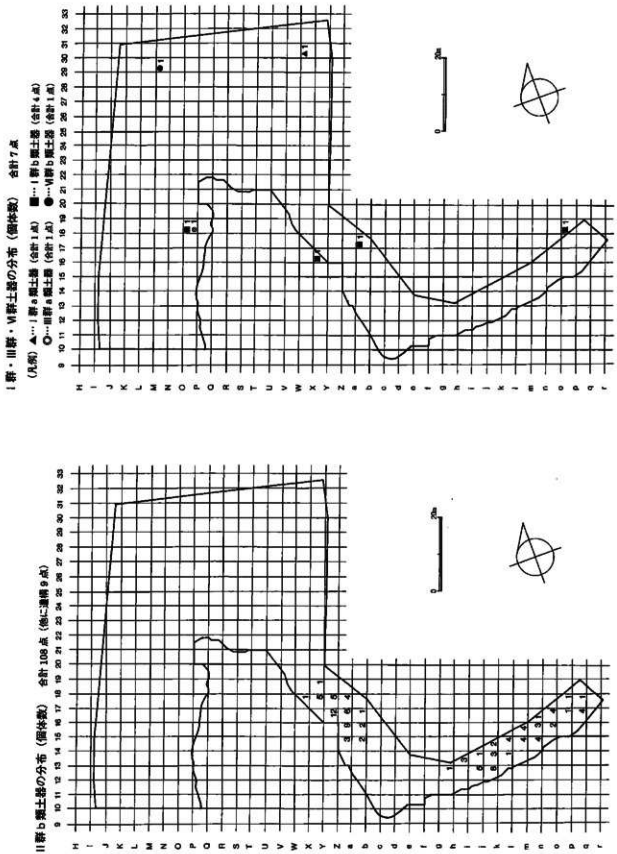
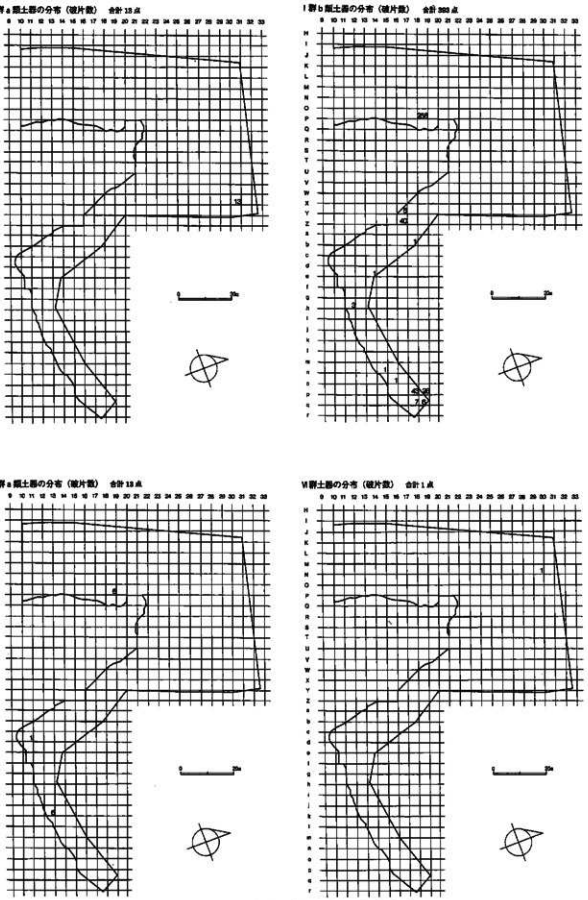


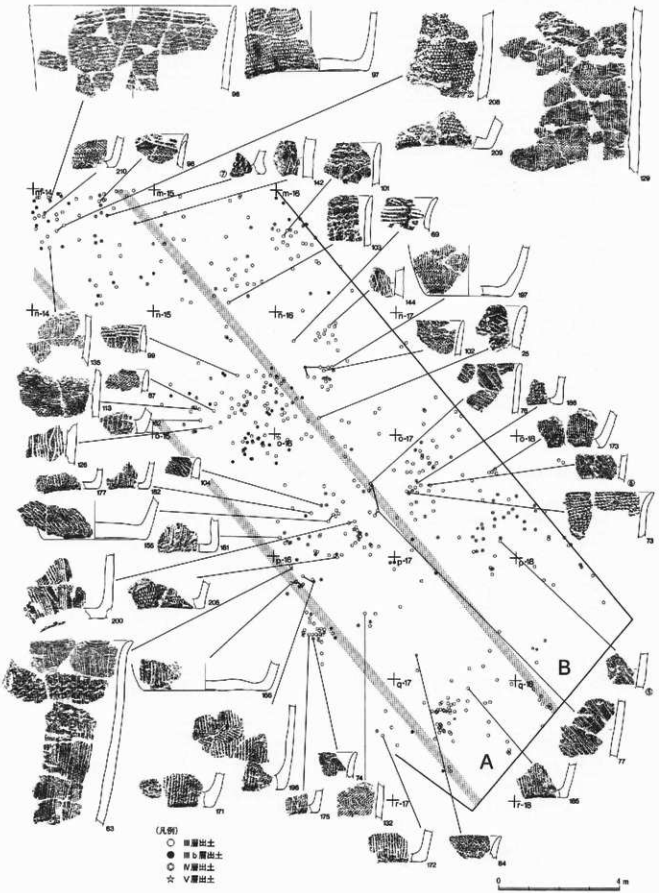
図 V－1－19　包含層出土土器の分布（1）



図V－1－20　包含層出土土器の分布（2）

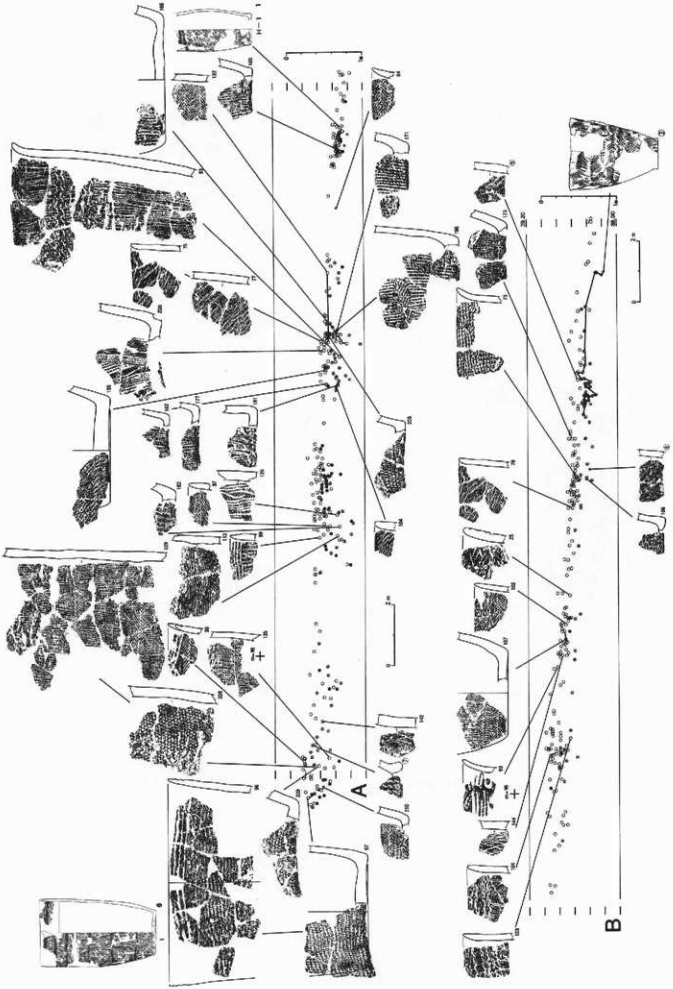


図Ⅴ－1－21 包含層出土土器の分布（3）



図Ⅴ－１－22　包含層出土土器（ｍ～ｒライン）の出土状況（１）

図Ⅴ－1－23　包含層出土土器（m～rライン）の出土状況（2）



図Ⅴ－１－24　包含層出土土器（m～ｒライン）の出土状況（３）

2 石器等

遺跡から出土した石器等の総計は47,903点である。内訳は剥片石器群が26,422点で、磨製石器群、礫石器群、土・石製品の合計点数は21,481点である。

石鏃（1～7）

石材は頁岩製のもの（1～4、6、7）、黒曜石製のもの（5）がある。1～3は木葉形を呈するもの。薄い剥片を利用し、周縁を加工して先端を作り出している。3は破片である。4、5は細長のもの。4は先端部を欠損する。6、7は有茎のものである。

つまみ付きナイフ（8～19）

石材は9、11～13、17は黒曜石製のもの、その他は頁岩製である。8～10は身部が両面調整によって作られるもので、10は身部の大半を欠損する。14～16、18は剥片の片面を調整して刃部が作られるもので、つまみ部分が比較的明瞭に作出されている。19～22はつまみ部が明確に作出されず、身部も粗い加工により作られるものである。

両面調整石器（23～30）

形状は木葉形のもの（23、24、26～29）、矩形を呈するもの（25）がある。いずれも両面が粗く加工される粗工両面調整品とみられる。

錐状石器（31）

31は横長の剥片を利用し、背面は全周を、腹面は側縁のみ加工されている。

スクレイパー（32～62）

32～34は背面側に丁寧な加工がなされるものである。32、33はつまみ付きナイフの破片である可能性もある。35～40は素材の剥片の両側縁に刃部がつくもの。41～49は素材の一側縁に直線上の刃部が作出される。50～57は素材の一側縁に刃部が作られるもののうち、刃部が外反するもの。59、60は刃部が内湾するものである。61は剥片の周縁を刃部とするもの。62はエンドスクレイパーである。

剥片石器片（63、64）

63は両面が加工されているもので、ナイフまたはつまみ付きナイフの破片、64はつまみ付きナイフの破片である可能性がある。

磨製石斧（65、66）

65は緑色泥岩の偏平な礫を利用し、刃部のみが作出される。66は刃部の破片である。

たたき石（67～73）

67、68は小型でやや偏平な礫を素材とするもの。69～72は棒状の礫を素材とするもの。73は拳大のやや角のある礫を素材とするものである。

すり石（74）

74は偏平な礫の一側縁が使用されている。偏平打製石器と用途は同じものであるが、周縁の加工がないためここに収めた。

北海道式石冠（75～79）

75～78はいずれも使用面が明瞭に滑らかで、一部を欠損している。79のみ使用した痕跡のないものである。

偏平打製石器（80～83）

全て偏平で板状の安山岩礫を利用し、周縁を打ち欠いて作られる。81、83は破片、80、84は接合資

料である。

石錐（86）

偏平、板状の安山岩を利用し、二側縁が使用される。刃部の断面はU字状を呈する。

石錐（87）

87は偏平な礫の長端を打ち欠いて抉りを作るものである。

砥石（88）

88は砥石である。凝灰岩の礫の一面を使用しており、溝状の使用痕が数条認められる。

加工痕のある礫（89）

89は偏平打製石器もしくは石鋸の原石とみられるものであり、安山岩の礫を節理面部分から敲打によって剥離した痕跡がある。

青竜刀形石器（90）

90は形状から青竜刀形石器としたものである。野村分類（野村1985）によれば、A型に類するものであるが、柄の部分は偏平で刃部に溝は作られていないことから、特殊な砥石である可能性もある。材質は黄褐色を呈する凝灰岩製である。周辺から土器が出土しておらず、時期は特定できない。

土玉（91）

91は粘土を棒状のものに巻き付けて作られている。胎土、焼成の状態からすると縄文時代中期の可能性がある。

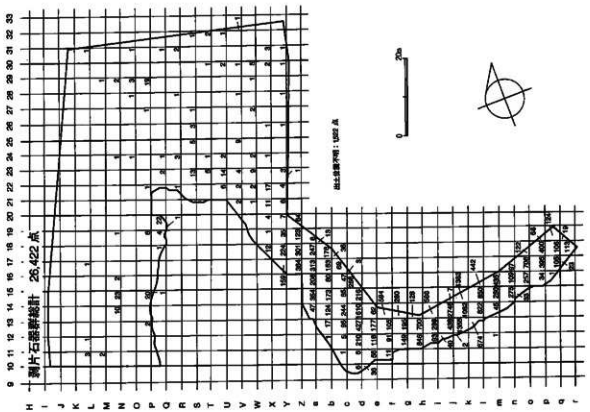
有孔自然石（92、93）

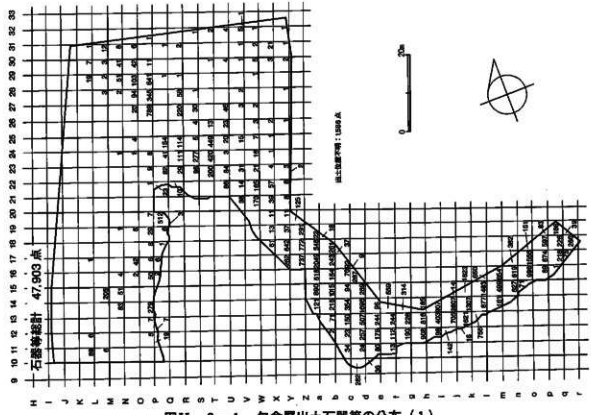
92、93ともに砂岩製である。穴は穿孔されたものではなく、自然のものである。

玉（94）

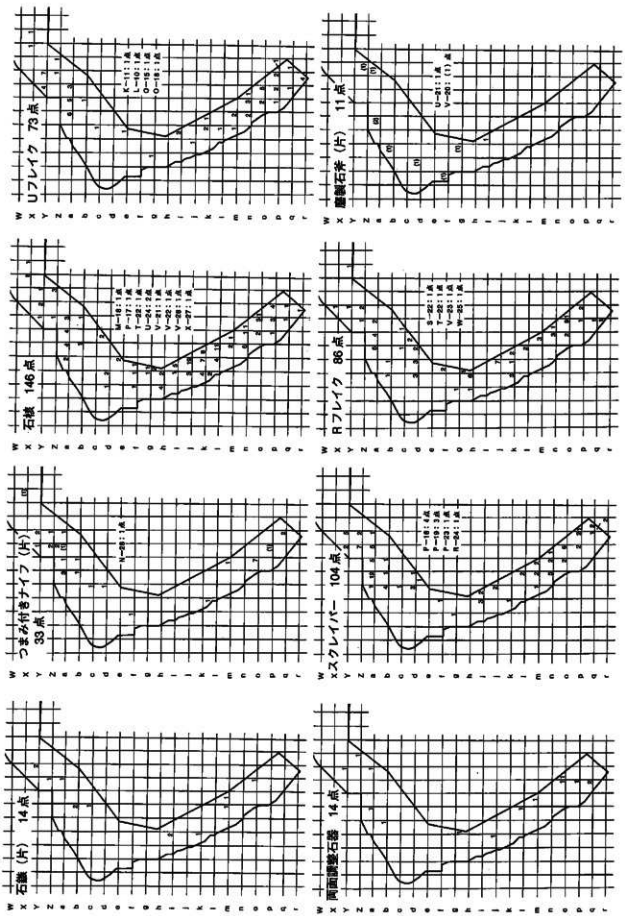
94はヒスイ製で、やや稜のある蝶節状を呈し、中心よりややずれて穿孔される。風倒木の影響を受けた層から出土しているが、周辺の遺物の出土状況から縄文時代前期後半のものであることはほぼ確実である。所属時期の明らかなものでは、管見の限り北海道内最古のものである。北海道内で出土したヒスイ製品に関し、最も古いものとして釧路市北斗遺跡第1地点の第4号墳から出土した縄文時代前期前葉（綱文式）に相当するとみられる装身具が「ヒスイ製（？）」との報告がある（沢ほか1975）。しかしこれは滑石製であることが現在判明している。*1　（立田　理）

*1釧路市埋蔵文化財調査センター　石川　朗氏のご教示による。



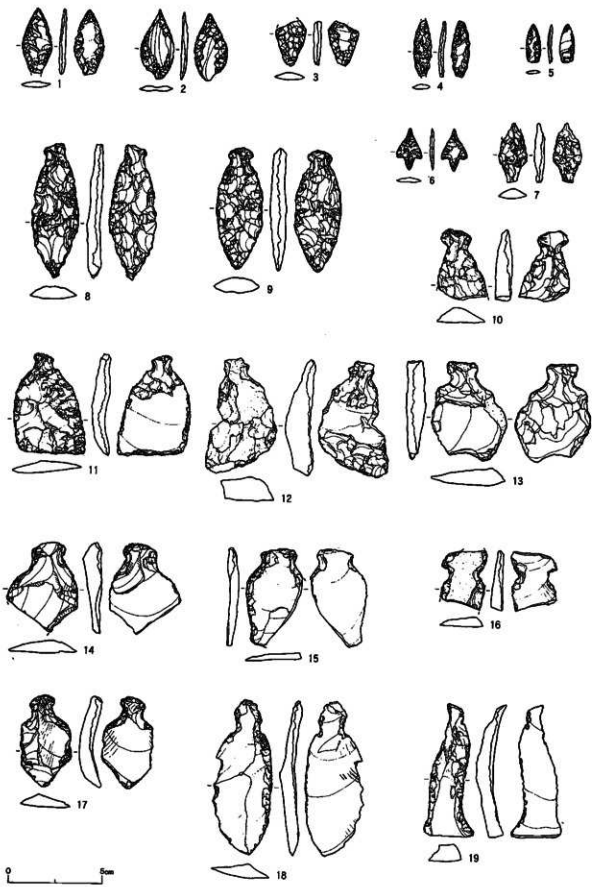


図V－2－1　包含層出土石器等の分布（1）

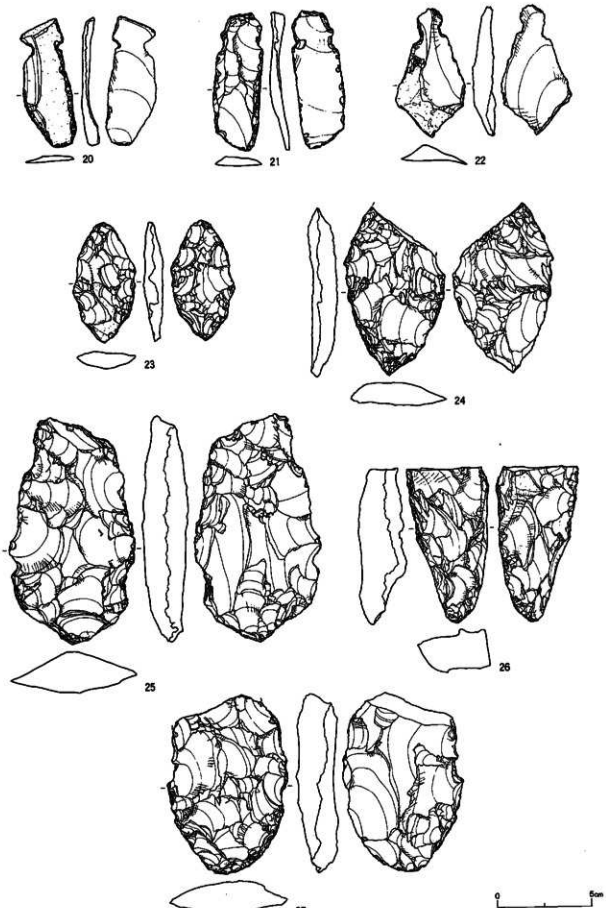


図Ⅴ－2－2　包含層出土石器等の分布（2）

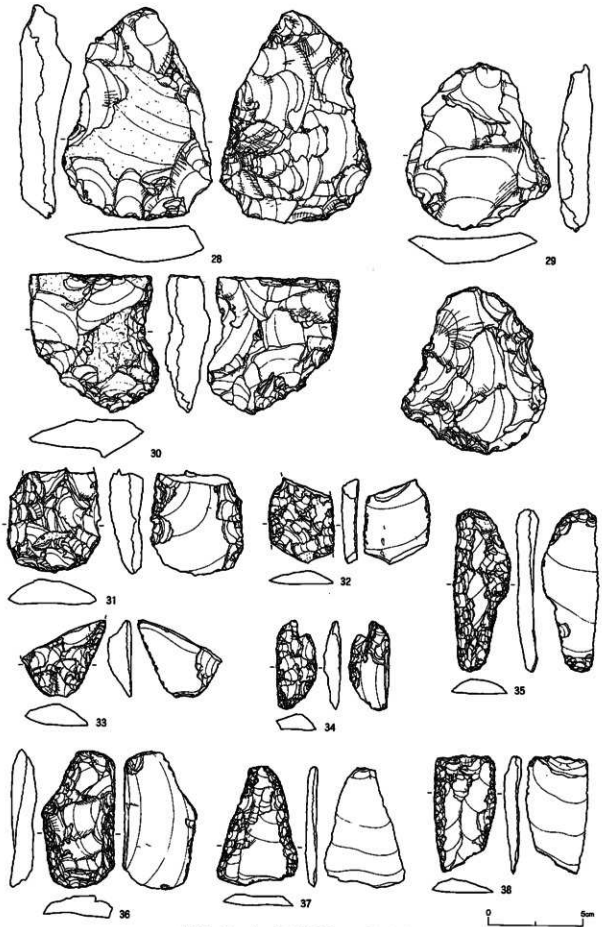
図Ⅴ－2－3　包含層出土石器等の分布（3）



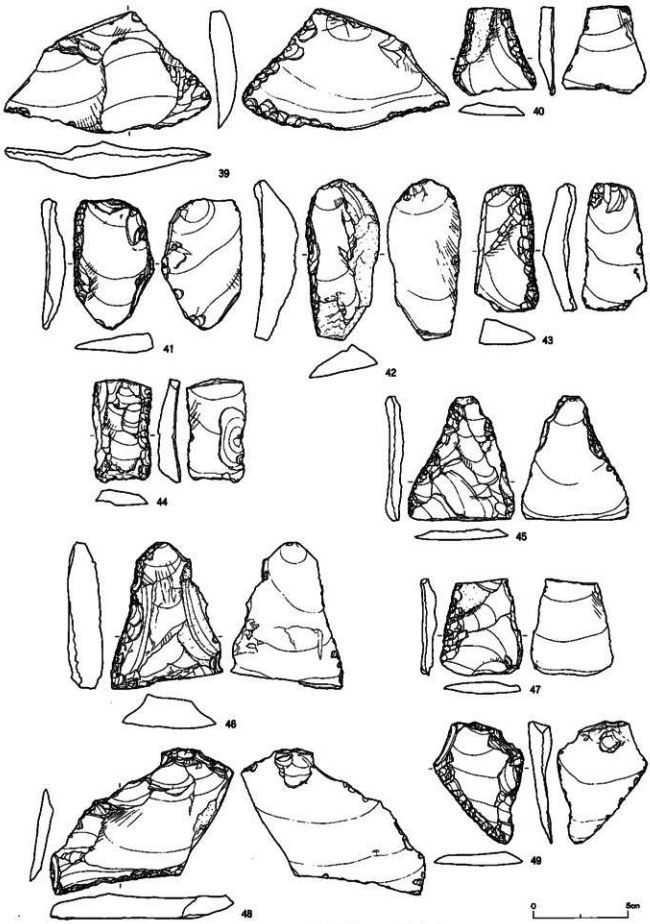
図V－2－4　包含層出土の石器（1）



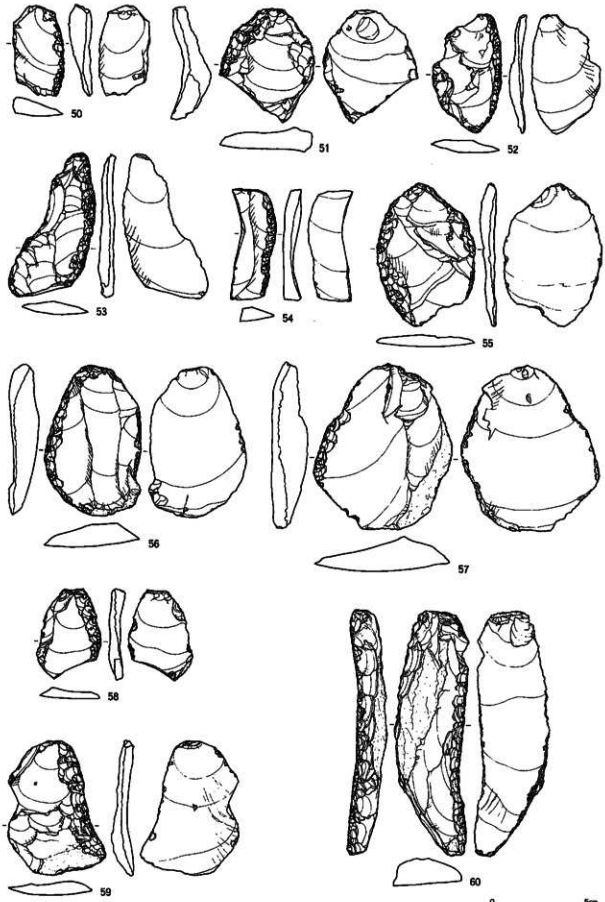
図Ⅴ－2－5　包含層出土の石器（2）



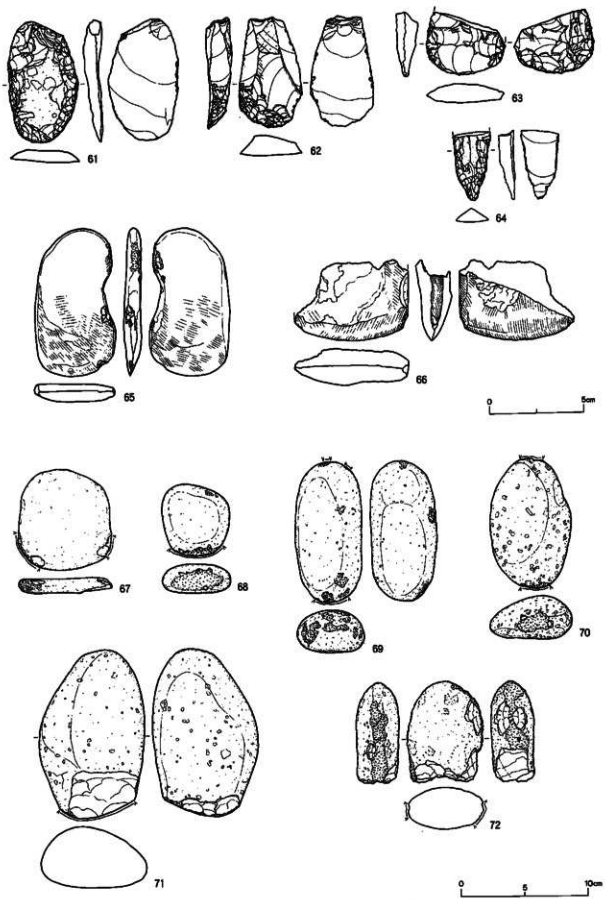
図V－2－6　包含層出土の石器（3）



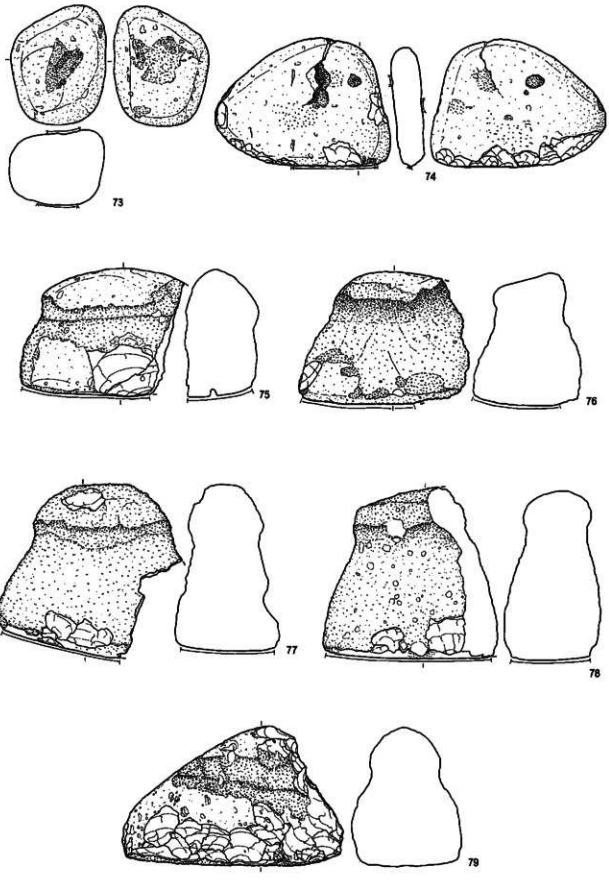
図V－2－7　包含層出土の石器（4）



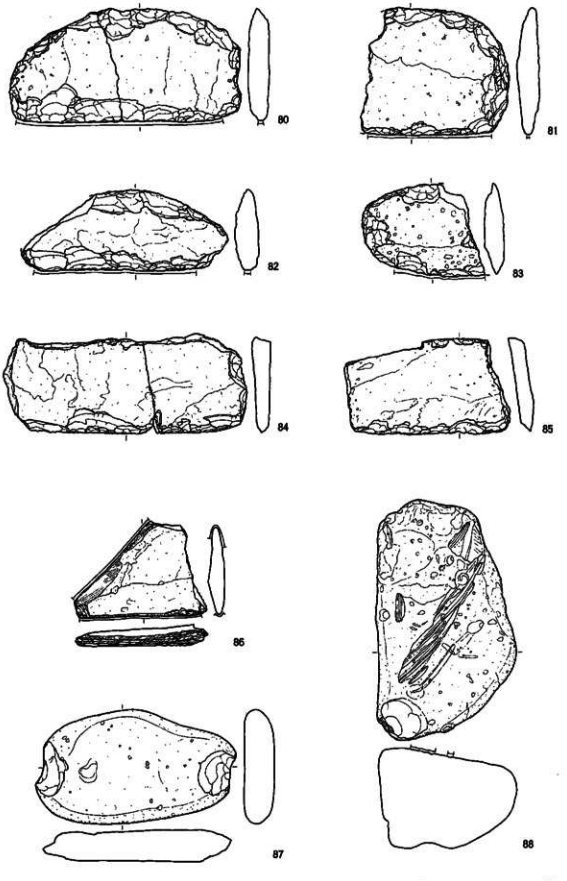
図V－2－8　包含層出土の石器（5）



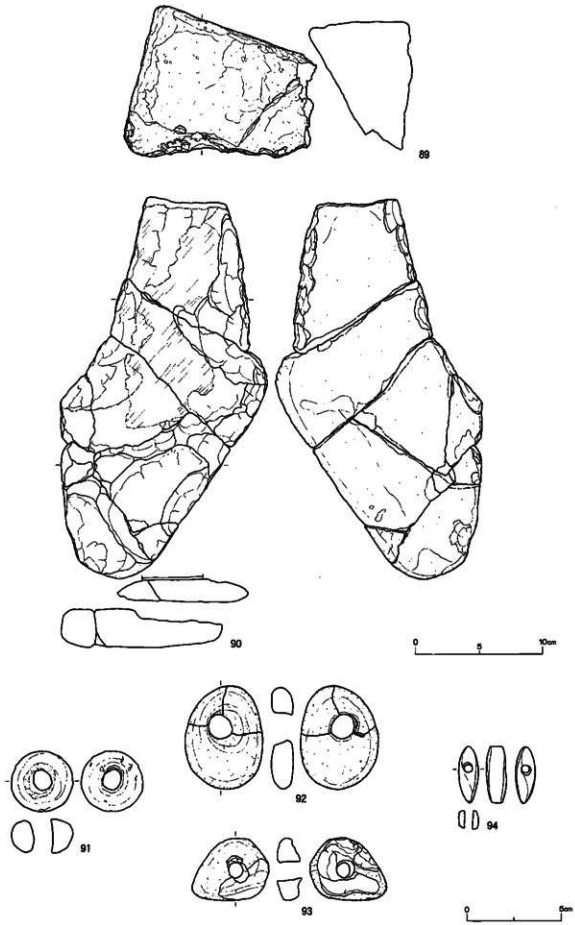
図V－2－9　包含層出土の石器（6）



図V－2－10　包含層出土の石器（7）



図Ⅴ－2－11 包含層出土の石器（8）



図V－2－12　包含層出土の石器（9）・土製品・石製品

Ⅵ　Ⅰ層の遺構

1　家畜埋葬土壙群

表土を重機によって除去した後、c－10区付近に残存していたⅠ層を除去していたところ、土器等に混じって骨片が出土した。当初これらは表土上で死んだ動物の骨が混入したものと考えていたが、さらに調査を進めると楕円形の落ち込みであることがわかった。遺構である可能性を考慮し半截した結果、埋葬されたとみられる動物骨が壙底付近から出土した。

周辺を精査したところ落ち込みは合計７ヶ所確認でき、全て同様の埋葬土壙であることが予想されたため、検出した順番に番号を付け記録をとることにした。土壙は全て段丘斜面とシラリカ川に向かう沢による斜面に区画された見晴らしのよい緩斜面にあり、重複がなく、図Ⅵ－１のように東西南北にほぼ十字に並ぶ。以下にその概要と動物の種類を述べる。

家畜埋葬土壙１　平面形は楕円で長径108cm、短径52cm深さは確認面から約30cmである。動物はウシ科 Bovidae　ウシ*Bos taurus*（家畜）である。

家畜埋葬土壙２　平面形は楕円とみられるが斜面の下方では不明瞭である。長径90cm、短径約60cm、深さは確認面から約35cmである。動物はウシ科 Bovidae　ウシ*Bos taurus*（家畜）である。

家畜埋葬土壙３　全土壙中もっとも小さなもので、平面は斜面の下方で不明瞭であるが楕円形を呈するとみられる。長径62cm、短径約38cm、確認面からの深さは約12cmである。動物はウシ科 Bovidae　ウシ　*Bos taurus*（家畜）であり、非常に若い個体である。

家畜埋葬土壙４　土壙群の中で最も西に位置するものである。土壙の平面形は斜面の下で不明瞭であるが、楕円形とみられる。長径122cm、短径約54cm、確認面からの深さは約23cmである。動物はウシ科 Bovidae　ウシ*Bos taurus*（家畜）である。

家畜埋葬土壙５　土壙群の中で最も斜面の下にあるもので、平面形は南側が失われるためわからないが、骨の出土状態から楕円形であるとみられる。規模は長径86cm短径約54cm、確認面からの深さは24cmである。椎骨、頭骨は明瞭に確認できた。動物はウシ科 Bovidae　ウシ*Bos taurus*（家畜）である。

家畜埋葬土壙６　最も規模の大きなものである。平面は隅丸長方形を呈し、長径184cm、短径104ｍ、確認面からの深さは53cmである。動物はウマ科 Equidae　ウマ*Equus caballus*である。

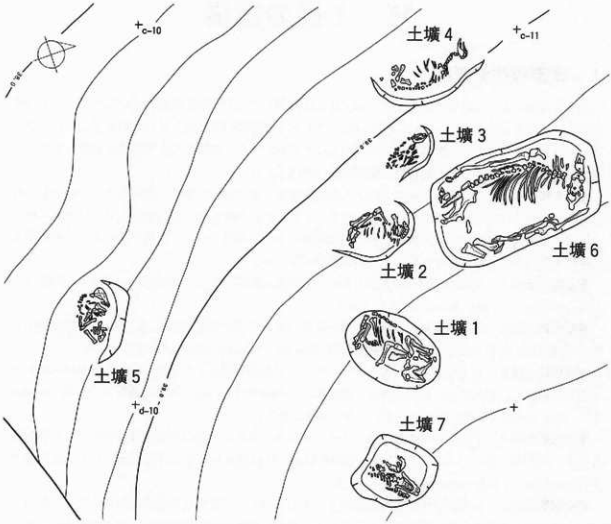
家畜埋葬土壙７　土壙の中で最も東に位置し、平面はほぼ隅丸正方形である。長径は74cm、短径は70cm、確認面からの深さは20cmである。動物はウシ科 Bovidae　ヒツジ*Ovis aries*である。

なお、骨の同定は千歳サケのふるさと館 高橋　理氏によるもので、以下のコメントをいただいた。

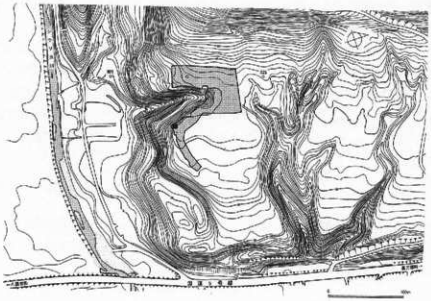
「ウシは全て家畜であり、成長が促進され骨壁の粗面が著しい。ウマは大型の成獣である。ヒツジが１体あるのが特筆される。解体痕は全く観察されなかった。疾病や成長不良で死亡した個体をそのまま埋葬したものと考えられる。」

これらの土壙の時期は覆土に駒ヶ岳火山灰ko-dがブロック状に混入していること、骨の風化の度合いから近代のものである。

土壙に切り合いがなく、骨に解体された痕跡もないことから、これらの動物は同時に埋葬された可能性も残るが、手厚く埋葬されたとものと想像できる。また元地権者の話によれば、戦前ここに馬頭観音があったとのことである。　（立田　理）



拡大図の範囲



図Ⅵ－1　家畜埋葬土壙群位置図

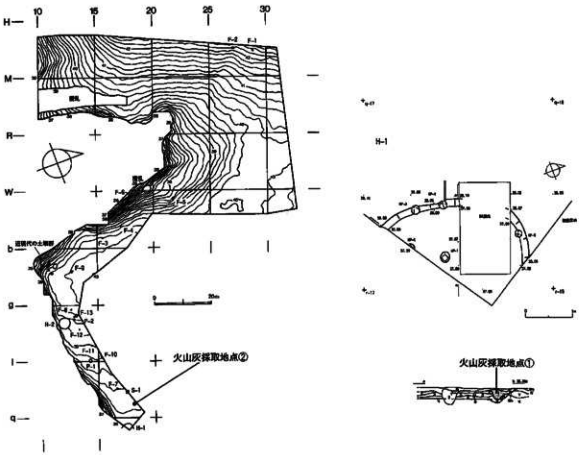
Ⅶ　自然科学的分析

1　シラリカ２遺跡の火山灰について

ここで取り扱う火山灰は、住居跡Ｈ－１の覆土やその周辺の黒ボク土中に散在する火山灰である。この火山灰は、米粒以下のサイズで粒状に産出し、シルト質で褐色である。試料は図Ⅶ－１の２地点から採取した。①はＨ－１の覆土中の、②は①と同層準と考えられる黒ボク土中の火山灰である。試料は超音波洗浄後、ペトロポキシ154で封入したプレパラートを作成し、偏光顕微鏡で検鏡した。

結果：火山灰の鉱物組成を表Ⅶ－１に、顕微鏡写真を写真１に示す。両試料とも斜長石と火山ガラスが多く、②は斜方輝石と不透明鉱物も多い。火山ガラスの形態は両試料とも共通で、泡壁がつくる模様が網目様を呈する軽石型である。泡壁の厚さは非常に薄い。気泡の径は0.01～0.02㎜である。両試料とも同一火山灰と考えられる。

以上のような鉱物組成と火山ガラスの形態を有する火山灰は、長万部町の富野３遺跡で駒ヶ岳起源のKo-gに対比された火山灰（北海道埋蔵文化財センター，1999）と同じである。富野３遺跡では、縄文時代早期の住居跡の覆土中にレンズ状に厚くKo-gが堆積している。シラリカ２遺跡ではKo-gは地層として保存されていないが、今回取り扱った火山灰が一般にＨ－１より上位に産出するらしいこ



図Ⅶ－１　火山灰の採取地点

とから、現在のところH－1はKo–gよりも古いと考えられる。Ko–gの年代は5000～6000yBPである（町田・新井，1992）。

引用文献

北海道埋蔵文化財センター（1999）：「長万部町富野３遺跡」．381pp.
町田　洋・新井房夫（1992）：「火山灰アトラス」．東京大学出版会，276pp.

（花岡正光・藤原秀樹）

表Ⅶ－1　火山灰の鉱物組成

試料*	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	火山ガラス
採取地点①	頗る多い	少ない	まれ	少ない	多い
採取地点②	多い	多い	まれ	多い	多い

＊全粒径

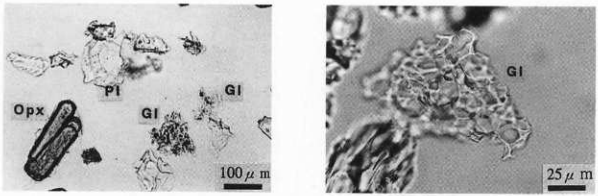


写真１　火山灰の顕微鏡写真
（採取地点②、下方ポーラーのみ）
Pl：斜長石　Opx：斜方輝石　Gl：火山ガラス

2　八雲町シラリカ2遺跡出土ヒスイ製玉の産地分析

藁　科　哲　男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法[2,3),4)]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例[5)]が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

(1)　石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。

(2)　玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉は北海道山越郡八雲町黒岩289番地ほかに位置するシラリカ2遺跡のⅣ層（縄文時代早期～前期の包含層）中の風倒攪乱による落ち込みから出土したヒスイ製玉1個について産地分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[4)]非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地を区別する指数とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した[5]。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産[6]、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を図Ⅶ－２に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光Ｘ線分析

ヒスイの主成分元素はナトリュウム（Ｎａ）、アルミニュム（Ａｌ）、珪素（Ｓｉ）などの軽元素[7]で、次いで比較的含有量の多いカルシウム（Ｃａ）、鉄（Ｆｅ）、ストロンチウム（Ｓｒ）である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム（Ｋ）、チタニウム（Ｔｉ）、クロム（Ｃｒ）、マンガン（Ｍｎ）、ルビジウム（Ｒｂ）、イットリウム（Ｙ）、ジルコニウム（Ｚｒ）、ニオビウム（Ｎｂ）、バリウム（Ｂａ）、ランタニウム（Ｌａ）、セリウム（Ｃｅ）の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のＸ線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリュウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出きる方法が確立されるまでは、蛍光Ｘ線分析でＮａ元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にＮａ元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大歷、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Ｎａ元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はＳｒのピークがＦｅのピークに比べて相当大きく、またＺｒの隣に非常に小さなＮｂのピークが見られ、Ｂａのピークも大きく、糸魚川産では見られないＬａ、Ｃｅのピークが観測されている。このＣｅのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらＣｅを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Ｔｉの含有量が多く、Ｙのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、ＣａピークにⅡべてＴｉとかＫ、またＦｅピークに比べてＳｒなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料

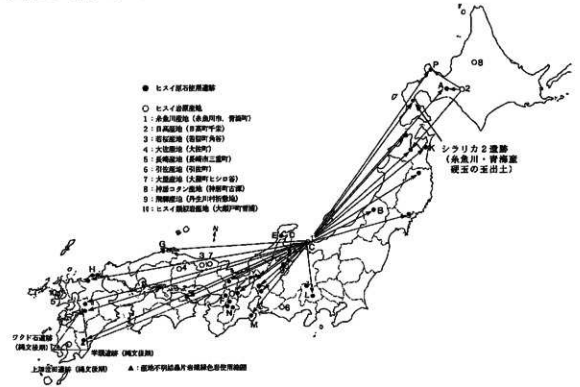
となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Ｓｒ、Ｚｒのピークが全く見られないため、糸魚川産などのＳｒ、Ｚｒを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素（Ａｓ）のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は３個しか分析できなかったが良質である。このうち１個は濃い緑色で、他の２個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が少ない



注：糸魚川・青海産ヒスイは沖縄県糸満市産城上原２遺跡および北谷町クマヤー洞窟遺跡に伝播している。

図Ⅶ－２　ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の原材使用分布圏

ため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表Ⅶ－２、３に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではＳｒ／Ｆｅの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表Ⅶ－３の判定基準(2)にはＣｒ、Ｍｎ、Ｒｂ、Ｙ、Ｎｂ、Ｂａ、Ｌａ、Ｃｅの各元素の蛍光Ｘ線ピークが観測できた個体数を％で示した表である。例えば遺物を分析してＢａのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図Ⅶ－３はヒスイ原石のＳｒ／Ｆｅの比の値とＳｒ／Ｚｒの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がＳｒ／Ｆｅの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入れば ミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にＢａの蛍光Ｘ線スペクトルのピークが見られなかった場合、表Ⅶ－３の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物

表Ⅶ－２　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

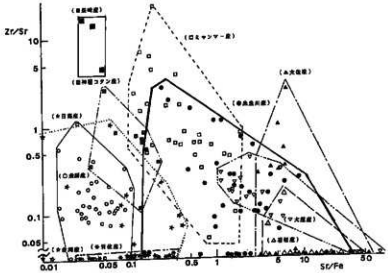
原産地名	分析個数	蛍光Ｘ線法による元素比の範囲					
		比重	Ｋ／Ｃａ	Ｔｉ／Ｃａ	Ｓｒ／Ｆｅ	Ｚｒ／Ｓｒ	Ｃａ／Ｓｉ
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマー産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.09～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ＮＤ：検出限界以下の濃度

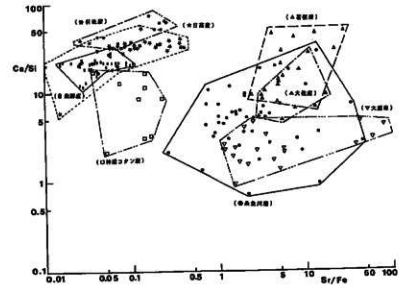
表Ⅶ－３　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光Ｘ線法による分析元素（各元素が確認できた個体数の百分率）							
	Ｍｎ	Ｒｂ	Ｙ	Ｎｂ	Ｂａ	Ｌａ	Ｃｅ	Ｃｒ
糸魚川産	26％	6％	20％	ＮＤ	13％	33％	ＮＤ	ＮＤ
若桜産	ＮＤ	ＮＤ	16％	ＮＤ	100％	100％	67％	67％
大佐産	ＮＤ	ＮＤ	44％	ＮＤ	33％	100％	67％	67％
長崎産	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	100％	100％	100％	100％	100％
日高産	ｔｒ	ｔｒ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ｔｒ	ＮＤ	ＮＤ
引佐産	88％	75％	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ
大屋産	ｔｒ	ＮＤ	31％	ＮＤ	6％	90％	100％	100％
神居コタン産	ＮＤ	100％	22％	100％	ＮＤ	55％	ＮＤ	ＮＤ
飛騨産	100％	100％	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ
ミャンマー産	13％	4％	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	35％	ＮＤ	ＮＤ
台湾産	ｔｒ	ｔｒ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ	ＮＤ

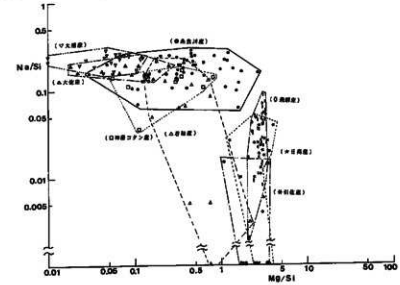
ＮＤ：検出限界以下　ｔｒ：検出確認



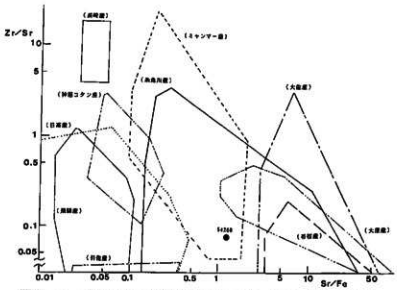
図Ⅶ－3　ヒスイ原石の元素比値Ｚｒ／Ｓｒ対Ｓｒ／Ｆｅの分布および分布図



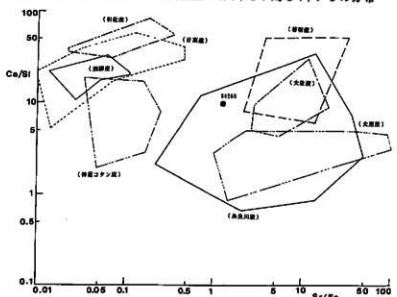
図Ⅶ－4　ヒスイ原石の元素比値Ｃａ／Ｓｉ対Ｓｒ／Ｆｅの分布および分布図



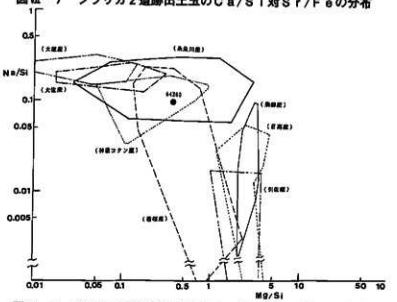
図Ⅶ－5　ヒスイ原石の元素比値Ｎａ／Ｓｉ対Ｍｇ／Ｓｉの分布および分布図



図Ⅶ－6　シラリカ２遺跡出土玉のＺｒ/Ｓｒ対Ｓｒ/Ｆｅの分布



図Ⅶ－7　シラリカ２遺跡出土玉のＣａ/Ｓｉ対Ｓｒ/Ｆｅの分布



図Ⅶ－8　シラリカ２遺跡出土玉のＮａ/Ｓｉ対Ｍｇ/Ｓｉの分布

表Ⅶ－４　シラリカ２遺跡出土のヒスイ製玉の元素分析値と比量の結果

遺物	分析番号	元素分析値の比量									
		Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Sr/Fe
玉	64260	0.098	0.371	0.12	0.01	10.831	0.01	0.024	0.020	0.035	1.221
JG－1		0.027	0.076	0.08	1.32	3.056	0.29	0.001	0.022	0.000	0.367

遺物	分析番号	元素分析値の比量							試料比重	試料重量
		Zr/Sr	Nb/Sr	Ba/Sr	La/Sr	Ce/Sr	Rb/Sr	Y/Sr		
玉	64260	0.076	0.01	7.55	0.06	0.18	0.01	0.00	3.313	6.11241
JG－1[a)]		0.766	0.05	5.33	0.12	0.31	0.77	0.15		

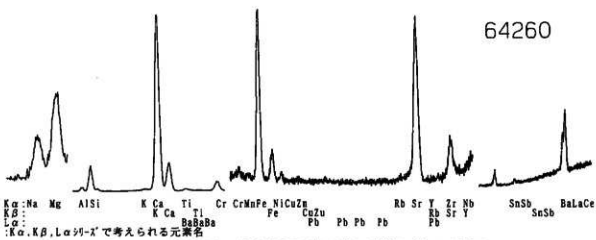
a）：標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG - 1 granodiorite and JB - 1 basalt. Geochemical Journal, Vol. 8 175 - 192.

表Ⅶ－５　シラリカ２遺跡出土のヒスイ製玉の原材産地分析結果

遺物	分析番号	各分類基準による判定				総合判定
		図６判定	図７判定	図８判定	比重&基準(2) Ni/Fe判定[a)]	
玉	64260	IT	IT	IT,WK,KM	IT, IN	糸魚川産

IT：糸魚川　WK：若桜　OS：大佐　NG：長崎　HK：日高　IN：引佐　OY：大屋
KM：神居コタン　HD：飛騨

a）：Ni／Fe比は日高産地および飛騨産地に同時に帰属された遺物の分類指標
（飛騨産原石、42個の平均値±標準偏差）Ni／Fe＝0.091±0.030
（日高産原石、14個の平均値±標準偏差）Ni／Fe＝0.065±0.028



図Ⅶ－９　シラリカ２遺跡出土玉（64260）の蛍光Ｘ線スペクトル

の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ｃａ／Ｓｉ比とＳｒ／Ｆｅ比を指標とすることにより（図Ⅶ－４）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Ｎａ／Ｓｉ比とＭｇ／Ｓｉ比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図Ⅶ－５）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

シラリカ２遺跡出土の玉の分析結果

出土玉の比重が3.3以上（アルキメデス法）あり良質硬玉の可能性の範囲に入る。蛍光Ｘ線スペクトル（図Ⅶ－９）には硬玉の主成分の一つのＮａ元素が観測されることから、この玉を硬玉製と判定した。また、分析できた含有元素の結果を表Ⅶ－４に示した。この硬玉製玉の原産地を明らかにするために、これら分析値を各原産地の原石の元素比量Ｓｒ／Ｆｅ対Ｚｒ／Ｓｒの分布範囲と比較すると、玉は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示す（図Ⅶ－６）。また、Ｓｒ／Ｆｅ対Ｃａ／Ｓｉでも、玉は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示した（図Ⅶ－７）。またＮａ／Ｓｉ対Ｍｇ／Ｓｉの判定図Ⅶ－８では、玉は糸魚川、若桜、神居コタンの重なる範囲に入っている。これら判定図と判定基準表１の比重の範囲およびＢａ元素の有無などの条件を考慮して、全ての条件を満たした玉の産地として、糸魚川・青海産硬玉を使用した玉と同定し、結果を表Ⅶ－５に示した。

結　論

今回分析したシラリカ２遺跡出土の玉には大きなＢａ元素のピークが観測されているが、分析した糸魚川産ヒスイ原石の33％に同じくＢａのピークが見られる。比重も3.3以上あり良質の硬玉のようである。この硬玉製玉が縄文時代早期～前期のものであれば、非常に古い時期の硬玉製玉の一つとして位置づけることができる。糸魚川産硬玉が多量に北海道に伝播した時期は縄文時代後期で、多くみられ、使用遺跡を抜粋して示すと例えば北海道千歳市美々遺跡から青森県大石平遺跡、岩手県大日Ⅱ遺跡、山梨県石堂遺跡、岐阜県西田遺跡、愛知県白石遺跡、三重県森添遺跡、大分県二反田遺跡、熊本県ワクド石遺跡、宮崎県学頭遺跡まで日本全国におよび、これら遺跡では糸魚川産ヒスイが尊重される共通の基盤を持っていたと思われ、糸魚川産地から遠くなるにしたがって、希少価値が増すと推測され本遺跡がヒスイの玉類を入手できる力（経済力）が大きかったことが推測される（図Ⅶ－２）。

参考文献

1）芽原一也（1964）、長者ケ原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63－73
2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要６：１－18
3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』、14：95－109
4）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59－89
5）Tetsuo Warashina（1992）、Allоction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357－373
6）番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録No18：11－15
7）河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石砿物鉱床学雑誌22：195－201

Ⅷ　成果と課題

1　シラリカ２遺跡出土の円筒土器下層式について

八雲町シラリカ２遺跡では縄文時代前期の円筒土器下層ｄ式に近接しているがそれよりも古手と考えられ、下層ａ・ｂ式までには遡らない土器が主体的に出土した。この内、復元土器の拓影図を図Ⅷ－１～３に示しておいた。これらは、山内・三宅などによって設定されたｃ式とは特に口縁部文様帯の様相が異なり、森町森川Ａ遺跡出土資料（熊野・八木1974）に類似している。

このような土器群は近年、大沼により円筒土器下層ｃ式に相当するものと考えられ、森川式が設定されている（大沼1986）。

ここでは大沼の見解を踏まえ、本遺跡出土土器について若干まとめてみたい。

(1)円筒土器下層式の研究史－円筒土器下層ｃ式を中心として－

円筒土器は長谷部言人が上層・下層で土器が層位的に出土することを確認（長谷部1927）し、更に下層式について山内清男がｂ・ｃ式を層位的に、ａ・ｄ式を型式学的に細分した（山内1927）。その後、江坂輝彌（江坂1970）・村越潔（村越1974）・三宅徹也（三宅1974、1981、1989）などが下層式を詳細に検討し細分した。現在ではａ・ｂ１・ｂ２・ｃ・ｄ１・ｄ２式の大きく６型式に分類するのが通例であろう。

北海道においても、同様の土器が出土することは古くから長谷部・山内によって指摘されていた。しかし本格的な調査は大場らによる函館市サイベ沢遺跡の発掘調査を嚆矢とする（児玉・大場・武内1958）。サイベ沢遺跡では縄文時代前期に相当する第Ⅰ～Ⅳ文化層が確認され、層位的に土器・石器の変遷が示されている。この後、松崎・渡辺により江差町椴川遺跡などの資料が紹介され（松崎・渡辺1959）、これらを吉崎がまとめている（吉崎1965）。

吉崎は下層ａ・ｂ式に椴川式・茶呑場上層Ⅱ式、下層ｃ式にサイベ沢Ⅱ式、下層ｄ式にサイベ沢Ⅲ式・勝山館Ⅱ式が相当するものとしている。この見解はその後、広く受け入れられ、小笠原が更に下層ａ式に相当するものとしてハマナス野Ⅰ式を設定し、椴川式、サイベ沢Ⅱ・Ⅲ式をそれぞれａ・ｂに細分した。サイベ沢Ⅱ式は下層ｃ式に、サイベ沢Ⅲ式は下層ｄ式に相当するとし吉崎の見解を踏襲している（高橋・小笠原1980、小笠原1982）。

しかし、下層ｃ式については口縁部文様帯が広く、そこに幾何学的な押圧縄文が施され、胴部文様に羽状縄文が多用されるとする山内、三宅などによって設定されたｃ式に類似する資料が北海道ではあまり出土しなかった。このため、千代はｃ式が北海道に存在すること自体を検討する必要があるとしている（千代1975）。

また、下層ｃ式相当と考えられたサイベ沢Ⅱ式は多くが筒型で口縁部文様帯が狭いこと、すだれ状縄文が多用されることなどから、むしろ下層ｄ１式相当と考える方が妥当と考えられ（大沼1986など）、ｃ式については見解が定まらない状況となっていた。

このような中、木古内町新道４遺跡の調査が行われ（道埋文1985、1986、1987）、一連の調査を担当した大沼が前期の土器についてまとめている（大沼1986）。大沼は下層ａ式を椴川遺跡出土資料、ｂ式を函館空港出土資料とした。下層ｃ式については従来円筒土器下層式に先行するものとも見なされてきた（千代1975）サイベ沢遺跡第Ⅰ文化層の資料、森町森川Ａ遺跡出土資料、ハマナス野遺跡出土資料の一部、知内町湯の里２遺跡の出土資料などを挙げている。また、ｄ１式にサイベ沢Ⅱ式、ｄ

2式に同Ⅲ式が相当するとした。

この見解は北海道では次第に受け入れられるようになっているが、大沼によってc式の新しい段階と考えられた新道4遺跡出土土器の一部は（道埋文1987）、三宅によってd1式とされる（三宅1989）など細部ではまだ一致していない部分もある。

(2)開拓記念館所蔵の森川A遺跡出土土器について（Ⅲ章－2参照）

熊野・八木によって報告された熊野コレクションの森川A遺跡出土資料（熊野・八木1974）は現在、北海道開拓記念館に収蔵されている。今回本遺跡の報告をするにあたって、実見する機会を得た。

器形は筒形に近いものと細長いバケツ状のものとがあり、器高は最大で50cmのものがあるが、多くは30cm前後である。いずれも口縁部がわずかに外反し、口唇部は指頭により調整され、わずかに波打つものが多い。中には4ヵ所の波状口縁となるものもある。また、口唇部の調整により粘土が器面側にまくれているものもあった。全般的に薄手で胎土に繊維は少なく、焼成は良好である。内面は丁寧に磨かれているが、器面・内面ともに凹凸が確認できる。

口縁部文様帯には鋸歯状・幾何学的な縄線文、平行縄線文、無文地に綾絡文、網目状撚糸文、斜行縄文、付加条の原体による斜行縄文、自縄自巻的縄文などが施されている。胴部には単節・複節の斜行縄文、付加条の原体による斜行縄文、自縄自巻的縄文、撚糸文、網目状撚糸文、多軸絡条体回転文が施されている。また、底部近くに条痕文が見られるものもあった。なお、撚り戻しの縄文は無く、すだれ状縄文は破片資料で2点のみが確認できた。文様帯の区画は隆帯、縄線文、綾絡文によってなされている。隆帯上には刺突がある場合が多く、地文施文後に隆帯が貼り付けられたものもあった。

これらの土器は一括資料として考えることができると言う（開拓記念館、平川氏のご教示による）。

(3)シラリカ2遺跡出土の円筒土器下層式

今回、本遺跡で出土した土器の多くは森川A遺跡出土資料に類似しているものが多く、下層d1式に相当すると推測されるものが少量あった。住居跡（H－2）の床面で本遺跡で主体となる土器（Ⅱ群b－1類）が、覆土から下層d1式もしくは新道4遺跡Ⅱ群B1類3群（大沼＝c式、三宅＝d1式とする資料）に相当する資料（Ⅱ群b－2類）が出土した。このため、床面出土の土器は層位的に下層d1式よりもやや古いもので下層c式並行の土器であることが推測できた（注1）。

なお、本遺跡の場合と同様に南茅部町ハマナス野遺跡HP－123でも層位的に変遷がとらえられる（図Ⅷ－5）。覆土下位のX2－4・5層から本遺跡出土のものと類似する森川式土器が、上位のX2－1～3層から筒型で文様帯が狭く胴部にすだれ状縄文、多軸絡条体回転文が施文される下層d1・d2式相当の土器が出土している（注2）。

①Ⅱ群b－1類土器について

このような結果を基に、本報告では土器の分類を行った。本遺跡ではⅡ群b－1類（森川式・下層c式）が最も多く出土した。その中で、1～4の復元土器が段丘縁のj－13区でまとまっており（図Ⅷ－4上段、図版19）、同時に廃棄されたと考えることができる。大きめの深鉢1個と小型の深鉢3個がセットとなりそうであり、長万部町花岡2遺跡H－9出土土器の4個体のセット（図Ⅷ－6）と符合する。

これら、Ⅱ群b－1類土器は胎土に繊維が少なく、おおむね調整は良好である。また、概して薄手で小型のものが多い。器形は古手で筒型に近く、次第にバケツ状となるかと考えられる。口縁部がわずかに外反し、口唇部は指頭により調整され小波状を呈する。口縁部文様帯には綾絡文や縄線文が多用される。胴部文様には斜行縄文、撚り戻しの縄文、撚糸文、自縄自巻的縄文などが施され、さらに2種類の原体を用いて施文することも多い。

なお、これらの土器は、主に青森県で設定されたc式と文様帯の幅が広いことなど共通する点もあるが、特に口縁部文様・胴部文様の様相が異なっている。

②Ⅱ群b－2類土器について

Ⅱ群b－2類土器（下層d1式に相当）は筒形に近い器形となり、内面調整はより丁寧に行われ光沢があるものも多く、胎土に含まれる繊維はより少ない。口縁部断面形は器壁が薄い場合には尖り気味、厚い場合には丸みを帯びるようになる。口縁部文様帯の幅は狭くなり、平行する数条の縄線文が施される場合が多い。胴部には撚糸文、自縄自巻的縄文と結束第1種羽状縄文によりすだれ状縄文を構成する。また、多軸絡条体の回転文も見られる。施文は一般的にb－1類土器よりも緻密な印象を受ける。

このようなⅡ群b－2類土器は、H－2とその周辺のh－13・i－12区およびm－14区が主な分布域として考えられる。

H－2では覆土から2個体のⅡ群b－2類土器が出土した（図Ⅷ－4中段上、図版12）。その周囲の包含層であるh－13・i－12区包含層からも口縁部に縄線文・綾絡文・羽状縄文が施され、胴部には羽状縄文と撚糸文・自縄自巻的縄文ですだれ状縄文を構成する土器が4個体出土している（図Ⅷ－4中段下）。これらの内面は丁寧に磨かれ、光沢があるものが多い。

また、m－14区では大きく3ヵ所にまとまって土器が出土した。段丘の縁部分に小破片でまとまっていたことから、同時に廃棄されたと考えることができる。復元できた縄線文とすだれ状縄文のやや大型の深鉢1個、口縁部に縄線文、胴部に多軸絡条体回転文が施された深鉢、多軸絡条体の施された底部などである（図Ⅷ－4下段）。

破片資料が多いが、Ⅱ群b－1類土器と同じく4～5個体で1セットとなるかと考えられる。また、H－2出土Ⅱ群b－2類土器はb－1類とあまり時間差がないと考えられること、m－14区出土土器は厚手で多軸絡条体回転文が見られることから、後者の方が若干新しい段階かとも推測できる。

(4)森川式土器の分布について

最後に、先述した特徴を有する森川式土器の分布について考えてみる（図Ⅷ－6・表Ⅷ－1）。

本遺跡Ⅱ群b－1類土器に類似する口縁部文様帯に綾絡文・縄線文が施されている土器は木古内町新道4遺跡（道埋文1985ほか）・釜谷5遺跡22号住居（木古内町教委1995）、南茅部町ハマナス野遺跡（上記）・ポン木直遺跡（未報告）、八雲町栄浜1遺跡（八雲町教委1987・1998）・コタン温泉遺跡（八雲町教委1992）、寿都町寿都3遺跡（寿都町教委1980）、長万部町花岡2遺跡（北埋調報139）で出土している。

また、森川式に相当するものの、本遺跡や森川A遺跡出土土器とは若干様相が異なる縄線文・絡条体圧痕文・沈線文が施されている土器は七飯町国立療養所裏遺跡（七飯町教委2000予定）、上磯町茂別遺跡（北埋調報121、1998）、木古内町釜谷遺跡11・13・15・32号住居（木古内町教委1996）、知内町湯の里2遺跡（道埋文1985）、松前町松城遺跡2号住居址覆土下層（松前町教委1991）・札前遺跡（同1991）・大津遺跡（同1974）・白坂遺跡第8地点（同1983）、檜山の乙部町栄浜遺跡（乙部町教委1977）、元和遺跡第2地点（同1976）で出土している。資料が少ない段階ではあるが森川式土器の文様構成は地域により特色が分かれそうである。

このように森川式土器の分布は今のところ道南の渡島半島部に集中し、その中でも渡島支庁管内に大きく片寄っている（注3）。

このことは青森県出土のものと類似する下層a・b式が伊達市や白老町、d式が室蘭市や岩内町でも出土しており、その分布域が広範に及ぶこととは対照的である。

何らかの理由で本州との交流が相対的に粗になったことで、北海道的特色ある森川式土器が生じ、また本州の交流が少なくなったため分布域も縮小したと考えられる。この後、d式の時期にまた本州とのつながりが相対的に活発になり、本州と非常に類似する画一的な土器が作られ、分布域も拡大したと推測されるのである。

（注１）なお包含層でも層位的に出土することを想定し調査したが明瞭に分離できなかった。表12の「回数（総数）」とあるものは、その層位を全て掘り下げるのに要した回数の内、何回目にあたるかを示したものである。これは、耕作による削平が及んでいる深度が地点により異なるために用いた表記法である。たとえばⅢ層の1(2)、2(3)、3(4)は下位のⅢｂ層を基準として、その上位の５～10cmの同じ位置を示すものである。これによってもⅡ群ｂ－１類とｂ－２類で明瞭な出土層位の差はとらえられなかった。また、ｍ～ｒラインについては出土土器の垂直分布を示したが（図Ⅳ－１－24）、ここでも両者は層位的に区別できなかった。これは、両者の時期が連続して近接しているためであろう。

（注２）報告者の小笠原はＸ２－１・２層、３～５層でまとまりをとらえ、サイベ沢Ⅱ式新・旧と分類している。しかし、ハマナス野遺跡で小笠原によりサイベ沢Ⅱ式とされたものは多様な土器群を含むようである。簡型で文様帯が狭く地文にすだれ状縄文が施文されるものが多く、本遺跡で出土したような小型のバケツ状で口縁部文様帯が広く地文に撚糸文・撚り戻しの縄文などが見られるものも含まれる。前者の多くは大沼の指摘するようにその特徴から下層ｄ式相当と考えられる（大沼1986）。そして、本遺跡で出土した土器と類似する後者にあたるものが大沼の指摘する下層ｃ式相当と考えられる。ただし、このようなハマナス野遺跡出土サイベ沢Ⅱ式の２分は小笠原によるⅡａ、Ⅱｂ式の細分とは合致しない。なお、ハマナス野遺跡ではＨＰ－４・18・118・122・123出土土器が森川式に相当すると思われるまとまった資料として挙げられる。

（注３）南茅部町・七飯町の資料については実見して判断した。その他は実測図、拓本、写真からの類推である。なお、伊達市北黄金貝塚でも類似する土器が出土している（『豊浦町史』1972、伊達市教委1986）が、簡形で口縁部が外反しないことなど本遺跡Ⅱ群ｂ－１類土器とは様相が若干異なりやや古手かと考えられるため、今回は分布図に掲載していない。　（藤原秀樹）

番号	市町村	遺　跡	出土地点	報告書での分類	文　献
1	長万部町	栄浜２遺跡	包含層	Ⅱ群(前期の土器)	長万部町教委1997
2	長万部町	花岡２遺跡	Ｐ－３・Ｈ－９	Ⅱ群ｂ類（円筒土器下層ｃ式）	北埋調報139、2000
3	八雲町	シラリク２遺跡	Ｈ－２・包含層	Ⅱ群ｂ類（森川式・円筒土器下層ｃ式）	北埋調報142、2000
4	八雲町	コタン温泉遺跡	包含層	Ⅱ群Ｂ類（円筒土器下層ｃ式）	八雲町教委1992
5	八雲町	栄浜１遺跡	Ｈ－203・包含層	Ⅰ群(前期の土器、下層ｄ1式)	八雲町教委1997・1998
6	森　町	森川Ａ遺跡	Ｈ－３	下層ｂ式の新しい段階	森町教委1982
7	南茅部町	ハマナス野遺跡	Ｈ－18・123など	サイベ沢Ⅱ式	南茅部町教委1989ほか
8	南茅部町	ポン木直遺跡	？		未報告
9	七飯町	国立療養所函遺跡	包含層、出土地点にまとまり	下層ｃ式	本年度報告
10	函館市	サイベ沢遺跡	第2層	円筒式文化の母体	児玉ほか1968
11	木古内町	笹谷遺跡	Ⅱ－11・13・32など		木古内町教委1996
12	木古内町	御守５遺跡	Ⅱ－22	Ⅱ群Ｂ類（円筒下層ｃ式）	木古内町教委1995
13	木古内町	新道４遺跡	ＢＨ－16・ＢＰ－157・ＧＰ－31など	Ⅱ群Ｂ１類２群(円筒下層ｃ式・サイベ沢Ⅱ式)	北埋調報47・49・52、1986・87・88
14	知内町	湯の里２遺跡	Ⅱ－２・包含層	Ⅱ群（サイベ沢Ⅰ・Ⅱ式）	北埋調報18、1985
15	松前町	松城遺跡	Ⅱ－２種土下・Ａ－３区第Ⅹ層	Ⅰ群２類(下層ｃ式)	松前町教委1991
16	松前町	札前遺跡	包含層	第３群ｊ類（円筒土器下層式のなかでも古いタイプ）	松前町教委1991
17	松前町	大津遺跡	Ａ地点包含層	第４群(円筒土器下層Ａ・Ｂ式)	松前町教委1974
18	松前町	白坂遺跡	第８地点包含層	第７群ｂ類（円筒土器下層ｃ式）	松前町教委1983
19	乙部町	栄浜遺跡	包含層	第Ⅱ群Ｃ類（円筒土器下層ｂ式・沈線文をもつもの）	乙部町教委1977
20	乙部町	元和遺跡	第２地点包含層	Ｂ群（円筒下層ｂ式）	乙部町教委1976
21	寿都町	寿都３遺跡	包含層	第Ⅰ群（円筒土器下層ｄ式）	寿都町教委1980
22	上磯町	茂別遺跡	包含層（重層中・下部）	Ⅱ群Ｂ－２類（円筒下層ｃ式）	北埋調報121、1998

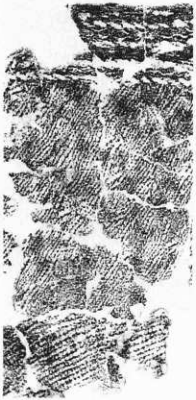
表Ⅷ－１　森川式・円筒土器下層ｃ式出土遺跡一覧

H－1　1

H－2　1

H－2　2

H－2　3



H－2　4

0　5cm

図Ⅷ－1　復元土器拓影図（1）

包含層　1

包含層　2（図裏面）

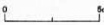
包含層　2（内面）

包含層　2（図正面）

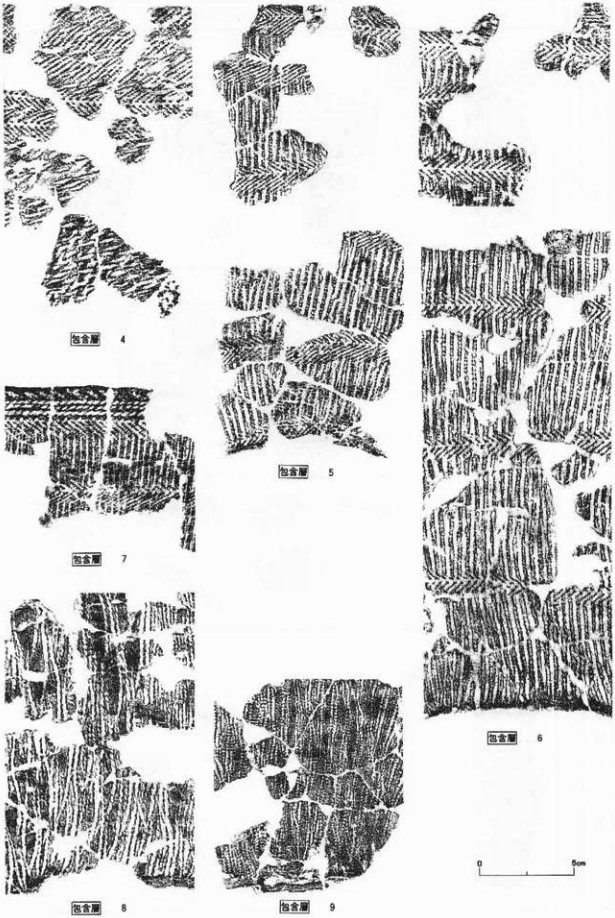
包含層　2（内面）

包含層　2（底面）

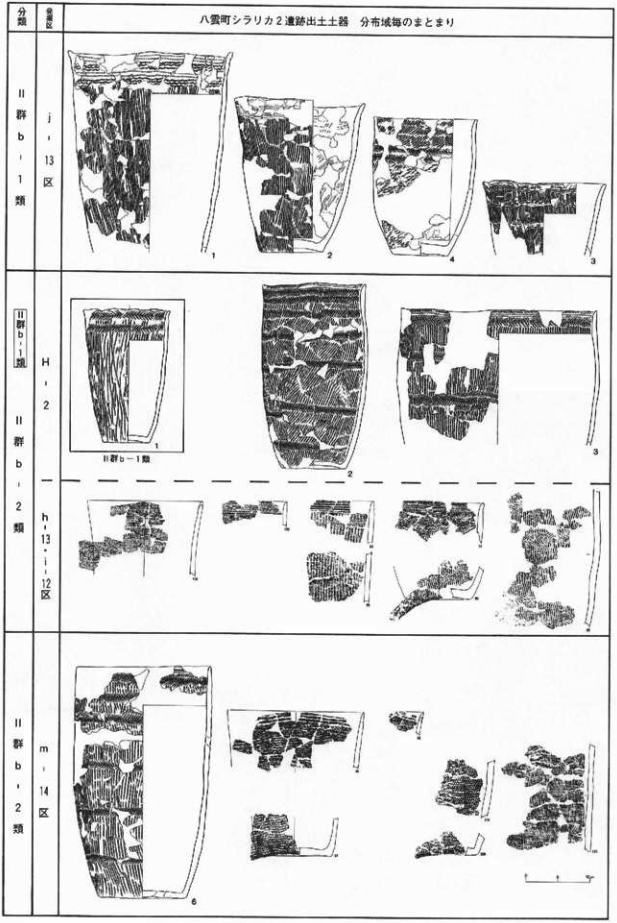
包含層　3



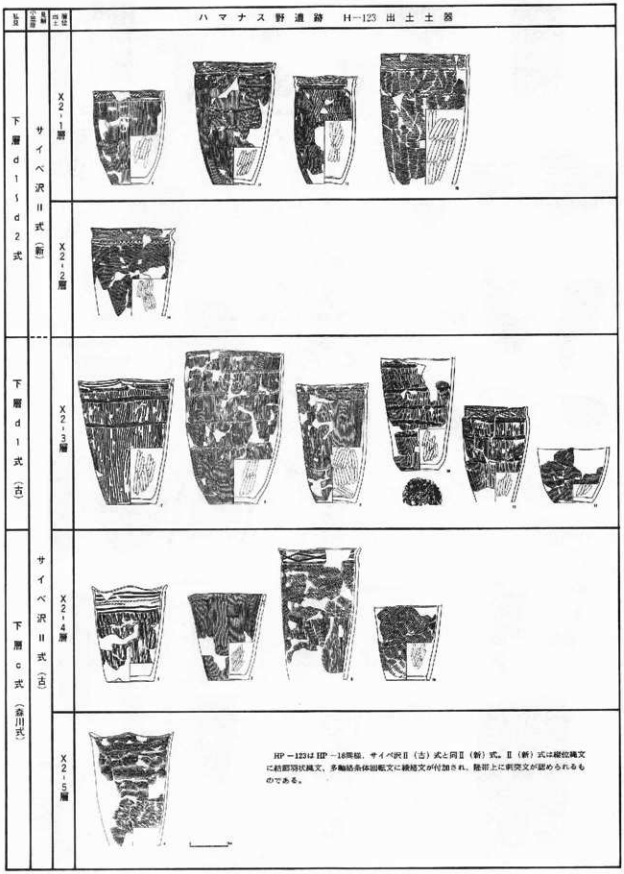
図Ⅷ－2　復元土器拓影図（2）



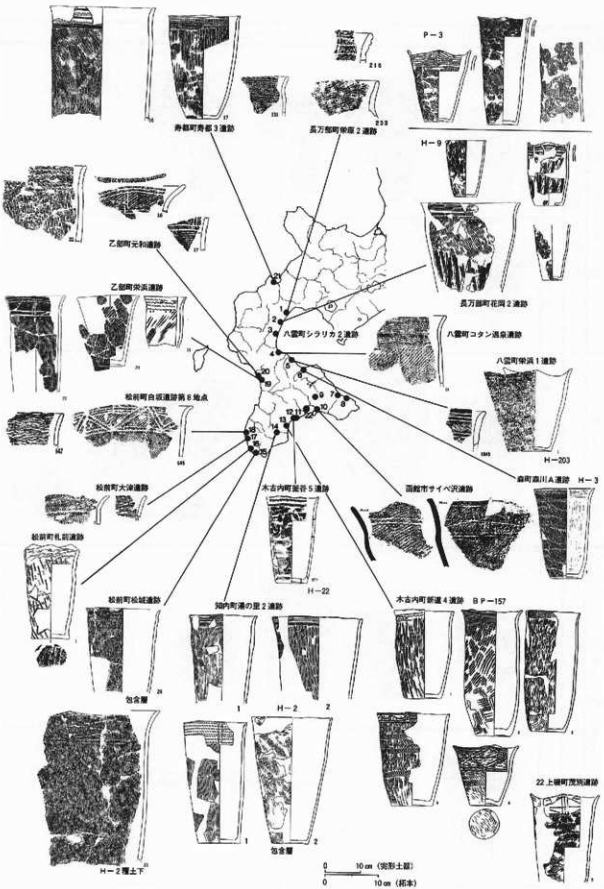
図Ⅷ－3　復元土器拓影図（3）



図Ⅷ－4　分布域毎の土器のまとまり



図Ⅷ－５　南茅部町ハマナス野遺跡ＨＰ－123出土土器



図Ⅷ－6　森川式・円筒土器下層ｃ式の分布

2　森町森川A遺跡から出土した円筒下層式土器について

—北海道開拓記念館収蔵の熊野喜蔵氏収集資料—

はじめに

ここで紹介する資料は、昭和36年、故熊野喜蔵氏によって発見・収集された森町森川A遺跡のもので、現在北海道開拓記念館に収蔵されている熊野喜蔵氏収集資料（熊野コレクション）の一部をなすものである。

今年度のシラリカ2遺跡の調査において、包含層および住居跡に伴って前期後葉の円筒下層式土器が多数出土した。これらのなかには円筒下層c式相当のものとみなされるものがあり、その中に森川A遺跡出土資料に類似するものがある。同遺跡の資料は出土地点が明確な一括資料で、昭和49年に熊野喜蔵氏と八木光則氏によりその一部が報告されている（熊野・八木1974)。しかし、誌上に発表されたものが限られていることから、北海道開拓記念館の複製許可を得てここに未発表資料を紹介するものである。なお、これらの土器の実測、観察は10数年前、大沼忠春氏（現北海道教育庁文化課）と遠藤が行ったものである。当時調査していた木古内町新道4遺跡のフラスコ状ピットから出土した土器との比較検討のためその観察をしていたもので、これまで手許に実測図、拓影図、土器の観察メモを残してあったので、これを機会に紹介することで今後の調査、研究の一助になれば幸いである。

北海道開拓記念館に収蔵されている同遺跡出土の資料は土器、石器等あわせて86点である。これらは昭和48年（1973年）に記念館に寄贈、譲渡されたものである。『熊野喜蔵氏資料目録・Ⅱ』（北海道開拓記念館1980）によると、森川A遺跡の収蔵番号は42,047。資料にはそれぞれ枝番号がつけられている。このうち枝番号1～28のものが土器の完形品（復元、大型破片を含む）である。これらには整理番号№1240～№1274が付されている。また、枝番号29～78までは目録に記載がなく整理番号は付されていない。この番号のものが土器片で、目録から判断すると以上の78点が土器である。

今回紹介する資料は整理番号のある17点と枝番号のみの付された33点、合わせて50点である。先の報告（熊野・八木1974）と重複する資料は9点あり、これらもあわせて掲載し、相当する図番号を記述の末尾に載せた。

以下文様構成、器形のわかる資料（1～17）については個々に記載し、破片資料（18～50）については部位ごとにその特徴をまとめて記載することとする。

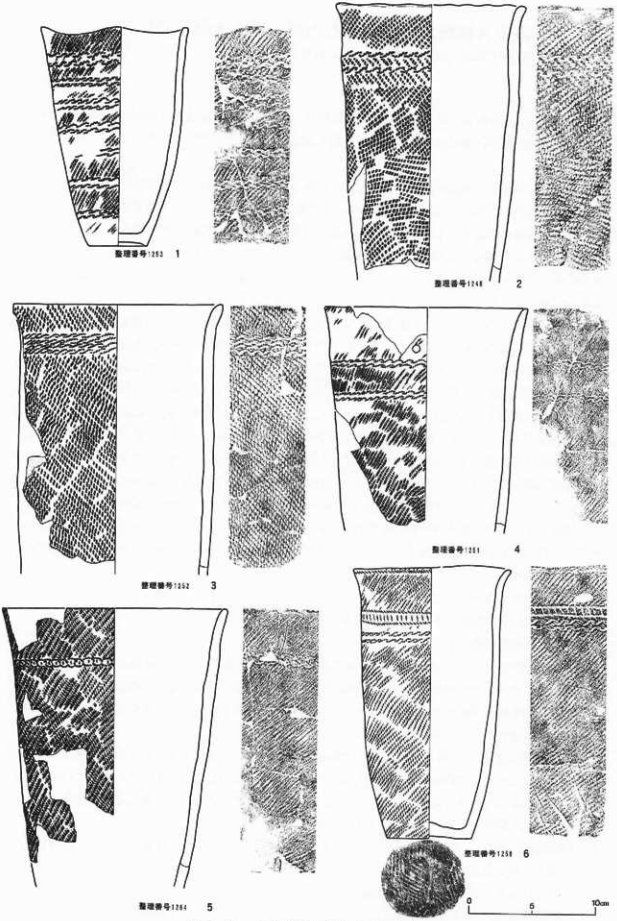
器形の復元された土器（1～17）

1.（整理番号1253）　4か所に頂部のある波状口縁のもの。器面にはLR原体による斜行縄文が施されている。2条1対の綾絡文（結節の回転文）が底部付近まで間隔をあけ7段施されている。最上段のものは口縁部文様帯を意識したと見られ、2段の縄（LR原体）によるものである。底部はあげ底気味。内面は磨かれて赤褐色を呈する。

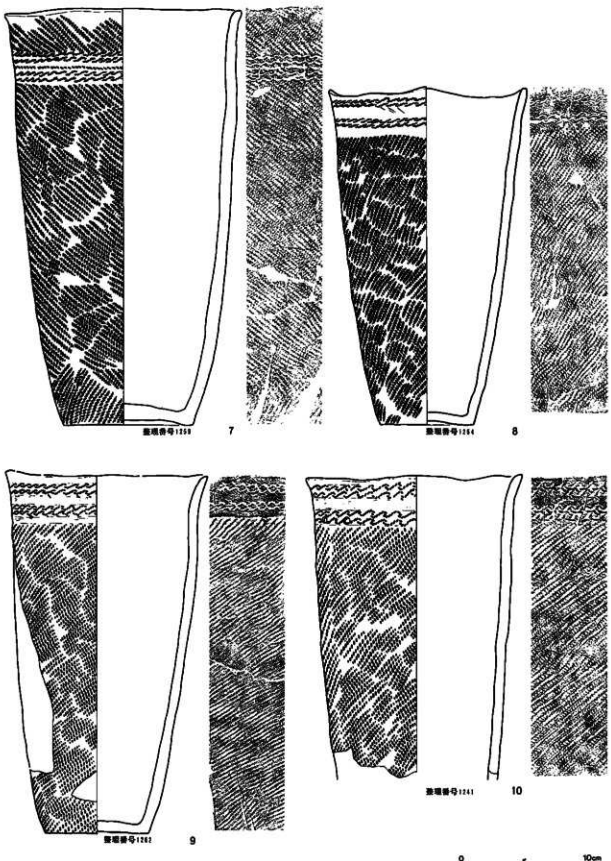
2.（整理番号1248）　平縁ではあるが不明瞭な波状を呈する。口唇部分をあらかじめ無文とし、口縁部から体部にかけては複節の羽状縄文を施している。それに重ねて綾絡文を2条施している。体下半には複節の条の横走する縄文が施されている。口縁部から内面にかけて丁寧な磨きが観察される。内面の磨きは口縁部付近では横位、体部では縦位である。

3.（整理番号1252）　平縁。口縁部から底部付近までRLR原体による複節の斜行縄文が施されている。頸部に綾絡文が4条。口唇部から内面にかけて磨きがかけられている。内面は風化が著しい。体上半部は黒褐色、下半部は赤褐色を呈する。

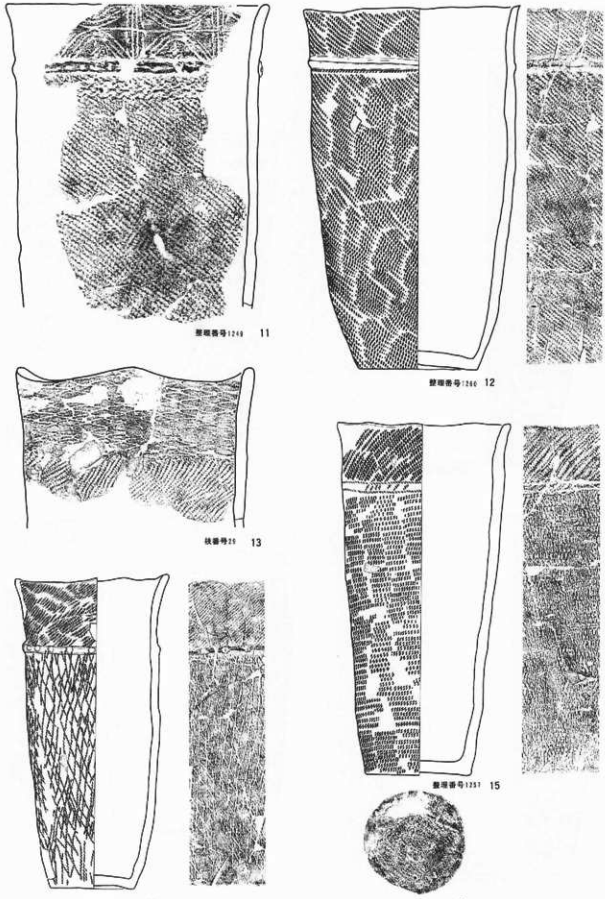
4.（整理番号1251）　平縁。口縁部の外反の度合いは比較的強い。LR原体による縄文施文後に、



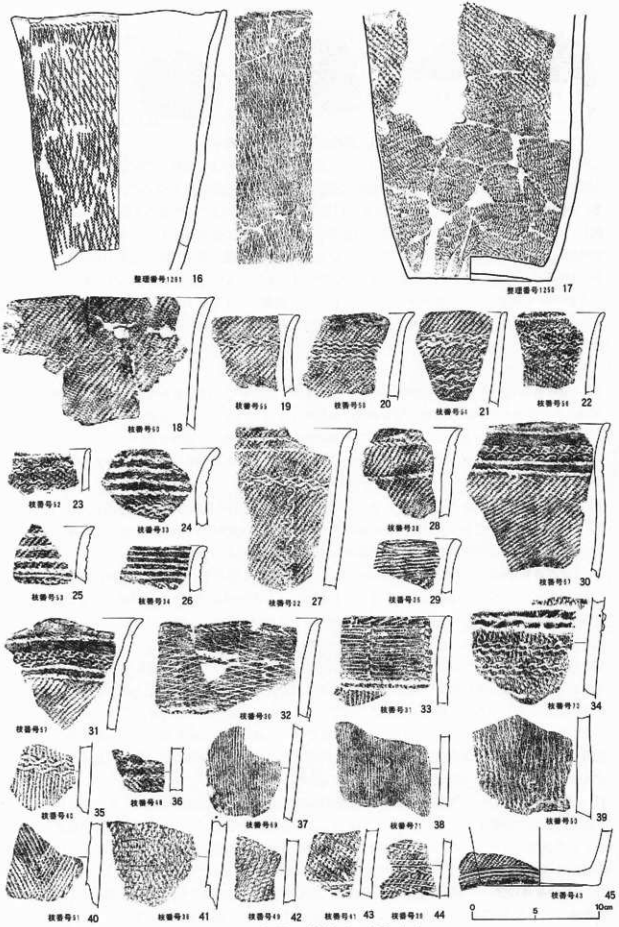
図Ⅷ－７　森川Ａ遺跡出土の土器（１）



図Ⅵ－8　森川A遺跡出土の土器（2）



図Ⅷ－９　森川Ａ遺跡出土の土器（３）



図Ⅲ—10　森川A遺跡出土の土器（4）

図Ⅷ－11 森川A遺跡出土の土器（5）

口縁と口唇部を磨いたものと見られる。これに重ねて頸部に綾絡文（R原体の結節）を施している。内面は丁寧にヘラ磨きされている。器面は黒褐色～褐色、内面は暗褐色を呈する。

5.（整理番号1264） ほぼ平縁を呈する。口縁部から体部にかけて付加条の原体による異条縄文を施し、頸部には2条1対の変形の綾絡文（変形の結節の回転文）が加えられている。施文後、口唇部から内面にかけてヘラ磨きが丁寧になされている。口縁部暗褐色、体下半は褐色を呈する。

6.（整理番号1258） 口縁部の外反の度合いがやや強い平縁のもの。器面にはあらかじめLR原体による斜行縄文が施され、口唇直下には同じ原体による縄線文が1条めぐっている。頸部を磨き無文帯を形成し、この部分に縄線文を2条施し、その間には縦位に短い縄の圧痕が付けられている。その下位には2条1対の綾絡文がめぐっている。底部にも縄文が施されている。熊野・八木（1974）の図3－5

7.（整理番号1259） ほぼ平縁を呈する。口縁部から底部まで0段多条のRL原体による斜行縄文が施され、底部の周囲のみが同一原体の縦位回転文となっている。頸部には縄線文が1条とその上下に2条1対の綾絡文が施され、口唇部から内面にかけては丁寧にヘラ磨きを加えている。口縁部内面付近は横位の磨きが、体部では縦位の磨きが観察できる。底面と底部外面にも磨きがあるが、底部付近は磨滅している。熊野・八木（1974）の図3－9

8.（整理番号1254） 4か所に頂部のある波状口縁。あらかじめ口縁部に無文部を残し文様帯とし、体部には0段多条のLR原体による斜行縄文を施している。文様帯に2条1対の綾絡文を施した後、縄文地と無文帯との境を磨いている。底部はややあげ底気味である。

9.（整理番号1262） ほぼ平縁であるが、わずかに不規則な波状を呈し外反の度合いがやや強い。口縁部に無文帯を残し、体部に0段多条のLR原体による斜行縄文が施され、口縁部には2条1対の綾絡文が2段加えられている。口唇部から内面および底面は丁寧にヘラ磨きされている。底部外面も縄文施文後磨かれている。熊野・八木（1974）の図3－7

10.（整理番号1241） ほぼ平縁を呈する。口縁部に無文帯を残し、体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。文様帯に2条1対の綾絡文が2段加えられ、その後縄文地と無文帯の境を磨いている。口唇上から内面は丁寧にヘラ磨きされている。なお、この資料には図示した胴部に直接接合はしていないが、「底部」の破片が一緒に復元されている。資料目録の摘要欄には「底部別個体」との記載があるものである。観察の結果も同様で、非常に良く似ているが別個体である可能性が高いことから、「底部」を省いて図示した。熊野・八木（1974）の図3－8

11.（整理番号1249） 平縁とみられる口縁部から胴部までの大きな破片である。あらかじめ口縁部文様帯の区画に隆帯を設け、体部にRLR原体による斜行縄文を施した後、隆帯直下に綾絡文（R原体）が2条加えられている。隆帯上は細い棒状工具による斜めの刻み目が付けられている。口縁部文様帯には縄線文（R原体）により縦横の区画と弧状の文様が描かれている。

12.（整理番号1260） 平縁。あらかじめ頸部に隆帯を設け、口縁部と体部にRL原体による斜行縄文を施している。隆帯上はヘラ磨きがなされている。口唇部から体部にかけて丁寧に磨かれているが、

内面も底面まで磨かれている。器面には凹凸がある。熊野・八木（1974）の図3－6

13.（枝番号29）　4か所に頂部のある波状口縁のもの。体部にはＬＲ原体による斜行縄文が施されている。口縁部の文様は単軸絡条体第6類の網目状撚糸文である。口唇部から内面にかけ丁寧に磨かれている。熊野・八木（1974）の図3－1

14.（整理番号1263）　4か所に不明瞭な頂部を持つと見られる波状口縁のもの。口縁部の外反の度合いはやや強い。頸部には低い隆帯が設けられて、体部には単軸絡条体第5類の網目状撚糸文が施されている。口縁文様帯は幅が広く、細いＬＲ原体による斜行縄文が施されている。隆帯上には円形の刺突が不規則な間隔で加えられている。底部付近は施文後磨かれている。底部はやや上げ底気味である。熊野・八木（1974）の図3－2

15.（整理番号1257）　ほぼ平縁であるがわずかに不明瞭な小波状口縁を呈する部分がある。体部には多軸絡条体（平織状撚糸文）の原体による撚糸文が施され、口縁部には付加条の原体による斜行縄文が施されている。頸部の文様帯の境にはＬＲ原体による縄線文が2条施されている。口唇上から内面にかけては丁寧に磨かれている。体部、底部付近も同様に施文後磨いている。底面には多軸のものが施文されている。熊野・八木（1974）の図3－4

16.（整理番号1261）　ほぼ平縁である。体部には単軸絡条体第5類の網目状撚糸文が施されている。口唇直下は狭い範囲を無文とし、ＬＲ原体による縄線が1条施文されているが、上下に回転させて斜行縄文になるところもある。口唇部から内面にかけては、口縁部付近では横位に、下半部では縦位に磨かれている。熊野・八木（1974）の図3－3

17.（整理番号1250）　上げ底気味の底部。底部付近にあらかじめ多軸絡条体の原体を回転施文後、体部にＲＬＲ原体による複節の縄文を施している。内面は口縁部から底面まで、底部外面も同様に磨かれている。器面は底部が赤褐色、体部は黒褐色である。

口縁部の破片（18～33）

18～31は体部に斜行縄文が施されているもの。22、24がＲＬ原体でほかはＬＲ原体による縄文である。18～23、25、27、28は口縁部の縄文に重ねて綾絡文、縄線文、沈線文を施すものである。これらは口縁部文様帯を構成する要素であり、また、文様帯の区画文となるものでもある。18～21は2条1対となる綾絡文が施されている。20は口唇部をあらかじめ無文としている。21の上位の2段原体によるとみられる綾絡文は口縁部文様帯を意識したものであろう。22、23、27は綾絡文と縄線文が施されているもの。22、23は口唇直下に縄線文が1条めぐっている。27は口縁部に間隔をあけてＬＲ原体の縄線が2条施文されている。頸部には綾絡文がめぐり、縦方向にも施文されている。25は口唇断面形は尖り気味で、太いＬＲ原体の縄線文と沈線文が施されている。28の口唇断面形は尖り気味で、ＬＲ原体の縄線文が2条、間隔をあけて施されている。

24、26、29～31は口縁部の無文地に文様を施すもの。文様帯の区画には綾絡文、縄線文が施される。24は口縁部の外反の度合いの強いもので、ＬＲ原体の太い縄線文が4条、26にはＬ原体の縄線文が4条めぐっている。29は口縁部の狭い範囲に条痕文が施されている。30、31は同一個体の破片。波状口縁を呈すると見なされる。口縁部にあらかじめ無文部を残し、太いＬＲ原体の縄線を口唇直下に1条、縄文帯との境に2条施文し、その間に綾絡文を施文している。

32は比較的幅の広い口縁部文様帯を持つもので、緩やかな波状口縁になるとみられる。文様帯の下位には隆帯があり、その上には刺突文あるいは刻み目が付けられている。口縁部には単軸絡条体第5類の網目状撚糸文が施され、口唇直下にＬＲ原体の縄線文が1条めぐる。

33は体部には撚糸文が施されている。太い2条の縄線文で区画された口縁部には、変則的な網目状

撚糸文が施されている。原体は明らかにできないが単軸絡条体第６Ａ類に類するものと見られる。

胴部の破片（34～44）

34、35、37～41は撚糸文の施されたもの。34は体部に多軸絡条体の回転文が施され、口縁部文様帯の下位にあたる位置に隆帯を設け、その上下に太い縄線文を施している。体部の文様に重ねて綾絡文が２段施されている。39は原体を二重施文することで網目状撚糸文となっている。41は多軸絡条体の回転文、42は複節のもの。43は付加条の原体による斜行縄文地にＬＲ原体の縄線文と綾絡文が施されている。44は縄文地に１条ないしは２条１対となる沈線文が施され、その間に綾絡文が施文されている。

底部の破片（45～50）

45は底部に沈線文が、46には縄線文が施されている。47は単軸絡条体第５類の網目状撚糸文のもの。48～50は底面に施文されている。

おわりに

これらは一括資料であり、円筒下層ｃ式に相当するものと考えられ、先に森川式として設定されたものである（大沼1986）。その特徴を簡単にまとめておくこととする。

器形等；底部から比較的まっすぐと立ち上がる丈の高い筒形で、胴部がわずかに膨らむものがある。平縁が多く、不明瞭な波状口縁、４か所に頂部を持つ波状口縁のものがある。口縁部が外反するものが多い。口唇の断面形は丸みを帯び、尖り気味となるものもある。内面は口唇部から底部まで磨かれ、ヘラ磨きのものがある。また、底部外面が施文後に磨かれる例が見られる。わずかに上げ底気味となるものがある。

文様；体部には縄文、撚糸文が施される。器形の分かるものでは、その7割近くが縄文である。単節の縄文が多く、複節、付加条のものがわずかにある。そのほとんどが斜行縄文である。ほかに羽状を構成する縄文、回転方向を変えて施文するもの、２種類の原体を複合施文するものがある。いわゆる撚糸文は非常に少ないが、網目状撚糸文、多軸絡条体の回転文のものが５、６個体ある。

口縁部文様帯は一般的に幅が広いが、少数ながら狭いものもある。①口縁部をあらかじめ無文帯として文様を施すもの、②体部と同じ縄文が施されるもの、③体部とは異なる原体の回転文を施すものがある。文様帯との境に隆帯を設けるものがあり、その部分に２、３の例では刺突、刻みが施される。文様は２条１対の綾絡文、１段あるいは２段の原体の縄線文で構成される。少数であるが沈線文が施される例がある。①では綾絡文のみを複数施す特徴がみられる。縄線文で鋸歯状、弧状の文様が描かれる。②では文様帯の区画と見られる位置に綾絡文が施される例が多い。また、条痕文の施されたものが１点ある。③では網目状撚糸文が多いことが注意される。

以上森川Ａ遺跡の資料についてみてきたが、シラリカ２遺跡の資料（ｂ－１類）とはいくつかの点で若干の違いが見られる。ｂ－１類については前節にその特徴がまとめられているので繰り返さないが、口縁部の外反の度合い、器形、体部の文様に縄文のものが非常少ないこと、結束羽状縄文の施される資料の存在等にそれを見いだすことができる。口縁部文様帯の文様構成、要素の相違、地文の縄文、撚糸文の出現頻度の違いは地域的差として捉えることも可能であるが、時間差として把握する必要があるかと思われる。このように見ていくと森川Ａ遺跡のものは下層ｃ式のなかでも古い段階に、シラリカ２遺跡のものはｃ式の新しい段階のものと考えることができる。

なお、森川Ａ遺跡の発見の契機、遺跡の位置、概要等についてはここで触れることができなかった。これらに関しては昭和49年の報告（熊野・八木1974）、資料目録（北海道開拓記念館1980）を参照していただきたい。

（遠藤香澄）

表1　遺構規模一覧（1）　住居跡・土壙

遺構名	位置（調査区）	確認面 長軸×短軸	床面 長軸×短軸	深さ（単位cm）	平面形	時期	備考
H－1	q-17-b・c, r-17-d	(302)×(174)	(272)×(159)	(14)	隅丸方形	早期後半？	覆土中に火山灰あり
H－2	h-11-c・d, h-12-a・b	378×364	326×320	50	円形	前期後半	
P－1	k-14-b, l-14-a	(140)×(112)	102×82	41	楕円形	早期後半？	
P－2	h-12-d	50×46	38×34	16	円形	前期後半	H－2と関連か

表2　遺構規模一覧（2）　焼土・集石

遺構名	位置（調査区）	長軸×短軸／深さ	平面形	時期	確認面	出土遺物	備考
F－1	l-28-c	40×36／8	不整円形	不明	Ⅳ層上面		周辺に遺物なし
F－2	l-27-a,b	42×(32)／8	不整楕円形	不明	Ⅳ層上面		周辺に遺物なし
F－3	a-15-a,d	44×24／10	楕円形	前期後半	Ⅳ層（風倒木）	土器2、つまみ付きナイフ1、フレイク2、礫・礫片2	風倒木による撹乱を受ける
F－4	Z-17-a	21×18／4	円形	前期後半	Ⅳ～Ⅴ層	土器7、フレイク2、礫・礫片3	
F－5	W-21-c	78×(38)／20	不整楕円形	前期後半？	Ⅳ層上面		風倒木による撹乱を受ける
F－6	W-17-d	38×18／8	不整楕円形	前期後半？	Ⅳ層上面		斜面に位置する
F－7	h-16-c,d	62×49／7	楕円形	前期後半	Ⅳ層下位		近くにフレイク集中あり
F－8	g-12-d	34×28／2	楕円形	前期後半	Ⅳ層下位		非常に薄く、不明瞭な焼土
F－9	c-12-c,d-12-d	64×50／8	不整円形	前期後半？	Ⅳ層上面	フレイク1、礫・礫片1	フレイク・礫はともに被熱
F－10	k-15-b	(64)×(38)／8	円形？	前期後半	Ⅴ層		風倒木による撹乱を受ける
F－11	i-14-b	50×32／4	楕円形	前期後半	Ⅳ層上面		木根による撹乱を受ける
F－12	i-13-a	42×22／2	楕円形	前期後半	Ⅳ層	フレイク1	
F－13	g-12-c,g-13-b,h-12-d,h-13-a	110×62／14	不整楕円形	前期後半	Ⅳ～Ⅴ層	フレイク5、礫・礫片2	H－2に伴うか
S－1	n-17-b,c	42×17／		前期後半	Ⅲ層	たたき石1、礫4	周囲に炭化物散在

表3　遺構出土遺物一覧

遺構名	土器	つまみ付きナイフ	スクレイパー	たたき石	すり石	扁平打製石器	砥石	石核	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	原石	礫・礫片	焼成粘土塊	合計
H－1	13		1					1		2	19	1	32		69
H－2	552		3	5	1	1	1	5	1	1	1178	2	581	7	2338
P－1											5				5
P－2						1					3		2		6
F－1															
F－2															
F－3	2	1									2		2		7
F－4	7										2		3		12
F－5															
F－6															
F－7															
F－8															
F－9											1		1		2
F－10															
F－11															
F－12											1				1
F－13											5		2		7
S－1				1									4		5
合計	574	1	4	6	1	2	1	6	1	3	1216	3	627	7	2452

表4　遺構出土　復元土器一覧（図Ⅳ－3・5）

H－1　掲載　復元土器一覧（図Ⅳ－3）

番号	遺構番号	接合・同一個体	発掘区	遺物番号	点数	総数	層位	口径	底径	器高	分類	図版番号	備考
1	H－1	接合	H－1	1	2		トレンチ	(11.9)	9.8	(24.2)	Ⅱb－1	12	
			q－17	76×12、79×2、186×2、193、227、230×37	55	57	Ⅲ						
		同一個体	q－17	76×4、78×2、79×3、93、127、188、227×2、230×11	25		Ⅲ						
			q－18	9	1	26	Ⅲ						

H－2　掲載　復元土器一覧（図Ⅳ－5）

番号	遺構番号	接合・同一個体	発掘区	遺物番号	点数	総数	層位	口径	底径	器高	分類	図版番号	備考
1	H－2	接合	H－2	1681×59	59	59	床面	13.6	7.5	21.0	Ⅱb－1	13	床面でまとまって出土
		同一個体	H－2	1681×33	33	33	床面						
2	H－2	接合	H－2	1131、1662×61、1663×45	107	107	覆土2層下	16.3	10.0	29.1	Ⅱb－2	13	床面から浮いた状態で出土
		同一個体	H－2	1662×102、1663×7	109	109	覆土2層下						
3	H－2	接合	H－2	49、108、110、251、253、254、255、324、329、330、333、335×4、336、351×2、356、362×2、392、493、504、508、533×2、564、578、580×2、585、599、611、848、858×2、1192、1501×4	42		覆土3層	(31.0)		(20.5)	Ⅱb－2	13	
			H－2	768×2、776×2	4		覆土3層上						
			H－2	944、945×2、1070、1077×3、1082、1084、1089×3、1094、1020、1137、1054×3、1662×3	21		覆土2層下						
				1689	1		トレンチ						
			i－11	9	1		Ⅳ						
			i－12	43	5		Ⅳ						
			i－12	55	1	75	Ⅲb						
		同一個体	H－2	1218、1219	2		覆土1層						
				103、111、160×2、215、259	6		覆土2層						
				946、1071、1072、1086、1087、1100	6		覆土2層下						
				102×2、331、334、359、377×2、381×5、503、510、535、544、549、574、585	19		覆土3層						
				835、887×3、868	5	38	覆土3層上						
4	H－2	接合	H－2	384×3、573×2、未注記	6		覆土3層	(21.6)	13.0	(29.5)	Ⅱb－1	13	25m離れた土器集中と接合
			j－12	30	14		Ⅲ						
			j－12	31	5		Ⅳ						
			m－16	54、76×69	70	95	Ⅲ						
		同一個体	m－16	76	66	66	Ⅲ						

表５　遺構出土　拓本掲載土器一覧（図Ⅳ－３・６・７・16）

Ｈ－１　拓本　掲載土器一覧（図Ⅳ－３）

番号	遺構番号	遺物番号	合計点数	層　位	回数（総数）	分類	図版番号	備　考
2	Ｈ－１（ｑ－17）	１×２	2	トレンチ		Ⅱｂ	12	
3	Ｈ－１（ｑ－17）	198	1	Ⅲ層		Ⅱｂ	12	
4	Ｈ－１（ｑ－17）	261	4	Ⅲｂ層		Ⅱｂ	12	
5	ｑ－17－ａ	184	1	Ⅲ層		Ⅱｂ	12	遺構外、2と同一個体

Ｈ－２　拓本　掲載土器一覧（図Ⅳ－６・７）

番号	遺構番号	遺物番号	合計点数	層　位	回数（総数）	分類	図版番号	備　考
5	Ｈ－２	374 × 2		覆土３層		Ⅱｂ	14	
	Ｈ－２	519 × 2		覆土３層				
	Ｈ－２	571		覆土３層				
	Ｈ－２	1120	6	覆土２層下				
6	Ｈ－２	778	3	覆土３層上		Ⅱｂ	14	
7	Ｈ－２	640	1	覆土３層		Ⅱｂ	14	
8	Ｈ－２	866	1	覆土３層上		Ⅱｂ	14	
9	Ｈ－２	1390	1	覆土３層上		Ⅱｂ	14	
10	Ｈ－２	258	1	覆土２層		Ⅱｂ	14	
11	Ｈ－２	928		覆土２層下		Ⅱｂ	14	
	Ｈ－２	1684	2	トレンチ				
12	Ｈ－２	154		覆土３層中		Ⅱｂ	14	
	Ｈ－２	1258 × 2	3	覆土１層下				
13	Ｈ－２	1203	1	覆土３層中		Ⅱｂ	14	
14	Ｈ－２	214	1	覆土２層		Ⅱｂ	14	
15	Ｈ－２	1188	2	覆土３層中		Ⅱｂ	14	
16	Ｈ－２	1350	2	覆土３層上		Ⅱｂ	14	11～15同一個体
17	Ｈ－２	1497	1	覆土３層上		Ⅱｂ	14	
18	Ｈ－２	382	2	覆土３層		Ⅱｂ	14	
19	Ｈ－２	872	1	覆土３層上		Ⅱｂ	14	
20	Ｈ－２	323		覆土３層		Ⅱｂ	14	
	Ｈ－２	1505 × 3		覆土３層上				
	Ｈ－２	1508		覆土３層上				
	Ｈ－２	1509 × 2		覆土３層上				
	ｉ－12－ｄ	83 × 4	11	Ⅲ層	1(1)			
21	Ｈ－２	370		覆土３層		Ⅱｂ	14	
	Ｈ－２	509		覆土３層				
	Ｈ－２	527		覆土３層				
	Ｈ－２	536	4	覆土３層				20・21同一個体
22	Ｈ－２	957	1	覆土３層		Ⅱｂ	14	
23	Ｈ－２	326	1	覆土３層		Ⅱｂ	14	
24	ｉ－11－ｃ	6	5	Ⅲｂ	1(1)	Ⅱｂ	14	遺構外、22と同一個体
25	Ｈ－２	1401	1	覆土３層上		Ⅱｂ	14	
26	Ｈ－２	1389	1	覆土３層上		Ⅱｂ	14	
27	Ｈ－２	1385		覆土３層上		Ⅱｂ	14	
		1386		覆土３層上				
		1464 × 5	7	覆土３層中				26・27同一個体

Ｆ－３　拓本　掲載土器一覧（図Ⅳ－16）

番号	遺構番号	遺物番号	合計点数	層位	回数（総数）	分類	図版番号	備　考
1	Ｆ－３	4	1	焼土中		Ⅱｂ	17	
2	Ｆ－３	5	1	焼土中		Ⅱｂ	17	

Ｆ－４　拓本　掲載土器一覧（図Ⅳ－16）

番号	遺構番号	遺物番号	合計点数	層　位	回数（総数）	分類	図版番号	備　考
1	Ｆ－４	8	1	焼土中		Ⅱｂ	17	
2	Ｆ－４	１×２		焼土中		Ⅱｂ	17	
		6		焼土中				
		9	焼土中	焼土中				
	Ｚ－17－ａ	28		Ⅳ層	2(4)			
	Ｚ－17－ａ	68 × 5	包含層	Ⅳ層	4(4)			
3	Ｆ－４	3	1	焼土中		Ⅱｂ	17	

表6　遺構出土　掲載石器一覧（図Ⅳ－3・7・15・16・18）

H－1　遺構出土掲載石器一覧　（図Ⅳ－3）

番号	遺構	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
8	H－1	260	Bb（第2層）	スクレイパー	頁岩	8.3	3.4	2.3	53.5	12	

H－2　遺構出土掲載石器一覧　（図Ⅳ－7・11～14）

番号	遺構	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
28	H－2	1558	褐土3層中	スクレイパー	頁岩	6.3	3.3	0.8	11.4	15	
29	H－2	1038	褐土3層上	スクレイパー	頁岩	4.5	6.8	1.3	32.2	15	
30	H－2	370	褐土3層	北海道式石冠	安山岩	(10.0)	9.5	8.3	711.4	15	
31	H－2	368	褐土3層	偏平打製石器	安山岩	7.9	10.8	1.9	227.1	15	
32	H－2	601	褐土3層	たたき石	安山岩	11.3	7.3	4.4	486.0	15	
33	H－2	1260	褐土1層下	たたき石	安山岩	7.1	6.4	2.9	159.9	15	
34	H－2	1610	褐土3層中	砥石	軽石	6.6	4.4	3.6	23.5	15	
35	H－2	1257	褐土1層	石核	頁岩	11.6	9.2	11.0	1144.9	15	
36	H－2	802	褐土3層	石核	頁岩	12.0	10.4	5.2	613.5	15	
37	H－2	－	褐土1層	接合資料1	頁岩	15.1	12.6	13.3	2172.0	16	60点接合
38	H－2	－	褐土3層	接合資料2	頁岩	15.0	13.5	6.4	908.0	16	31点接合

P－2　遺構出土掲載石器一覧　（図Ⅳ－15）

番号	遺構	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
1	P－2	1	褐土	偏平打製石器	流紋岩	9.9	16.0	1.1	343.4	17	

F－3　遺構出土掲載石器一覧　（図Ⅳ－16）

番号	遺構	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
3	F－3	6	焼土中	つまみ付きナイフ	頁岩	7.1	3.3	1.5	20.9	17	

S－1　遺構出土掲載石器一覧　（図Ⅳ－18）

番号	遺構	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
1	S-1	1	Ⅲ	たたき石	安山岩	14.1	8.2	3.6	649.2	17	

表7　出土土器一覧

分、類	Ⅰ群a類	Ⅰ群b類	Ⅱ群b類	Ⅲ群a類	Ⅵ群	不明	計
包含層	13	393	10585	13	1	1	11006
遺構			574				574
計	13	393	11159	13	1	1	11580

表8　出土石器一覧

器種	石鏃	ナイフ	石錐	つまみ付きナイフ	両面調整石器	スクレイパー	剥片石器片	Rフレイク	Uフレイク	石核	フレイク	石斧	擦切残片	たたき石
包含層	14	2	1	33	14	104	3	86	73	146	25942	11	2	81
遺構				1		4		1	3	6	1216			6
計	14	2	1	34	14	108	3	87	76	152	27158	11	2	87

器種	すり石	北海道式石冠	偏平打製石器	石錘	石皿・台石	礫石	石錘	加工痕のある剥	原石	礫・礫片	軽石	土製品	石製品	計
包含層	8	7	22	4	4	5	1	9	153	21125	47	1	5	47903
遺構	1		2			1			3	627				1871
計	9	7	24	4	4	6	1	9	156	21752	47	1	5	49774

表9　包含層出土　復元土器一覧（1）　Ⅰ群（図Ⅴ－1－1）

番号	接合・同一個体	発掘区	遺物番号	点数	総数	層位	口径	底径	器高	分類	図版番号	備考
2	接合	O－18	11	93	93	Ⅳ	18.0	10.8	31.0	Ⅰb－1	18	口縁部と底部は推定復元
	同一個体	O－18	11	165	165	Ⅳ						
3	接合	o－17	194	6		Ⅲ	22.6	9.7	27.9	Ⅰb－1	18	胴部と底部は推定復元
		o－17	199×2、200、202×2、204、205×2、206×2、209×4、210、211×2、254×2	19		Ⅳ						
		o－18	30	1		Ⅲ						
		o－18	47×2、51×2、53×3、59×2、62、65×2、67×2	14		Ⅳ						
		p－17	189×2、190	3		Ⅲ黒褐						
		p－17	169×2	2		Ⅳ						
		p－18	107	1		Ⅲ						
		p－18	117、129	2		Ⅳ						
		p－18	119、120	2	50	Ⅴ						
	同一個体	n－15	201	1		Ⅳ						
		o－17	45	1		Ⅲ						
		o－17	198、208、211×3、214、243、245、251×2	10		Ⅳ						
		o－17	247	1		Ⅴ						
		o－18	33、35、40、41×4、46	8		Ⅲ						
		o－18	49、61×2	3		Ⅳ						
		p－17	182	1		Ⅳ						
		p－18	108	1		Ⅳ						
		q－16	37	1	27	Ⅳ						

表10　包含層出土　拓本掲載土器一覧（1）　Ⅰ群（図Ⅴ－1－1）

番号	調査区	小グリット	遺物番号	合計点数	層位	個数(接合)	分類	図版番号	備考
1	W－30		11	3	Ⅴ		Ⅰa	18	底部に近い破片
4	a－17	b	24	1	Ⅴ	1(3)	Ⅰb－1	18	
5	o－17	c	51	1	Ⅲ	1(1)	Ⅰb－1	18	
6	o－17	a	239	1	Ⅴ	1(1)	Ⅰb－1	18	
7	m－14	d	169	1	Ⅳ	1(1)	Ⅰb－1	18	
8	Y－16	a	136	2	Ⅲ	1(1)	Ⅰb－4	18	8～11同一個体
9	Y－16	a	136	2	Ⅲ	1(1)	Ⅰb－4	18	
10	Y－16	a	136	2	Ⅲ	1(1)	Ⅰb－4	18	
11	X－16	b	23	1	Ⅲ～Ⅳ	1(2)	Ⅰb－4	18	

表11　包含層出土　復元土器一覧（2）　Ⅱ群（図Ⅴ－1－2～5）

番号	接合・同一個体	発掘区	遺物番号	点数	総数	層位	口径	底径	器高	分類	図版番号	備考
1	接合	j－13	119×84、122×37、124×4、125×6、126×3、127×4、128×4、134、未注記×2	145	145	Ⅲ	26.0		(30.8)	Ⅱb－1	20	底部を欠く
	同一個体	j－13	119×59、120×3、122×59、124×6、125×8、126×4、127×17、128×13、129	184	184	Ⅲ						
2	接合	h－13	66	1		Ⅲ	20.4	9.9	24.3	Ⅱb－1	20	
		j－12	33×2、48×8、60×2、85×	15		Ⅲ						
		j－12	92×6	6		Ⅲb						
		j－12	114×10、116×3	13		Ⅳ						
		j－13	21、67×4、120×21、121×24、123×8、130	59		Ⅲ						
		j－13	92	1		Ⅳ						
		k－12	3	1		Ⅲ						
		k－13	2	1		Ⅲ						
			未注記	1	98							
	同一個体	j－12	48	1		Ⅲ						
		j－12	107、114	2		Ⅳ						
		j－13	120×5、121×8、123	14		Ⅲ						
		k－12	21	1	18	Ⅳ						
3	接合	j－13	36×9、39×9	18	18	Ⅲ	19.3		(11.4)	Ⅱb－1	20	39と同一個体
4A	接合	j－13	20×15、21、35×21、47、62、65×2	41		Ⅲ	16.3	8.5	(21.4)	Ⅱb－1	20	口縁部と底部は図上で復元
		j－13	77×5	5	46	Ⅲb						
4B	接合	j－13	35×16	16	16	Ⅲ						
4	同一個体	j－13	20×5、35×30、47×8、62×4、65	48		Ⅲ						
			未注記	5	53							
5A	接合	Z－14	47、52×6、59×2、81×15	24		Ⅲ	20.1	10.7	(25.0)	Ⅱb－1	20 21	口縁部と底部は図上で復元
5B	接合	Z－14	47、52×22、59×4、81×12	39		Ⅲ						
		Z－15	50	1		Ⅳ						
			未注記	2	66							
5	同一個体	Z－14	47、52×11、59×7、81×10	29	29	Ⅲ						
6A	接合	m－14	136	28		Ⅲ	21.2	13.8	(36.3)	Ⅱb－2	21	口縁部と底部は図上で復元
6B	接合	m－14	136	110	138	Ⅲ						
6	同一個体	m－14	136	101	101	Ⅲ						
7	接合	j－12	86	8		Ⅲ	17.6		(10.0)	Ⅱb－2	21	
		j－12	92、93×4	5	13	Ⅲb						
8	接合	k－14	15、77×2	3		Ⅲ		15.1	(16.8)	Ⅱb	21	底部のみ
		k－15	49×45	45	48	Ⅲ						
	同一個体	k－14	77	1		Ⅲ						
		k－15	10×20、11×4、49×15	39	40							
9	接合	j－12	32×16、49×9、86	26		Ⅲ		18.6	(11.2)	Ⅱb	21	底部のみ
		j－12	92×2、93	3	29	Ⅲb						
	同一個体	j－12	32×18、49×3、61×6、86	28		Ⅲ						
		j－12	93×3、94	4		Ⅲb						
			未注記	2	34							

※A、Bとあるものは口縁部と胴部が接合せず図上復元したもので、Aが口縁部、Bが胴部を指す。

表12　包含層出土　拓本掲載土器一覧（2）　II群（図V－1－6～17）

番号	調査区 ｸﾘｯﾄﾞ	遺物番号	接合	層位	分 類	図版番号	備 考
10	k－13 d	64		Ⅱ	Ⅱb－1	22	
	h－14 a	152	2	Ⅱ	2(3)		
11	j－14 b	283		Ⅱa	1(2)	Ⅱb－1	22
	j－14 b	288		Ⅱb			
	k－14	153	3	Ⅱ			
12	j－14 b	285		Ⅱ		Ⅱb－1	22
	j－14 b	286	2	Ⅱb			
13	j－14 b	283×12		Ⅱ	1(2)	Ⅱb－1	22
	j－14 b	285		Ⅱ			
	j－14 b	288×5	10	Ⅱb			10～13同一個体
14	Y－16 a	21		Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	22
	Y－17 a	32×2		Ⅳ	4(5)		
	Y－17 a	36×2		Ⅳ	5(5)		
	Y－17 a	43×3	8	Ⅳ	5(5)		
15	Y－16 a	21×14		Ⅳ	2(5)	Ⅱb－1	22
	Y－16 b	47		Ⅳ	6(5)		
	Y－16 d	150	16	Ⅳ	2(5)		
16	Y－16 d	4		Ⅳ		Ⅱb－1	22
	Y－16 a	21×5	6	Ⅳ	2(5)		14～16同一個体
17	Z－16 d	115	1	Ⅳ	6(7)	Ⅱb－1	22
18	X－20 a	7		表採		Ⅱb－1	22
19	X－17 b	41	1	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	22
20	j－14 b	63		Ⅱ	1(3)	Ⅱb－1	22
	j－14 b	69		Ⅱ	1(3)		
	j－14 b	102×2		Ⅱ	1(3)		
	j－14 b	152×4	8	Ⅱ	2(3)		
21	Y－18 d	130	1	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	22
22	X－17 a	25	1	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	22
23	Z－17 a	42×2	2	Ⅳ	4(4)	Ⅱb－1	22
24	Z－16 d	56	1	Ⅳ	5(7)	Ⅱb－1	22
25	a－16 b	183×2	2	Ⅱ		Ⅱb－1	22
26	X－16 c	26×5	5	Ⅱ～Ⅳ		Ⅱb－1	23
27	Y－17 d	83×4		Ⅳ	4(5)	Ⅱb－1	23
	Y－17 d	86		Ⅳ	5(5)		
	Y－17	122×2	7	Ⅱ			
28	X－16	15×2		Ⅱ～Ⅳ	2(2)	Ⅱb－1	23
	X－16 c	25		Ⅱ～Ⅳ			
	X－17 a	87		Ⅱ	2(3)		
	Y－16 d	138×7		Ⅱ			
	Y－17 a	43		Ⅳ	5(5)		
	Y－17 a	83×2		Ⅳ			
	Y－17	122×6		Ⅰ			
	Y－17 a	131	21	Ⅱ			26～28同一個体
29	Z－14 b	26×2		Ⅱ		Ⅱb－1	23
	a－14 a	67×23	25	Ⅱ			
30	a－14 a	28×7		Ⅳ	2(6)	Ⅱb－1	23
	a－14 a	49×2	10	Ⅳ			29・30同一個体
31	Y－16 d	143	1	Ⅳ	1(5)	Ⅱb－1	23
32	a－14 a	67	2	Ⅱ	2(3)	Ⅱb－1	23
33	X－17 d	27×2		Ⅳ		Ⅱb－1	23
	X－17 d	56		Ⅳ	2(3)		
	X－17 a	83	4	Ⅳ	2(3)		
34	Y－16 a	31×3		Ⅳ	2(5)	Ⅱb－1	23
	Y－17 a	1		Ⅳ	1(5)		
	Y－17 a	33×4		Ⅳ	4(5)		
	Y－17 a	38×2	10	Ⅳ	5(5)		
35	Z－15	38×2	2	Ⅳ		Ⅱb－1	23
36	i－13 d	8	1	Ⅱ		Ⅱb－1	23
37	X－17 a	43	1	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	23
38	h－13 a	97×2	2	Ⅱb		Ⅱb－1	23
39	j－13 d	26×4		Ⅱ		Ⅱb－1	23
	j－13 d	29×3	7	Ⅳ	2(4)		3と同一個体
40	a－16 c	8×7	1	Ⅳ		Ⅱb－1	23
41	j－12 d	78×3	3	Ⅳ	1(3)	Ⅱb－1	24
42	i－12 d	86×3	3	Ⅱb		Ⅱb－1	24
43	W－17 c	5	1	Ⅱ～Ⅳ		Ⅱb－1	24
44	W－17	1	1	Ⅱ		Ⅱb－1	24
45	Y－17 b	54	1	Ⅳ	4(5)	Ⅱb－1	24
46	Y－17 b	54×2	2	Ⅳ	4(5)	Ⅱb－1	24
47	Z－17 d	53×2	2	Ⅳ	4(4)	Ⅱb－1	24
48	X－18	4	1	Ⅳ		Ⅱb－1	24
49	Z－17 d	39	1	Ⅳ	2(4)	Ⅱb－1	24
50	Y－17	19	1	Ⅰ		Ⅱb－1	24
51	Z－17 a	28		Ⅳ	2(4)	Ⅱb－1	24
	Z－17 a	42×2		Ⅳ	4(4)		
	Z－17 a	68		Ⅳ	4(4)		
	Z－17 b	73	5	Ⅳ	4(4)		
52	Y－16 d	136×2		Ⅱ		Ⅱb－1	24
	Y－16 d	148		Ⅳ	1(3)		
	Y－16 d	150	4	Ⅳ	2(3)		
53	Z－16 d	55		Ⅳ	3(5)	Ⅱb－1	24
	Z－16 d	100×2		Ⅳ	4(5)		
	Z－16 d	110×4	7	Ⅳ	5(5)		
54	k－13 d	243	1	Ⅰ		Ⅱb－1	24
	k－13 d	244	2	Ⅱ			
55	k－13 d	243×9		Ⅰ		Ⅱb－1	24
	k－13 d	244×2		Ⅱ			
	k－13 d	246×5	16	Ⅱb			54・55同一個体
56	i－13 d	80×2		Ⅱb		Ⅱb－1	24
	i－12 d	82×5		Ⅱ			
	i－13 d	86×3		Ⅱb			
	i－13 a	87×2		Ⅱ	2(3)		
	i－13 a	90		Ⅱb			
	i－13 a	101×3		Ⅳ	1(3)		
	i－13 a	107		Ⅳ	2(3)		
	i－13 a	131	18	黒層			
57	i－12 d	83		Ⅱ		Ⅱb－1	24
	i－12 d	88	2	Ⅴ			
57	Y－16 c	54	1	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	24
58	g－13 b	73×3	3	Ⅳ	1(3)	Ⅱb－1	24
59	Y－16 c	80×5	6	Ⅳ	6(6)	Ⅱb－1	24
60	Y－16 c	79×2	2	Ⅳ	4(6)	Ⅱb－1	25
61	j－12 d	32		Ⅱ	3(4)	Ⅱb－1	25
	j－12 d	49		Ⅱ	4(4)		
	j－12 d	83×4	6	Ⅱb			
62	j－12 d	32×2		Ⅱ	3(4)	Ⅱb－1	25
	j－12 d	49×3	7	Ⅱ	4(4)		61・62同一個体
63	p－16 a	6×7		Ⅱ		Ⅱb－1	25
	p－16 a	197×3	12	Ⅳ			
64	i－12 d	78		Ⅳ	1(3)	Ⅱb－1	25
	i－12 d	86		Ⅱb			
	i－13 a	131×2	4	黒層			
65	i－12 d	78×7		Ⅳ	1(3)	Ⅱb－1	25
	i－12 d	83×1	8	Ⅱ			
66	i－12 c	47		Ⅳ	1(3)	Ⅱb－1	25
	i－13 d	80	2	Ⅱb			64～66同一個体
67	k－14 d	168	1	Ⅱb		Ⅱb－1	25
68	W－17 c	8	1	Ⅱ～Ⅳ		Ⅱb－1	25
69	a－16 a	123	1	Ⅱ		Ⅱb－1	25
70	l－15 a	57×2	2	Ⅱb	4(6)	Ⅱb－1	25
71	l－15 a	86×5	5	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	25
72	l－15 a	16	1	Ⅱ	2(3)	Ⅱb－1	25
73	o－17 a	59		Ⅱ		Ⅱb－1	25
	o－17 a	81	2	Ⅱ			
74	j－15 b	152	1	Ⅳ		Ⅱb－1	25
75	l－13 a	35×3	3	Ⅱ		Ⅱb－1	25
76	o－16 c	169		Ⅱ		Ⅱb－1	25
	o－16 c	171×2		Ⅱ			
	o－16 d	191	4	Ⅱ			
77	o－16 c	169×3	3	Ⅱ		Ⅱb－1	25
78	Y－16 d	138	1	Ⅱ		Ⅱb－1	25
79	Z－15	16×2	2	Ⅰ		Ⅱb－1	25
80	Z－15	16	1	Ⅳ		Ⅱb－1	25
81	Z－15 c	57	1	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	25
82	a－15 c	1	1	Ⅳ	1(2)	Ⅱb－1	25
83	j－14 c	34×3	3	Ⅱ	1(2)	Ⅱb－1	25
84	p－17 b	152×2	2	Ⅴ		Ⅱb－1	25
85	Z－14 a	117×2	2	Ⅳ	2(3)	Ⅱb－1	25
86	Z－15 b	50	1	Ⅳ	3(5)	Ⅱb－1	26
87	n－15 c	102×2	2	Ⅱ		Ⅱb－1	26
88	k－14 d	93×2	2	Ⅱb		Ⅱb－1	26
89	k－14 c	77		Ⅱ	2(3)	Ⅱb－1	26
	k－14 d	94×3		Ⅱ	2(3)		
	k－14 d	107		Ⅱb			
	k－14 d	142	6	Ⅳ	2(4)		
90	k－14 d	60×9		Ⅱ	1(3)	Ⅱb－1	26
	k－14 d	94	10	Ⅱ	2(3)		89～90同一個体
91	h－13 b	84×7	7	Ⅱ	2(3)	Ⅱb－2	26
92	h－13 b	71×2		Ⅱ	1(3)	Ⅱb－2	26
	h－13 a	81		Ⅱ	2(3)		
	h－13 b	84×11	14	Ⅱ	2(3)		
93	h－13 b	71×6		Ⅱ	1(3)	Ⅱb－2	26
	h－13 a	81×2	8	Ⅱ	2(3)		91～93同一個体
94	h－13 b	107×6	6	Ⅱb	1(3)	Ⅱb－2	26
95	h－13 b	71×7	7	Ⅱ	1(3)	Ⅱb－2	26
	h－13 a	81	8	Ⅱ	2(3)		94・95同一個体
96	m－14 a	134×16		Ⅱ		Ⅱb－2	26
	m－14 a	183		Ⅳ			
	m－14	未注記	18	Ⅳ			

番号	調査区 ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ	遺物番号	ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ	層位	ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ	分 類	図版番号	備 考
97	m－14 a	134 × 4	4	Ⅲ		Ⅱb－2	27	96・97同一個体
98	m－14 d	15 × 2	2	Ⅲ		Ⅱb－2	27	
99	n－15 c	74 × 2	2	Ⅲ		Ⅱb－2	27	
100	i－12 d	78 × 6	6	Ⅳ	1(3)	Ⅱb－2	27	
	i－12 d	83	5	Ⅲ				
101	m－16 a	13 × 2		Ⅲ		Ⅱb－2	27	
	m－16 a	15		Ⅲ				
102	n－16 a	138 × 3	3	Ⅲ		Ⅱb－2	27	
103	m－15 c	138 × 2	2	Ⅲ		Ⅱb－2	27	
104	o－16 b	294	1	Ⅳ		Ⅱb－2	27	
105	Z－16 d	135 × 5		Ⅳ	5(7)	Ⅱb－2	27	
	Z－17 a	42	6	Ⅳ	4(4)			
106	Z－16 d	115		Ⅳ	6(7)	Ⅱb－2	27	
	Z－16 d	139	2	Ⅳ	7(7)			105～107同一個体
107	Z－16 d	132 × 4		Ⅳ	4(7)	Ⅱb－2	27	
	Z－16 d	135 × 5	12	Ⅳ	5(7)			
108	i－12 d	78 × 3		Ⅲ	1(3)	Ⅱb－2	27	
	i－12 d	80		Ⅲb				
	i－12 d	83 × 2	12	Ⅲ				
109	j－12 d	93 × 6	6	Ⅲb		Ⅱb－2	27	
110	Y－16 c	64 × 2		Ⅳ	3(3)	Ⅱb－2	27	
	Y－16 c	75 × 2	4	Ⅳ	5(3)			
111	欠損							
112	Z－16 a	18	1	Ⅴ	2(5)	Ⅱb	28	
113	a－15 b	115 × 2	2	Ⅱ		Ⅱb	28	
114	Z－16 a	14 × 2		Ⅳ	3(7)	Ⅱb	28	
	Z－16 c	95	3	Ⅳ	4(7)			
115	Z－15 b	50	1	Ⅳ	3(3)	Ⅱb	28	
116	Y－15 a	107	1	Ⅳ		Ⅱb	28	
117	x－11 c	102 × 5		Ⅳ	1(3)	Ⅱb	28	
	x－11 c	110	5	Ⅳ	2(3)			
118	Z－17 c	85 × 10	10	Ⅳ	3(4)	Ⅱb	28	
119	j－13 b	120 × 12		Ⅲ		Ⅱb	28	
	j－13 b	122		Ⅲ	2(3)			
	j－13 d	124 × 4	15	Ⅲ				
120	a－14	19		Ⅰ				
	a－14 d	33	2	Ⅳ	2(5)			
121	a－17 c	20	1	Ⅳ		Ⅱb	25	
122	j－13 d	90 × 2	2	Ⅲb		Ⅱb	28	
123	b－13 a	66	1	Ⅲ	1(3)	Ⅱb	28	
124	M－13	5	1	Ⅴ		Ⅱb	28	
125	Z－14 d	96 × 6		Ⅳ	5(7)	Ⅱb	28	
	Z－14 a	118	7	Ⅳ	2(3)			
126	n－15 b	96	1	Ⅲ		Ⅱb	28	
127	Z－16 d	106	1	Ⅳ	4(7)	Ⅱb	28	
128	Z－17 b	62		Ⅳ	3(4)	Ⅱb	28	
	Z－17 a	68 × 3	3	Ⅳ	4(4)			
129	m－14 a	135 × 23	21	Ⅲ		Ⅱb	28	
130	a－13 d	30 × 2	2	Ⅳ	2(3)	Ⅱb	29	
131	Z－16 d	51		Ⅳ	1(7)	Ⅱb	29	
	Z－16 d	55 × 3	3	Ⅳ	3(7)			
132	b－16 d	39 × 2	2	Ⅲ		Ⅱb	29	
133	j－12 b	82 × 2	2	Ⅲ		Ⅱb	29	
134	k－14 a	67 × 6	6	Ⅲ	2(3)	Ⅱb	29	
135	m－14 a	73 × 3	3	Ⅲ		Ⅱb	29	
136	X－16	5		Ⅲ～Ⅳ		Ⅱb	29	
	X－16	16	2	Ⅲ～Ⅳ	2(2)			
137	Z－13	10	1	Ⅰ		Ⅱb	29	
138	X－16 c	35 × 3	3	Ⅲ～Ⅳ		Ⅱb	29	
139	X－17 b	66 × 3	3	Ⅳ	2(3)	Ⅱb	29	
140	a－14 a	25		Ⅳ	2(5)	Ⅱb	29	
	a－14 a	26	2	Ⅳ	3(5)			
141	j－12 e	31		Ⅳ	3(5)	Ⅱb	29	
	j－12 e	75	2	Ⅳ				
142	m－14 d	145	1	Ⅳ		Ⅱb	29	
143	k－13 d	344	1	Ⅲ		Ⅱb	29	
144	n－16 c	30	1	Ⅲ		Ⅱb	29	
145	W－17	1		Ⅰ		Ⅱb	29	
	W－17	7	2	Ⅲ～Ⅳ				
146	Y－15 c	76	1	Ⅳ	5(3)	Ⅱb	29	
147	Y－15 c	80	1	Ⅳ	6(3)	Ⅱb	29	146・147同一個体
148	X－15	16	1	Ⅲ～Ⅳ	3(2)	Ⅱb	29	
149	Z－13 d	40	3	Ⅳ		Ⅱb	29	
150	Z－17 b	48 × 2		Ⅳ	4(4)	Ⅱb	29	
	Z－17 b	52 × 4	6	Ⅳ	3(4)			
151	Z－17 a	42 × 2	2	Ⅳ	4(4)	Ⅱb	29	
152	j－12 d	49		Ⅲ	6(4)	Ⅱb	30	
	j－12 d	93	2	Ⅲb				
153	Z－16 a	67 × 2		Ⅳ	4(7)	Ⅱb	30	
	Z－16 a	139 × 4	6	Ⅳ	6(7)			

番号	調査区 ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ	遺物番号	ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ	層位	ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ	分 類	図版番号	備 考
154	a－17	21 × 3	3	Ⅳ		Ⅱb	30	
155	o－16 b	112		Ⅲ		Ⅱb	30	
	o－16 b	232 × 3	4	Ⅲ				
156	e－12	15	1	Ⅰ		Ⅱb	30	
157	Z－15 a	74	1	Ⅳ		Ⅱb	30	
158	Y－17 a	35	1	Ⅳ	5(5)	Ⅱb	30	
159	X－16 c	26	1	Ⅱ～Ⅳ		Ⅱb	30	158・159同一個体
160	Y－17 c	74		Ⅳ	5(5)	Ⅱb	30	
	X－14 d	96 × 2		Ⅳ	5(7)			
	Z－14 d	118	6	Ⅴ	2(3)			
161	Z－17 b	61	1	Ⅳ	3(4)	Ⅱb	30	
162	a－15 b	96	1	Ⅱ		Ⅱb	30	
163	k－13 d	32	1	Ⅲ	1(3)	Ⅱb	30	
164	f－12 c	36		Ⅳ	1(1)	Ⅱb	30	
	f－12 c	53 × 2		Ⅳ				
	f－12 c	55 × 4	7	撹乱				
165	j－12 d	15		Ⅲ	1(1)	Ⅱb	30	
	i－12 d	90 × 2	4	Ⅲb				
166	p－16 a	26		Ⅲ		Ⅱb	30	
	p－16 a	28		Ⅲ				
	p－16 a	30		Ⅲ				
	p－16 a	181 × 8	11	Ⅲ				
167	j－12 d	86 × 8		Ⅲ	1(4)	Ⅱb	31	
	j－12 d	93		Ⅲb				
	j－12 d	108 × 2	2	Ⅳ	2(6)			
168	Z－16 a	133	1	Ⅳ		Ⅱb	31	
169	X－16 b	23 × 3	3	Ⅱ～Ⅳ		Ⅱb	31	
170	b－12 b	79 × 2	2	撹乱		Ⅱb	31	
171	p－16 a	8		Ⅲ		Ⅱb	31	
	p－16 a	184	3	Ⅲb				
172	q－16 d	24 × 3	3	Ⅱ		Ⅱb	31	
173	o－17 d	149 × 2	2	Ⅱ		Ⅱb	31	
174	X－16 c	26	1	Ⅱ～Ⅳ		Ⅱb	31	
175	p－16 b	106	1	Ⅱ		Ⅱb	31	
176	a－17 b	30	1	Ⅳ	3(3)	Ⅱb	31	
177	o－16 b	91	1	Ⅲ		Ⅱb	31	
178	j－13 d	39		Ⅳ	2(4)	Ⅱb	31	
	j－13 b	92	2	Ⅳ				
179	j－13	33	1	Ⅲ	3(3)	Ⅱb	31	
180	Z－15 c	60	1	Ⅳ	3(5)	Ⅱb	31	
181	o－16 b	65	1	Ⅲ		Ⅱb	31	
182	o－16 b	91 × 2	2	Ⅲ		Ⅱb	31	
183	Y－16 a	142 × 2	2	Ⅳ	1(5)	Ⅱb	31	
184	Z－15 d	90 × 2	2	Ⅳ	2(5)	Ⅱb	31	
185	e－17 d	201	1	Ⅱ		Ⅱb	31	
186	o－17 a	238	1	Ⅳ		Ⅱb	31	
187	b－14 d	3 × 2	2	Ⅱ		Ⅱb	31	
188	Z－16 b	82	1	Ⅳ	4(7)	Ⅱb	31	
189	Z－16 b	128	1	Ⅳ	6(7)	Ⅱb	31	188・189同一個体
190	j－13 d	93 × 2	2	Ⅲb		Ⅱb	31	
191	Z－14 a	107 × 3		Ⅳ	6(7)	Ⅱb	31	
	Z－14 a	125	4	Ⅴ	3(3)			191・192同一個体
192	Z－14 a	107 × 2	2	Ⅳ	6(7)	Ⅱb	31	
193	Z－14 a	132 × 2	2	Ⅴ		Ⅱb	31	
194	Z－14 d	134	1	Ⅴ		Ⅱb	31	193・194同一個体
195	i－14 b	110 × 4	4	Ⅲ	1(2)	Ⅱb	31	
	i－14 b	152 × 3	7	Ⅲ	2(2)			
196	p－16 a	154 × 3	3	Ⅲb		Ⅱb	32	
197	n－16 a	125 × 2		Ⅲ		Ⅱb	32	
	n－16 a	136		Ⅲ				
	n－16 a	139 × 4		Ⅲ				
	n－16 b	158		Ⅲ				
	n－16 a	216	8	Ⅲb				
198	d－14	13	1	Ⅰ		Ⅱb	32	
199	k－15 b	33	1	Ⅳ	3(3)	Ⅱb	32	
200	e－16 c	183 × 3	3	Ⅲ		Ⅱb	32	
	e－16 d	205 × 2	5	Ⅳ				
201	Y－16 c	80	1	Ⅳ	6(3)	Ⅱb	32	
202	Z－16 d	110 × 3	3	Ⅳ	5(7)	Ⅱb	32	201・202同一個体
203	c－15 a	8	1	Ⅳ		Ⅱb	32	
204	c－14 b	17	1	Ⅳ	1(3)	Ⅱb	32	203・204同一個体
205	i－16 d	37	1	Ⅲ		Ⅱb	32	
	o－16 c	258	2	Ⅲb				
206	i－14 b	110	1	Ⅲ	1(2)	Ⅱb	32	
	i－14 b	152 × 10	11	Ⅲ	2(2)			
207	i－13 c	12 × 2	2	Ⅲb		Ⅱb	32	206・207同一個体
208	m－14 a	135 × 2	2	Ⅲ		Ⅱb	32	
209	m－14 a	75 × 3	3	Ⅲ		Ⅱb	32	
209	m－14 a	135	4	Ⅲ		Ⅱb	32	209・209同一個体
210	m－14 a	184	1	Ⅳ		Ⅱb	32	

表13　包含層出土　拓本掲載土器一覧（3）　Ⅲ・Ⅵ群（図Ⅴ－1－18）

Ⅲ群　拓本掲載土器　（図Ⅴ－1－18）

番号	調査区	ホクリット	遺物番号	層位	層位(細別)	分類	図版番号	備考
1	O－18	d	1	Ⅰ	1(1)	Ⅲa	32	
2	i－12	d	90	Ⅲb	1(1)	Ⅲa	32	
3	i－12	a	100	Ⅳ	1(1)	Ⅲa	32	2と同一個体か

Ⅵ群　拓本掲載土器　（図Ⅴ－1－18）

番号	調査区	ホクリット	遺物番号	層位	層位(細別)	分類	図版番号	備考
4	M－29	c	1	Ⅳ	1(1)	Ⅵb	32	

表14　包含層出土　掲載石器一覧　（図Ⅴ－2－4～12）

番号	発掘区	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
1	h－13	132	Ⅳ	石鏃	頁岩	(3.4)	1.5	0.3	1.6	33	
2	Z－16	26	Ⅳ	石鏃	頁岩	3.8	2.1	0.3	1.7	33	
3	a－14	3	Ⅰ	石鏃	頁岩	(2.3)	1.6	0.4	1.4	33	
4	表採			石鏃	頁岩	(3.0)	0.9	0.3	0.8	33	
5	n－16	300	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.0	0.8	0.2	0.3	33	
6	Y－16	81	Ⅳ	石鏃	頁岩	2.2	1.2	0.2	0.5	33	
7	K－30	1	Ⅳ	石鏃	頁岩	(3.1)	1.5	0.6	2.0	33	
8	Z－17	58	Ⅳ	つまみ付きナイフ	頁岩	7.0	2.5	0.8	12.9	33	
9	k－12	37	Ⅳ	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.4	2.4	0.8	12.0	33	
10	a－14	42	Ⅳ	つまみ付きナイフ	頁岩	(3.7)	2.5	0.7	6.9	33	
11	p－17	83	Ⅲ	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.3	3.6	0.6	13.2	33	
12	Y－17	88	Ⅳ	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.0	2.8	1.3	23.3	33	
13	a－15	7	Ⅳ	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.2	3.9	1.0	17.8	33	
14	Y－16	124	Ⅴ	つまみ付きナイフ	頁岩	(4.7)	3.5	0.7	12.1	33	
15	Y－16	6	Ⅳ	つまみ付きナイフ	頁岩	(5.1)	2.9	0.4	6.6	33	
16	Z－16	69	Ⅳ	つまみ付きナイフ	頁岩	(3.1)	2.1	0.5	4.4	33	
17	Z－15	56	Ⅳ	つまみ付きナイフ	黒曜石	4.2	2.6	0.6	8.5	33	
18	X－17	28	Ⅳ	つまみ付きナイフ	頁岩	5.2	3.0	0.7	14.5	33	
19	N－28	3	Ⅳ	つまみ付きナイフ	頁岩	7.0	3.2	0.8	12.8	33	
20	Z－14	30	Ⅲ	つまみ付きナイフ	頁岩	6.7	2.5	0.7	7.8	33	
21	b－13	2	Ⅰ	つまみ付きナイフ	頁岩	7.8	2.4	0.5	12.5	33	
22	c－13	2	Ⅰ	つまみ付きナイフ	頁岩	6.8	3.5	1.0	14.0	33	
23	n－16	240	Ⅳ	両面調整石器	頁岩	6.4	3.1	0.9	18.8	34	
24	a－13	12	Ⅳ	両面調整石器	頁岩	(8.8)	5.0	1.2	59.7	34	
25	Z－17	10	Ⅰ	両面調整石器	頁岩	11.9	6.6	2.1	157.3	34	
26	i－12	38	Ⅲ	両面調整石器	頁岩	8.2	3.8	2.3	83.6	34	
27	p－16	84	Ⅲ	両面調整石器	頁岩	(9.5)	6.2	1.8	120.8	34	
28	i－13	17	Ⅲ	両面調整石器	頁岩	11.2	7.3	1.8	190.2	34	
29	表採	7		両面調整石器	頁岩	8.8	6.8	1.8	99.8	34	
30	p－16	15	Ⅲ	両面調整石器	頁岩	7.2	6.0	1.9	96.7	34	
31	d－14	6	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	(5.5)	4.6	1.2	44.4	34	
32	a－13	2	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	(4.4)	3.4	0.6	14.2	34	
33	a－15	8	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	(4.0)	3.3	1.1	15.9	34	
34	Z－15	136	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	4.7	2.1	0.8	6.2	34	
35	m－15	112	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	9.5	2.9	0.8	24.7	34	
36	i－13	63	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	7.3	3.6	1.1	39.9	34	
37	X－20	2	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	6.3	3.7	0.5	14.7	34	
38	h－12	31	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	6.2	3.2	0.8	16.2	34	
39	P－19	32	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	6.4	12.1	1.4	66.5	34	
40	Y－16	109	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	4.6	3.5	0.6	13.3	34	
41	Z－14	7	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	6.8	4.1	0.9	28.1	35	
42	Z－13	32	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	8.4	3.6	1.2	48.1	35	
43	Z－16	103	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	6.7	2.9	1.7	29.6	35	
44	Z－16	77	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	5.5	2.7	0.8	15.8	35	
45	表採	13		スクレイパー	頁岩	6.6	4.9	0.5	25.6	35	
46	o－17	111	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	7.7	4.9	1.9	67.6	35	
47	l－15	3	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	5.1	4.0	0.6	16.6	35	
48	Z－16	99	Ⅴ	スクレイパー	頁岩	7.7	9.7	1.3	57.7	35	
49	表採	18		スクレイパー	頁岩	6.4	4.6	0.7	21.3	35	
50	a－13	28	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	4.7	2.7	1.0	12.8	35	

番号	発掘区	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
51	o－17	89	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	6.0	4.8	1.3	36.1	35	
52	P－23	11	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	6.2	3.6	0.6	11.6	35	
53	a－13	24	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	7.5	3.5	0.7	20.6	35	
54	Z－14	9	I	スクレイパー	頁岩	5.8	1.8	0.8	11.1	35	
55	Y－16	122	Ⅴ	スクレイパー	頁岩	7.5	5.2	0.6	24.9	35	
56	m－14	63	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	7.8	5.0	1.3	52.3	36	
57	c－13	9	I	スクレイパー	頁岩	8.7	7.1	1.9	95.5	36	
58	a－13	31	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	4.8	3.2	0.6	11.1	35	
59	Y－16	108	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	7.1	4.4	0.8	29.5	35	
60	p－17	90	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	12.9	3.6	1.5	83.3	36	
61	Z－13	11	Ⅳ風倒	スクレイパー	頁岩	6.4	3.6	0.7	21.7	36	
62	Z－16	122	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	5.8	3.8	1.1	23.5	36	
63	Y－17	131	Ⅳ	剥片石器片	頁岩	3.3	4.1	1.0	13.9	36	
64	o－17	5	Ⅲ	剥片石器片	頁岩	(3.3)	1.8	0.7	5.0	36	
65	u－21	1	Ⅳ	石斧	緑色泥岩	7.8	4.2	1.0	48.4	36	
66	e－12	5	Ⅳ	石斧片	緑色泥岩	(4.2)	6.0	1.9	42.6	36	
67	l－14	120	Ⅲ	たたき石	安山岩	7.9	7.3	1.2	108.6	37	
68	m－15	146	Ⅳ	たたき石	流紋岩	5.6	5.4	2.3	107.4	37	
69	Y－17	18	Ⅳ	たたき石	安山岩	11.0	5.3	3.3	296.6	37	
70	k－14	61	Ⅲ	たたき石	安山岩	10.2	6.4	3.4	312.5	37	
71	o－17	23	Ⅲ	たたき石	安山岩	13.3	8.3	4.9	664.6	37	
72	b－10	10	Ⅴ	たたき石	流紋岩	7.9	5.9	3.3	189.0	37	
73	L－27	2	Ⅳ	たたき石	安山岩	9.3	7.5	6.0	606.6	37	
74	a－14	7	Ⅲ	すり石	安山岩	10.0	13.8	2.7	497.0	37	
75	f－11	36	Ⅳ	北海道式石冠	安山岩	10.0	12.8	5.9	950.0	37	
76	a－12	4	I	北海道式石冠	安山岩	10.3	13.3	8.5	1100.0	37	
77	e－12	22	風倒	北海道式石冠	安山岩	13.0	14.8	8.1	1350.0	38	
78	m－15	102	Ⅲ	北海道式石冠	安山岩	13.2	13.8	7.6	1600.0	38	
79	h－12	2	Ⅲ	北海道式石冠	安山岩	10.9	17.4	8.8	1690.0	38	
80	m－16	77, 78	Ⅲ	偏平打製石器	安山岩	8.7	18.2	1.7	471.9	38	
81	X－16	3	I	偏平打製石器	安山岩	10.0	11.7	1.8	304.7	38	
82	l－15	25	Ⅲ	偏平打製石器	安山岩	6.3	16.3	1.9	186.7	38	
83	Z－15	12	I	偏平打製石器	安山岩	7.0	9.7	1.6	144.2	38	
84	Z－16	68, 121	Ⅳ	石錘	安山岩	7.8	19.1	1.4	363.9	39	
85	Z－14	5	I	石錘	安山岩	7.3	13.3	2.0	220.1	39	
86	Y－16	123	Ⅴ	石錘	安山岩	7.3	10.4	1.6	105.8	39	
87	l－12	28	I	石錘	安山岩	8.9	14.8	12.5	565.5	39	
88	a－12	1	撹乱	磨石	凝灰岩	16.9	10.8	7.9	1800.0	39	
89	V－20	71	Ⅲ	加工痕のある剥	安山岩	11.8	15.0	8.1	1440.0	39	
90	P－16	1	Ⅳ	背面刀形石器	凝灰岩	29.8	16.3	3.0	800.0	40	
91	M－30	1	Ⅳ	土製品		3.2	3.2	1.2	15.8	40	
92	Y－18		Ⅳ	有孔自然石	泥岩	5.4	4.2	1.1	26.1	40	
93	i－12	54	Ⅳ	有孔自然石	泥岩	5.3	4.1	1.3	15.7	40	
94	K－13	350	Ⅳ風倒	玉	ヒスイ	2.9	1.0	1.0	6.1	40	

1　遺跡遠景（南から）

2　遺跡近景（手前シラリカ川）

図版2

1　調査状況（駒ヶ岳を望む）

2　調査状況（北から）

1　取り付け道路部分調査終了（北西から）

2　本線部分調査終了（北西から）

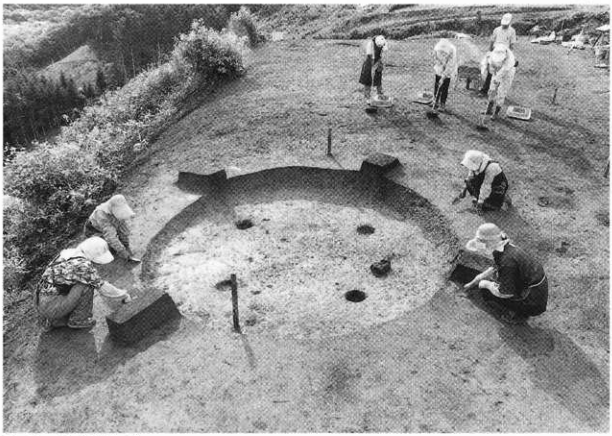
図版4

1　H－1（西から）

2　H－1土層断面（北西から）

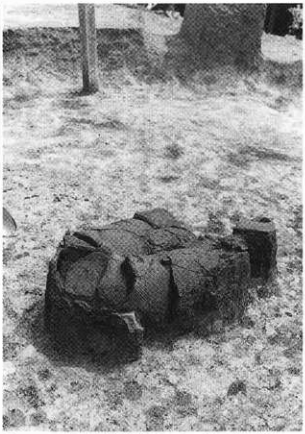
3　H－1周辺遺物出土状況（東から）

4　H－2検出状況（北西から）



1　H－2（南東から）

2　H－2覆土土器（図Ⅳ－5－2）出土状況



3　H－2覆土土器（図Ⅳ－5－2）出土状況

図版6

1　H－2床面土器（図Ⅳ－5－1）出土状況

2　H－2床面土器（図Ⅳ－5－1）出土状況

3　H－2のフレイク集中域1（東から）

4　H－2のフレイク集中域2（北東から）

5　H－2柱穴配置状況（北西から）

6　H－2・HP－1土層断面（南東から）

1　P－1（北西から）

2　P－2（南東から）

3　F－1検出状況（南西から）

4　F－2検出状況（南西から）

5　F－3検出状況（東から）

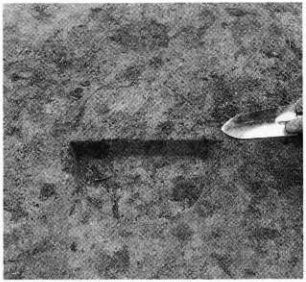
6　F－4検出状況（南西から）

図版 8

1　Ｆ－５検出状況（南東から）

2　Ｆ－６検出状況（北西から）

3　Ｆ－７検出状況（南西から）



4　Ｆ－８検出状況（北西から）

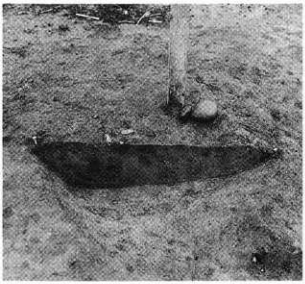
5　Ｆ－９検出状況（南から）

6　Ｆ－10検出状況（南西から）

1　F－11検出状況（南西から）

2　F－12検出状況（北東から）

3　F－13検出状況（南から）



4　F－13土層断面（南西から）

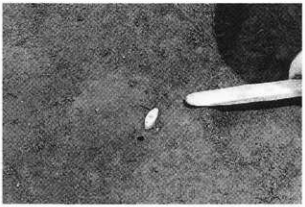
5　家畜埋葬土壙 6（北から）

6　家畜埋葬土壙1・骨出土状況（北東から）

図版10

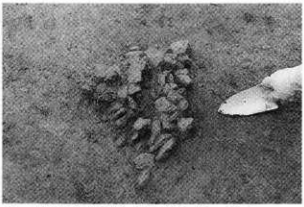
1　家畜埋葬土壙群（東から）

2　ヒスイ製玉出土状況（k－13区）



3　同左接写

4　土製玉出土状況（M－30区）



5　Ⅳ層土器（Ⅰ群）出土状況（O－18区）

1　Ⅲ層遺物出土状況（n－16区）

2　Ⅲ層遺物出土状況（j－12区）

3　Ⅲ層遺物出土状況（m－14区）

4　Ⅲ層遺物出土状況（m－14区）

5　Ⅲ層遺物出土状況（m－14区）

6　Ⅲ層遺物出土状況（m－16区）

図版12

1　H－1出土の土器（図Ⅵ－3－1）

2　H－1出土の遺物

3　H－2出土のⅡ群土器

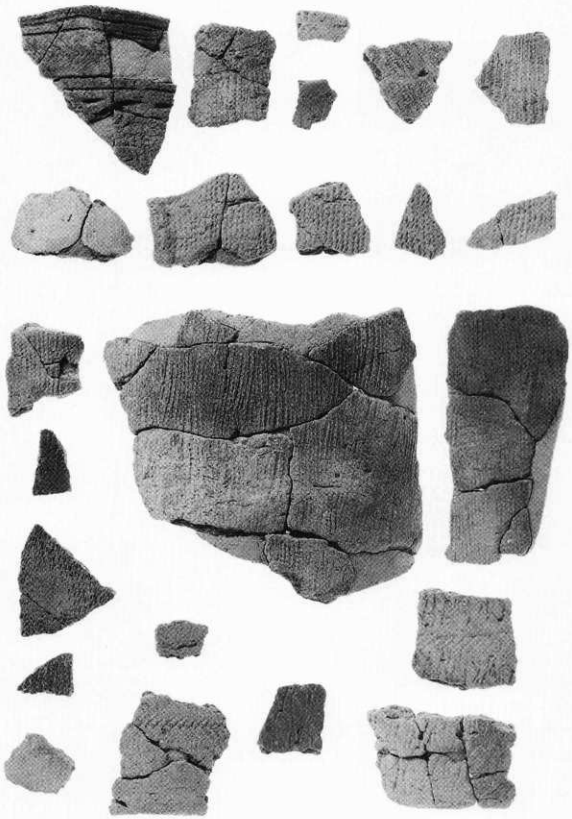
1　H－2出土の土器（図Ⅳ－5－1）

2　H－2出土の土器（図Ⅳ－5－2）

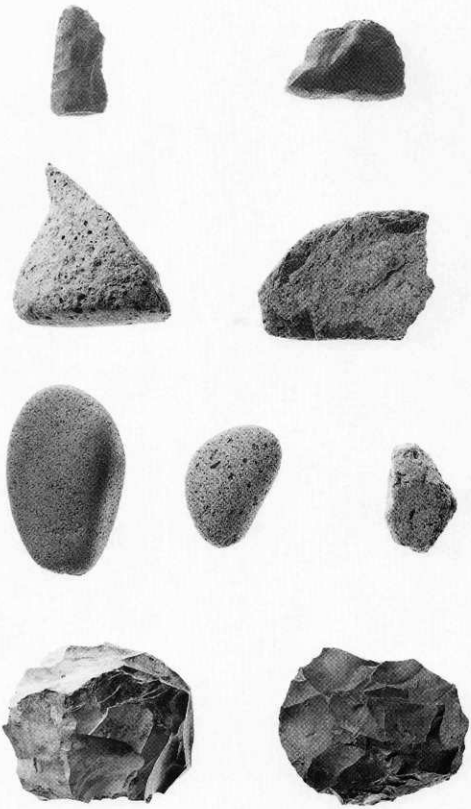
3　H－2出土の土器（図Ⅳ－5－3）

4　H－2出土の土器（図Ⅳ－5－4）

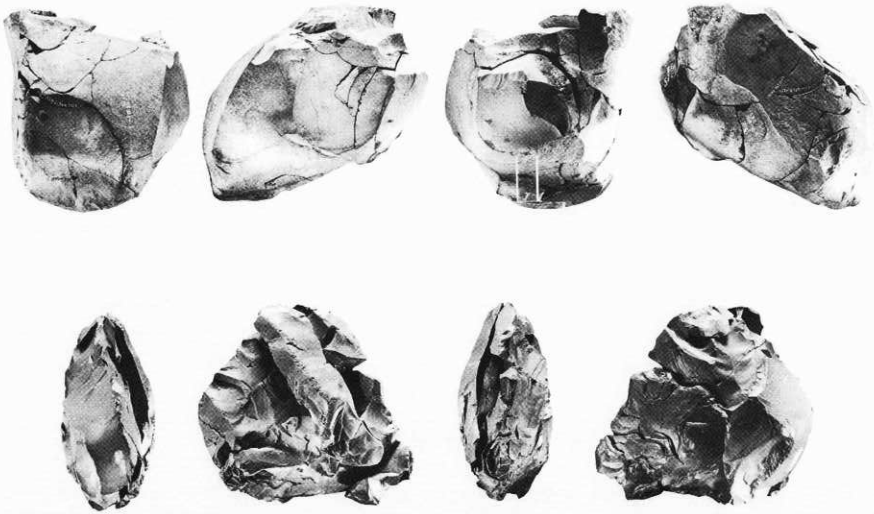
図版14



1　H－2出土の土器



1　H－2出土の土器

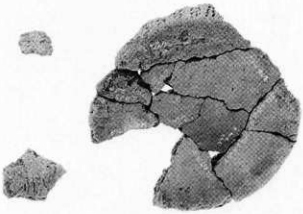


1　H－2の石器接合資料1・2（1：2.5）

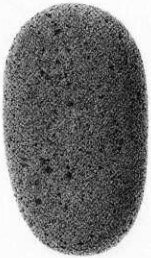
P－2

F－3

F－4



S－1

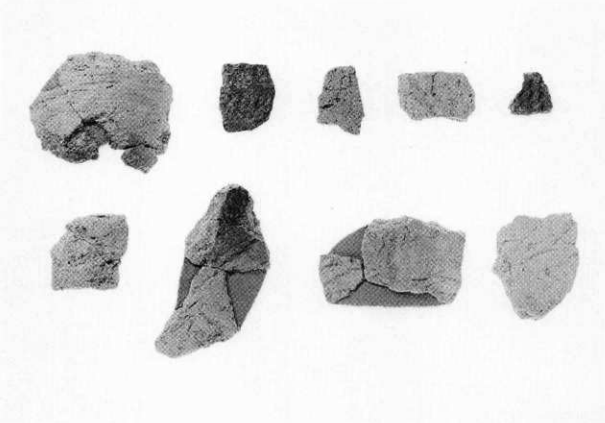


1　土壙、焼土、集石出土の遺物

図版18

1　包含層出土のⅠ群土器（図Ⅴ－1－1－1）

2　包含層出土のⅠ群土器（図Ⅴ－1－1－2）



3　包含層出土のⅠ群土器

1　包含層（ｊ－13区）出土のⅡ群土器

図版20

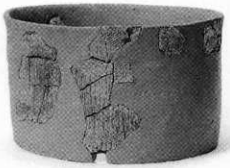
1　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ－1－2－1）

1　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ－1－2－2）

3　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ－1－3－3）

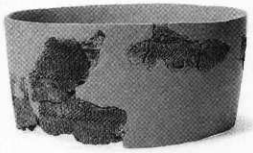
4　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ－1－3－4 口縁部）

5　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ－1－3－4 底部）



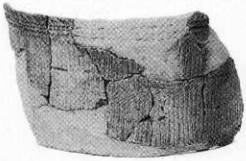
6　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ－1－3－5 口縁部）

1　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ−1−3−5 底部）



2　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ−1−4−6 口縁部）

3　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ−1−4−6 底部）

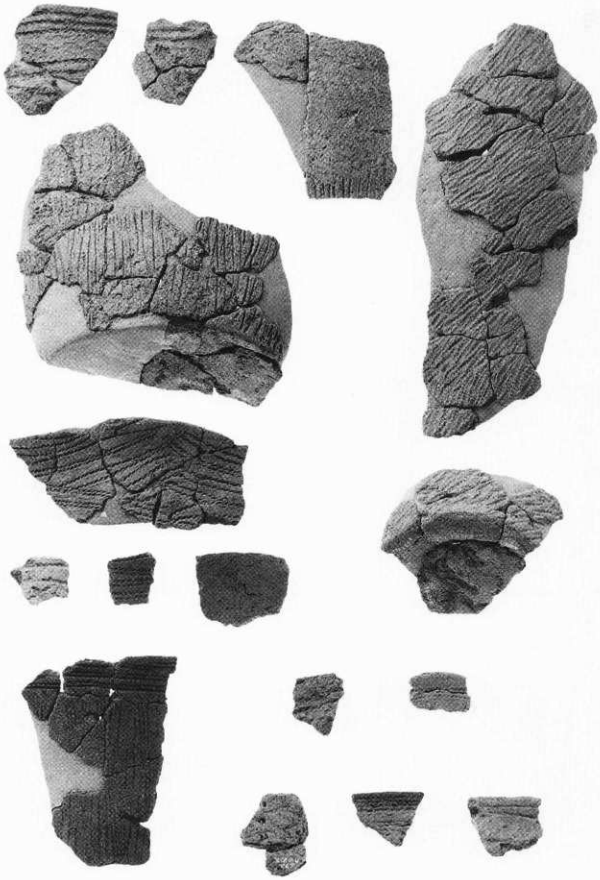


4　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ−1−5−7）

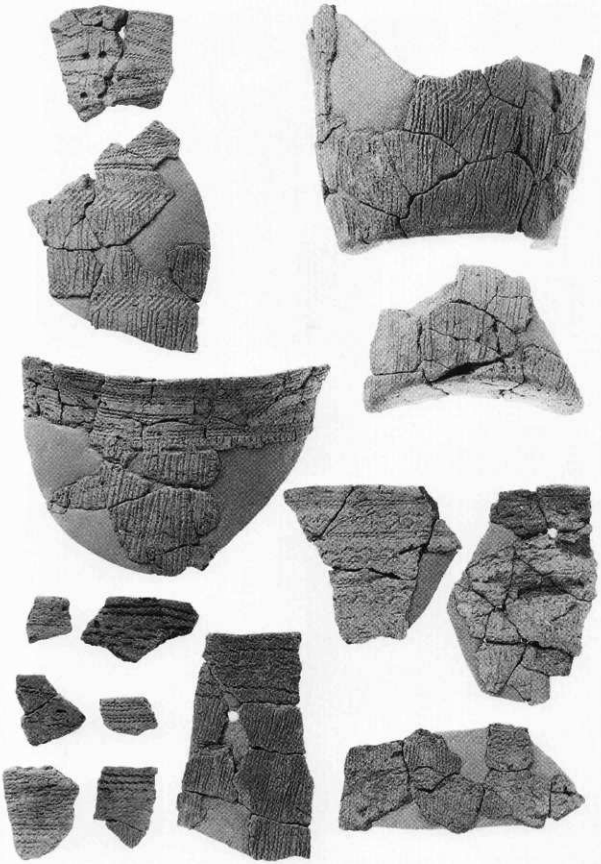
5　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ−1−5−8）

6　包含層出土のⅡ群土器（図Ⅴ−1−5−9）

図版22

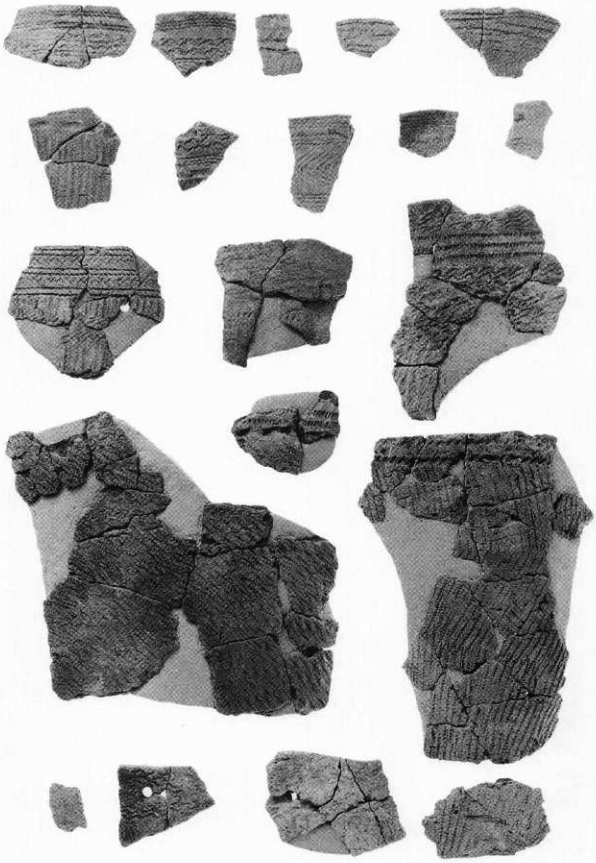


1　包含層出土のⅡ群土器(1)

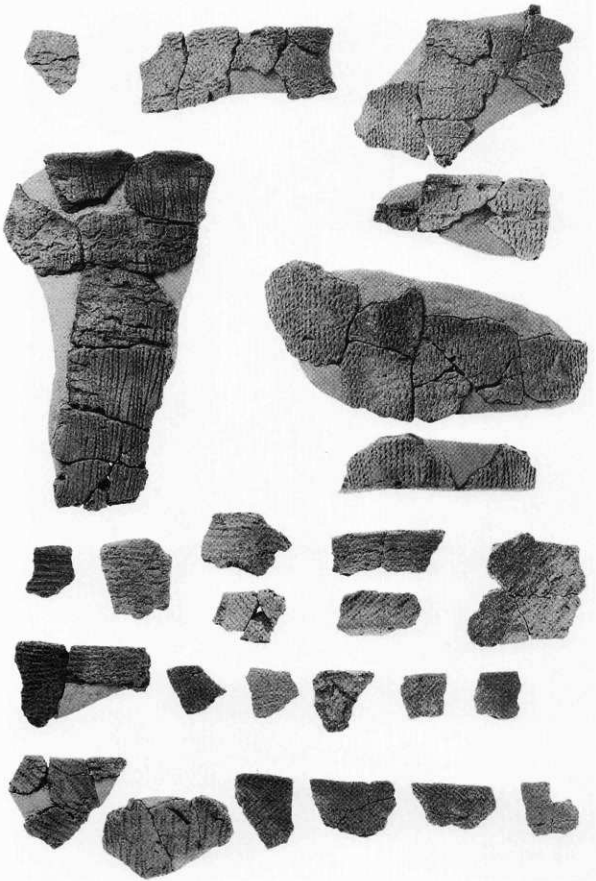


1　包含層出土のⅡ群土器(2)

図版24

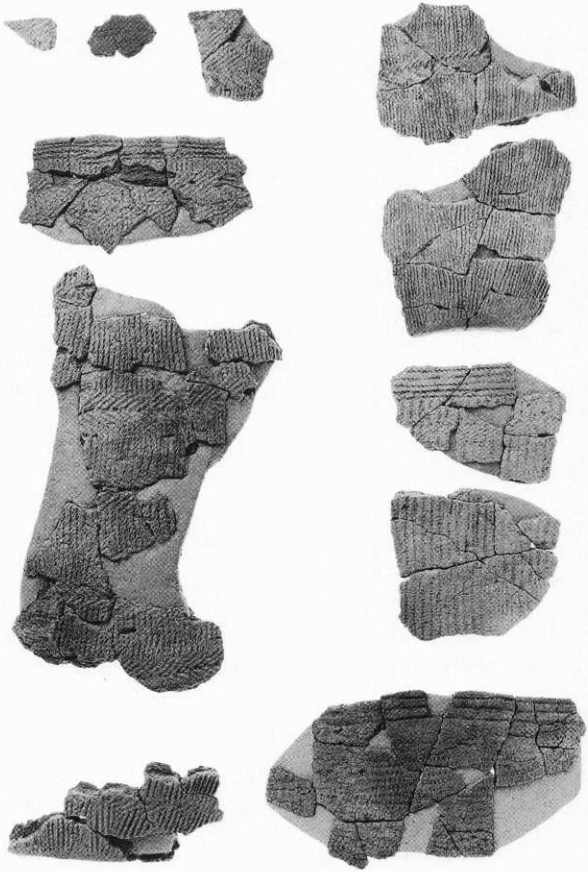


1　包含層出土のⅡ群土器(3)

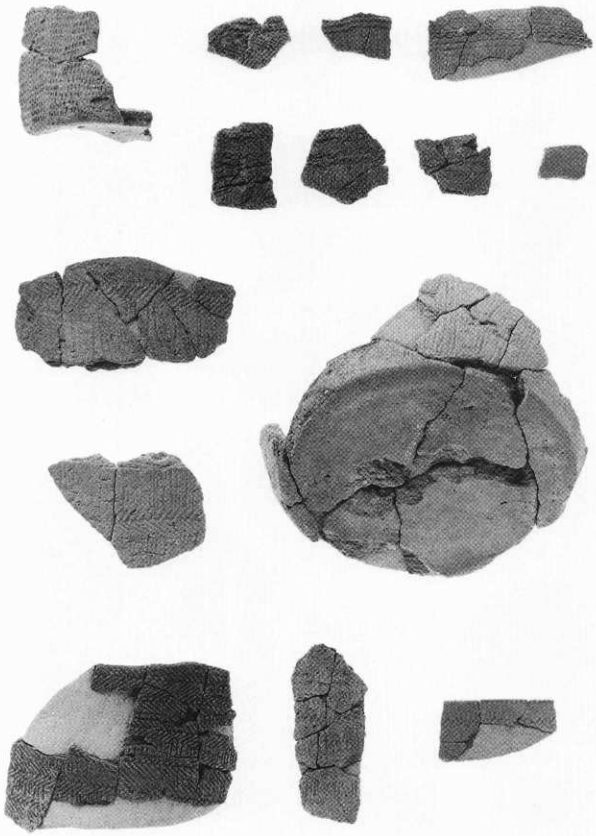


1　包含層出土のⅡ群土器(4)

図版26

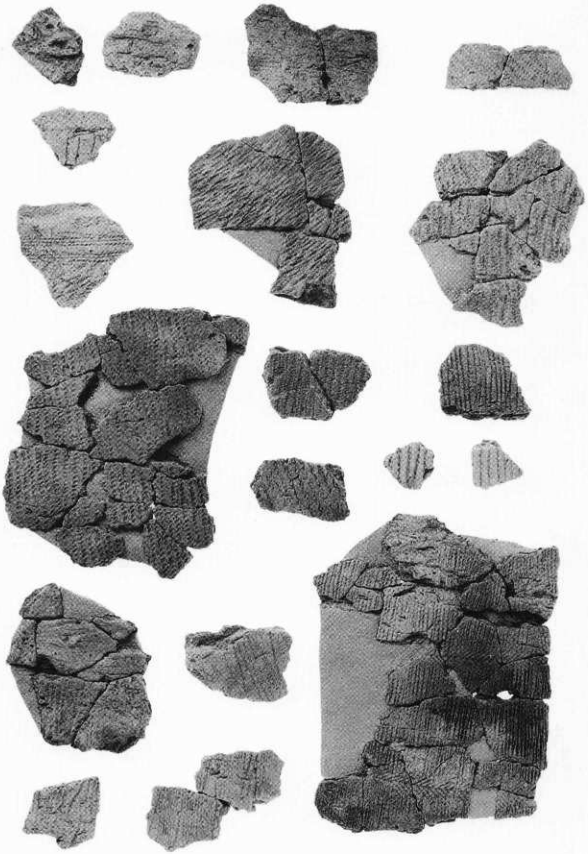


1　包含層出土のⅡ群土器(5)

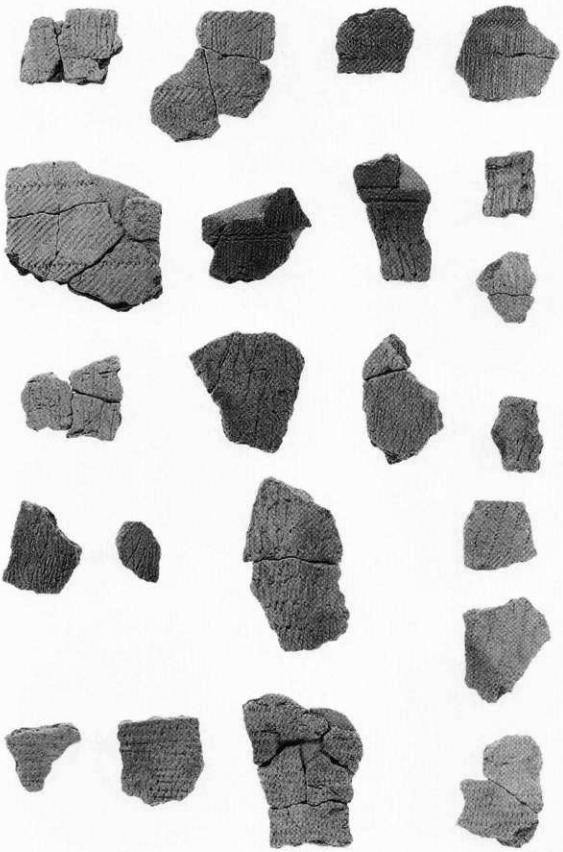


1　包含層出土のⅡ群土器(6)

図版28

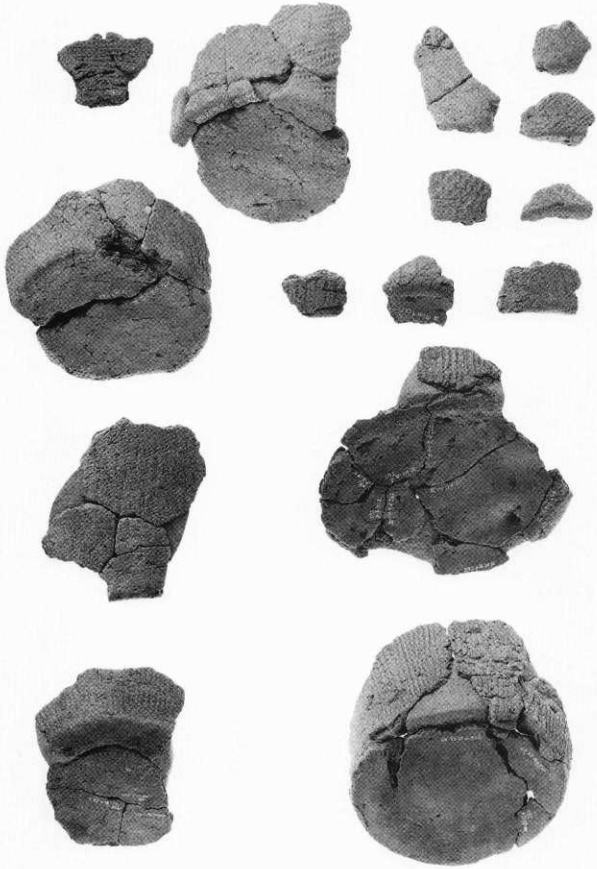


1　包含層出土のⅡ群土器(7)

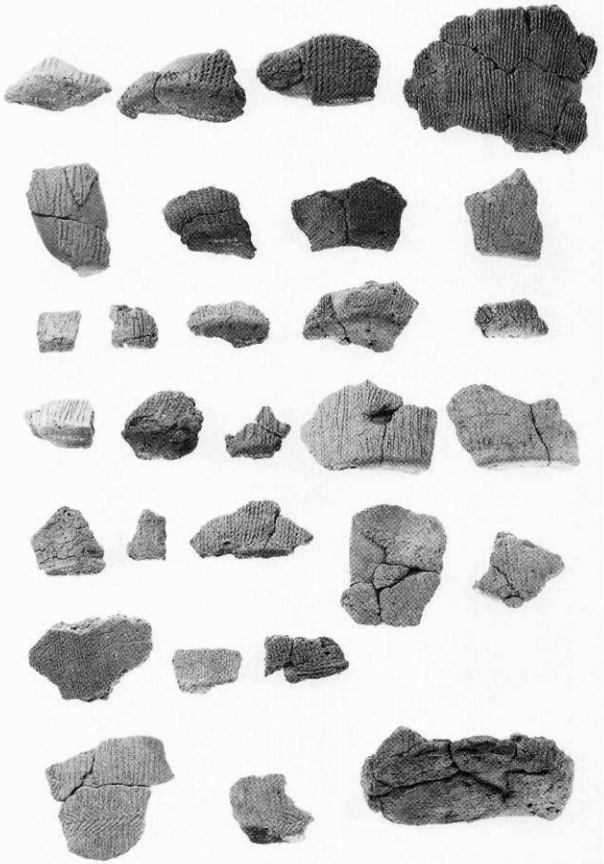


1　包含層出土のⅡ群土器(8)

図版30

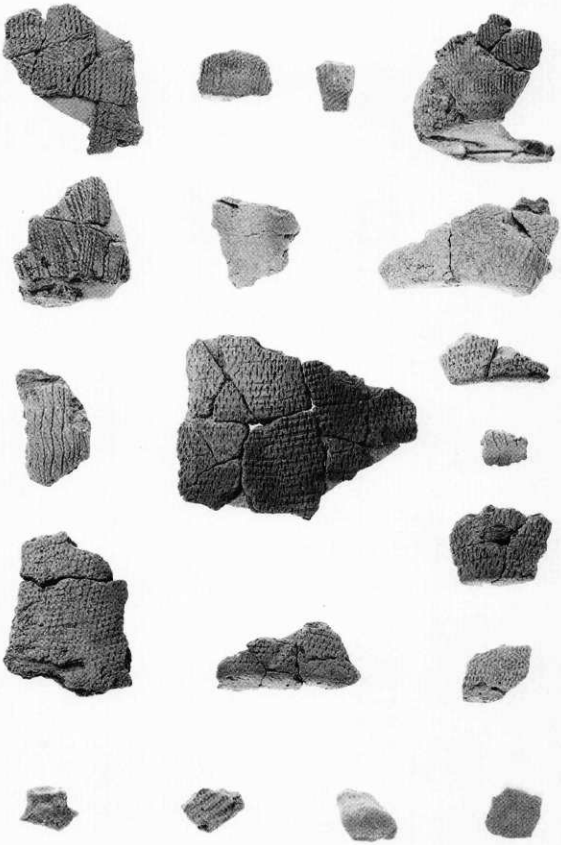


1　包含層出土のⅡ群土器(9)

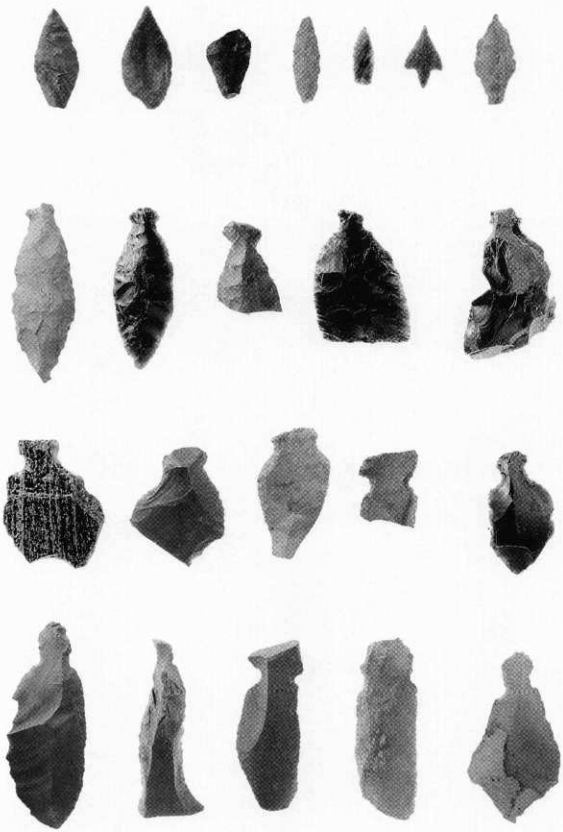


1　包含層出土のⅡ群土器(1)

図版32

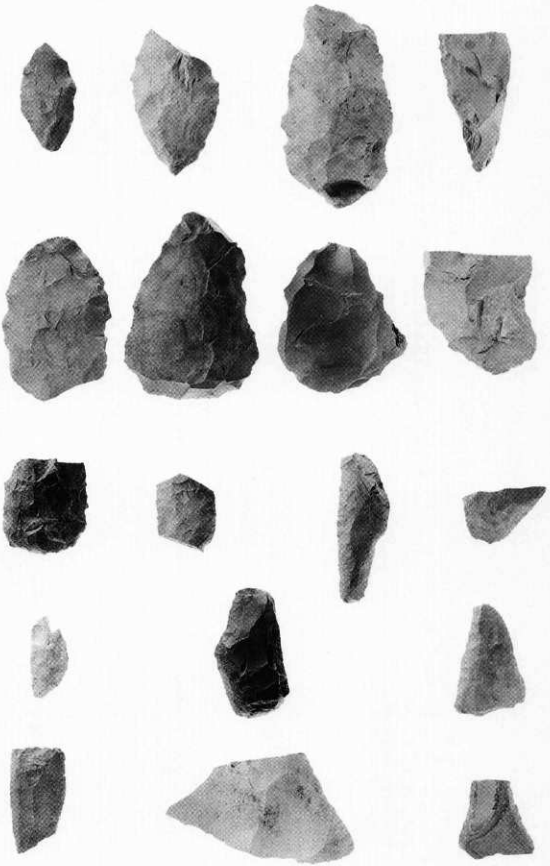


1　包含層出土のⅡ群土器(11)・Ⅲ群・Ⅵ群土器

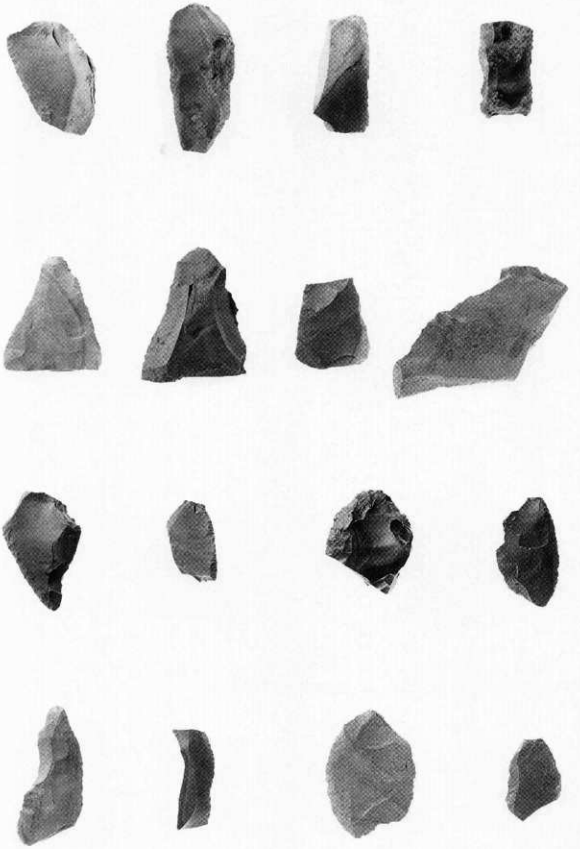


1　包含層出土の石器（石鏃・つまみ付きナイフ）

図版34

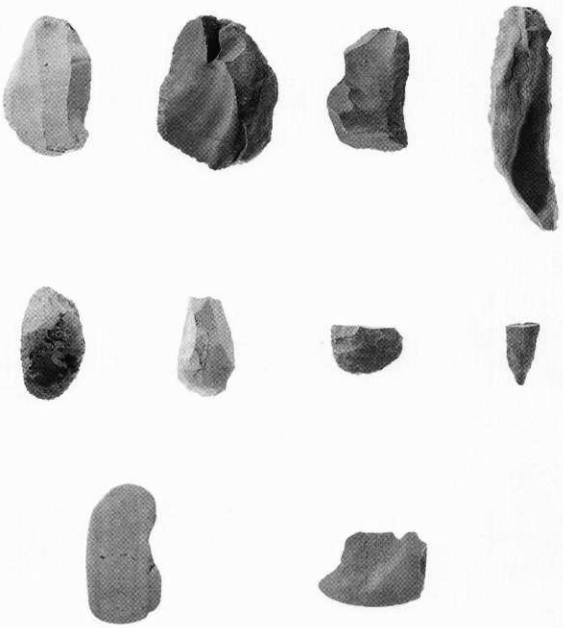


1　包含層出土の石器（両面調整石器・スクレイパー）

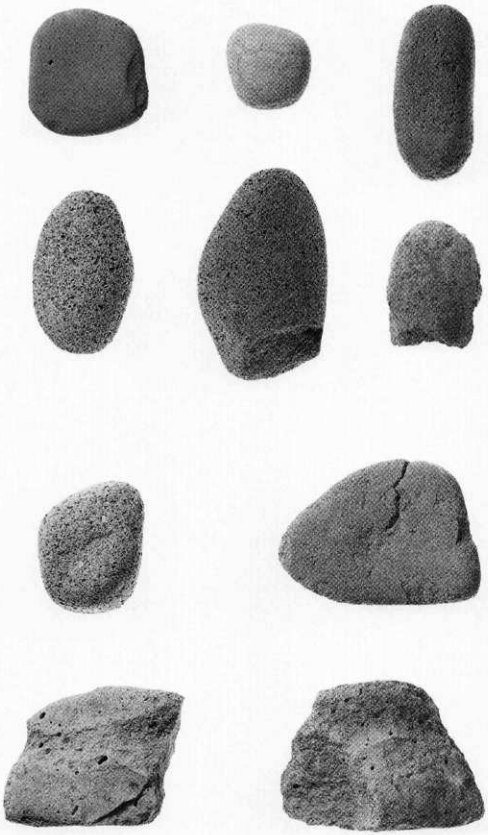


1　包含層出土の石器（スクレイパー）

図版36

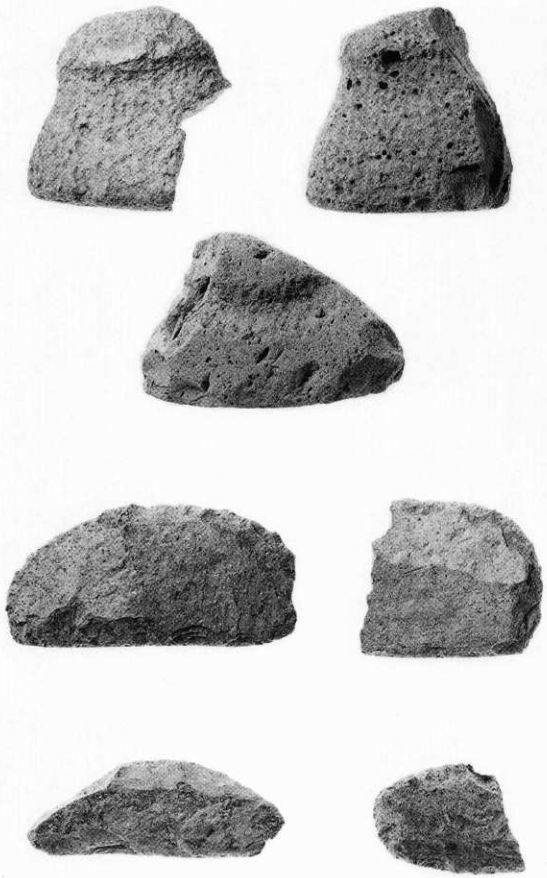


1　包含層出土の石器（スクレイパー・剥片石器片・石斧）

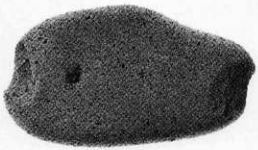


1　包含層出土の石器（たたき石・北海道式石冠）

図版38

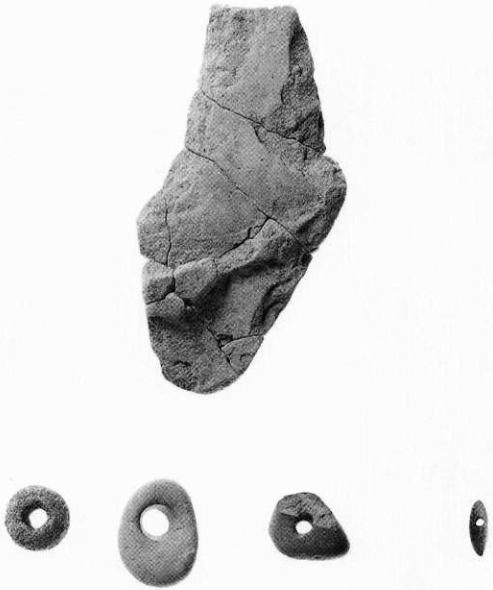


1　包含層出土の石器（北海道式石冠・偏平打製石器）



1　包含層出土の石器（偏平打製石器・石鋸・石錘・砥石）

図版40



1　包含層出土の石製品（青竜刀形石器・土製品・有孔自然石・ヒスイ製玉）

引用参考文献

阿部千春ほか　1992「八木B遺跡」南茅部町埋蔵文化財調査団

阿部千春ほか　1993「八木A遺跡・ハマナス野遺跡」南茅部町埋蔵文化財調査団

阿部千春ほか　1995「ハマナス野vol.Ⅳ」南茅部町埋蔵文化財調査団

石岡憲雄　1986「施文原体の変遷―円筒土器―」『季刊考古学』17

石田正夫　1983『国鉱地方の地質』通商産業省工業技術院地質調査所

内山真澄　1980「寿都3遺跡」『寿都町文化財調査報告書Ⅱ』寿都町教育委員会

江坂輝彌　1970『石神遺跡』石神遺跡研究会

大沼忠春ほか　1976『元和』乙部町教育委員会

大沼忠春　1986「道南の前期土器群の編年について（Ⅱ）」『北海道考古学』第22輯

小笠原忠久　1981ａ『ハマナス野Ⅲ』南茅部町教育委員会

小笠原忠久　1981ｂ「ハマナス野遺跡」『縄文文化の研究』8　社会文化

小笠原忠久　1982『ハマナス野Ⅶ』南茅部町教育委員会

小笠原忠久　1983『ハマナス野Ⅸ』南茅部町教育委員会

小笠原忠久　1984ａ『ハマナス野Ⅹ』南茅部町教育委員会

小笠原忠久　1984ｂ「北海道南西部における縄文時代前・中期の集落」『北海道の研究』1考古編Ⅰ

小笠原忠久　1989『ハマナス野vol.Ⅻ』南茅部町教育委員会

小笠原忠久　1990『ハマナス野vol.ⅩⅢ』南茅部町教育委員会

久保　泰ほか　1983『白坂』松前町教育委員会

久保　泰　1991ａ『札前Ⅲ』松前町教育委員会

久保　泰　1991ｂ『松城遺跡』松前町教育委員会

熊野喜蔵・八木光則　1974「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器群」『北海道考古学』第10輯

児玉作左衛門ほか　1958『サイベ沢遺跡』市立函館博物館

斎藤　傑・氏江敏文　1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』松前町教育委員会

桜井清彦　1961「北海道山越郡落部遺跡」『日本考古学年報』12

桜井清彦　1964「北海道山越郡オトシベ遺跡」『日本考古学年報』15

㈶北海道埋蔵文化財センター　1985『湯の里遺跡群』北埋調報18

㈶北海道埋蔵文化財センター　1986『木古内町建川1・新道4遺跡』北埋調報33

㈶北海道埋蔵文化財センター　1987『木古内町建川2・新道4遺跡』北埋調報43

㈶北海道埋蔵文化財センター　1988『木古内町新道4遺跡』北埋調報52

㈶北海道埋蔵文化財センター　1995『豊浦町高岡1遺跡』北埋調報88

㈶北海道埋蔵文化財センター　1998『上磯町茂別遺跡』北埋調報121

㈶北海道埋蔵文化財センター　2000ａ『長万部町花岡2遺跡・花岡3遺跡』北埋調報139

㈶北海道埋蔵文化財センター　2000ｂ『調査年報12　平成11年度』

沢　四郎ほか　1975「釧路市北斗遺跡調査概要」釧路市教育委員会

柴田信一　1991ａ「八雲町より出土した魚形石器について」『南北海道考古学情報』第3号

柴田信一　1991ｂ「八雲町の続縄文時代の遺跡と遺物について」『文京考古』第6号

柴田信一　1995『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会

菅江真澄著　内田武志・宮本常一編訳　1980『菅江真澄遊覧記』2

鈴木正語ほか　1995『釜谷５遺跡』木古内町教育委員会
鈴木正語ほか　1996『釜谷遺跡』木古内町教育委員会
高橋正勝・小笠原忠久　1980「４　縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』
田川賢蔵　1956「トコタン遺跡について」『先史時代』第四輯
田川賢蔵　1958「北海道山越郡元山遺跡」『日本考古学年報』10
武内収太・山田悟郎　1968「山越郡八雲町熊田遺跡における緊急発掘調査」『ゆうらふ』第12号
竹内理三編　1987『角川地名大辞典』
千代　肇・岩本義雄　1975「北海道八雲町上八雲の遺跡について」『北海道考古学』第11号
千代　肇　1975「北海道の円筒土器文化」『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
鍋島直久　1991『ハマナス野vol.Ⅲ』南茅部町教育委員会
野村　崇　1982「八雲町トコタン２遺跡」『北海道における農耕の起源（予報）』
野村　崇　1985「北海道出土の青竜刀形石器とその系譜」『北海道縄文時代終末期の研究』
長谷部言人　1927「円筒土器文化」『人類学雑誌』第42巻第１号
福田裕二　1992『ハマナス野vol.Ⅳ』南茅部町教育委員会
福田裕二　1995『八木Ａ遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
福田裕二　1997『八木Ａ遺跡Ⅲ・八木Ｃ遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
北海道函館中部高等学校考古学研究部　1974『道南遺跡分布事典』
北海道開拓記念館　1980『熊野喜蔵氏資料目録Ⅱ』
町田　洋・新井房夫　1992『火山灰アトラス』
松浦武四郎著　吉田武三校註　1970『三航餘禄日誌』上巻
松崎岩穂・渡辺兼庸　1959「北海道紋川・十兵衛沢・勝山館遺跡」『考古学雑誌』第44巻第４号
三浦孝一　1980『山崎遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
三浦孝一　1982『栄浜１遺跡発掘調査概報』八雲町教育委員会
三浦孝一　1983『栄浜』八雲町教育委員会
三浦孝一　1984「第二編先史時代」『改訂八雲町史上巻』
三浦孝一　1987『台の上遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一　1989『浜松２遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一　1990『八雲３遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
三浦孝一　1998『栄浜１遺跡Ⅳ』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1986『栄浜１遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1987『栄浜１遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1988『山越５・６遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1991『浜松２遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1992『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1993『大関校庭遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1995『浜松５遺跡』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1997『大新遺跡Ⅰ』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1998ａ『大新遺跡Ⅱ』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1998ｂ『旭丘１遺跡』八雲町教育委員会
峰山　巌　1972「先史時代」『豊浦町史』豊浦町

峰山　巌ほか　1977『栄浜遺跡』乙部町教育委員会
峰山　巌ほか　1986『北黄金貝塚』伊達市教育委員会
三宅徹也　1974「青森県における円筒下層式土器群の地域的展開」『北奥古代文化』第6号
三宅徹也　1980「円筒土器」『縄文文化の研究』第3巻　縄文土器Ⅰ
三宅徹也　1989「円筒土器下層式」『縄文土器大観』1　草創期早期前期
村越　潔　1974『円筒土器文化』
八雲町　1984『改訂八雲町史上巻』
山田秀三　1984『北海道の地名』
山内清男　1929「北関東に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号
吉崎昌一　1961「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』26巻1号
吉崎昌一　1965「縄文文化の発展と地域性　北海道」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』

報告書抄録

ふりがな	やくもけしらりかにいせき
書名	八雲町シラリカ２遺跡
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第142集
編著者名	遠藤香澄・鎌田　望・藤原秀樹・立田　理
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069－0832　北海道江別市西野幌685番地―1　ＴＥＬ011－386－3231
発行年月日	西暦2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
シラリカ２遺跡	北海道山越郡八雲町黒岩289・290・586番地	01346	B－16－64	42度21分18秒	140度17分58秒	19990506～19990831	4,980m²	高速道路北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
シラリカ２遺跡	集落跡	縄文時代 早期 前期	住居跡　２軒 （早期後葉１、前期後葉１） 土壙　２基 焼土跡　13か所 集石　１か所	縄文土器11,580点 東釧路Ⅲ式 円筒下層ｃ式 円筒下層ｄ式 石器等　49,774点 石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石核・たたき石・北海道式石冠 偏平打製石器・石錐・砥石・石錘 青竜刀形石器 土製品	ヒスイ製の垂飾

財北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第142集

八雲町

シラリカ２遺跡

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成12年３月31日

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地―１
TEL(011)386-3231

印　　刷　山藤印刷株式会社
〒063-0051　札幌市西区宮の沢１条４丁目16番１号
TEL(011)661-7161